



集詩明已
著明有原蒲



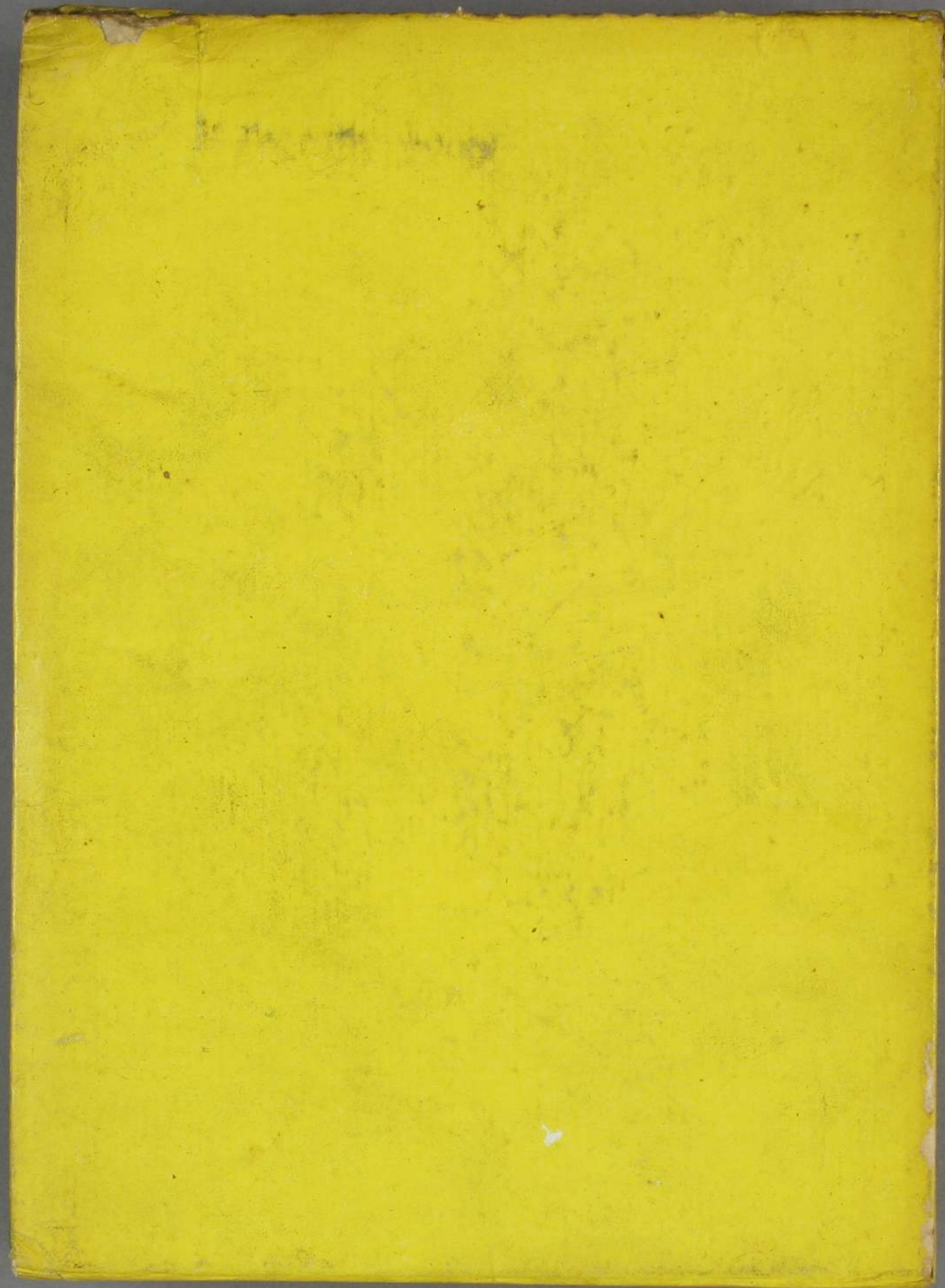
1922
A R S

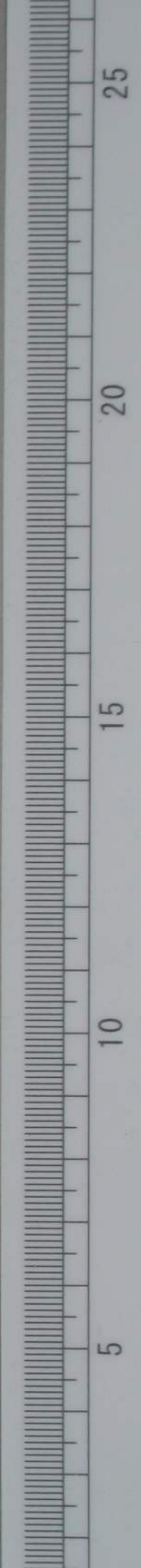
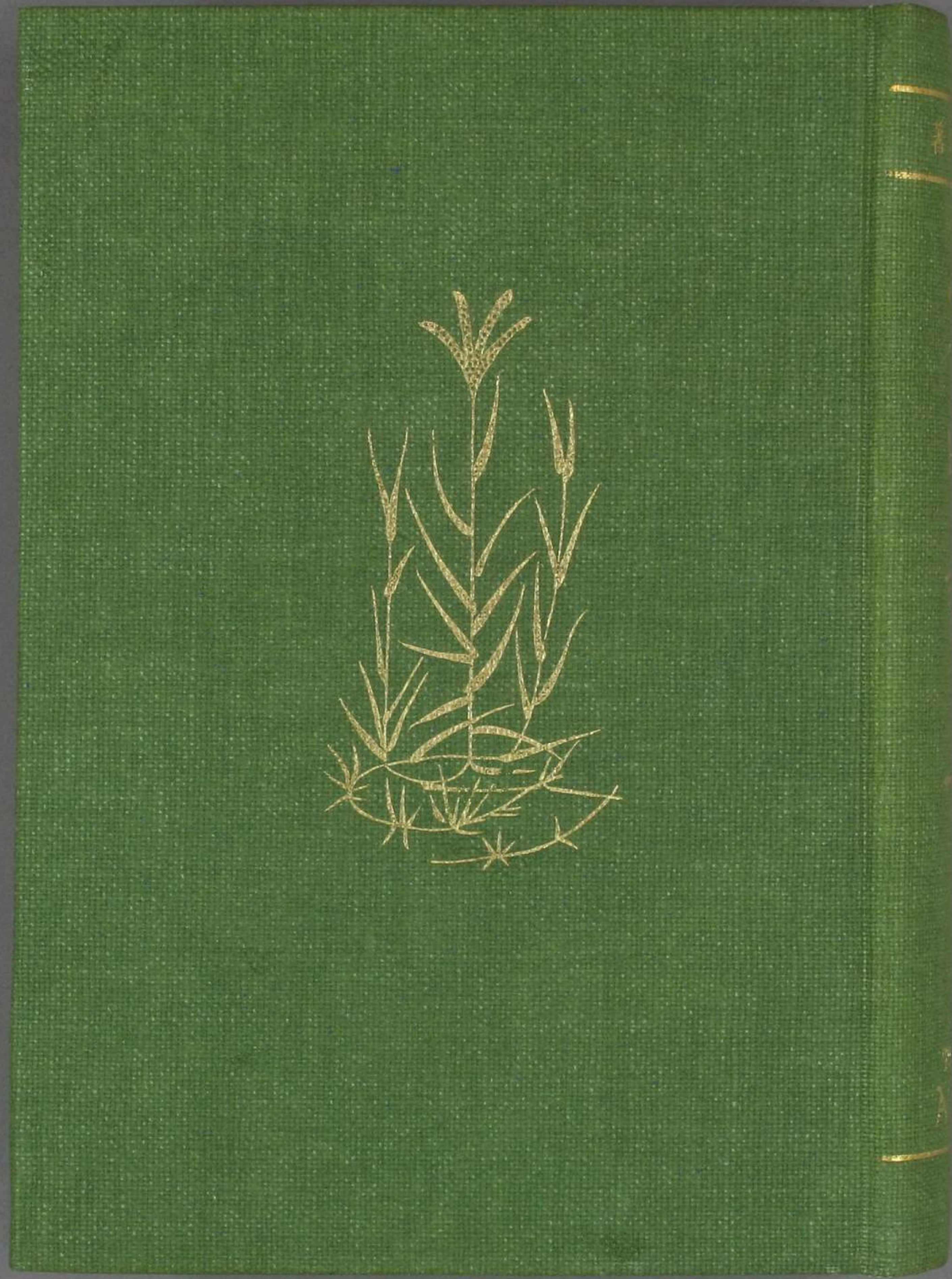


有明詩集

蒲原玄的著

A R S

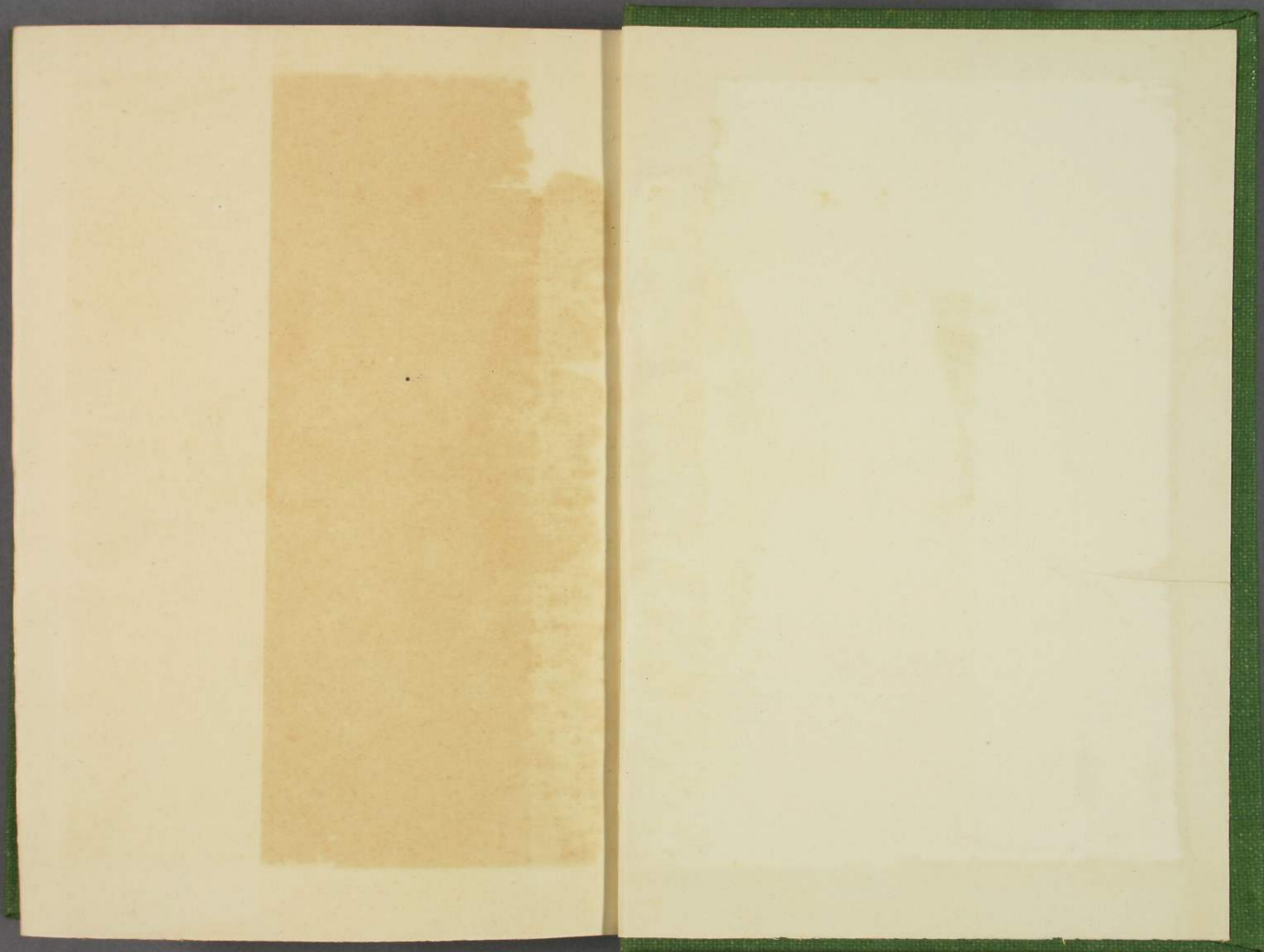




著明有原蒲

有明詩集

TOKYO
A R S



有明詩集

著明有原蒲

註自

ほし血の豹・櫻書自

ばかわ草・歌哀絃獨・集鳥香

譯讀と詩文散



1922

TOKYO A R S

有明詩集

著明有原蒲

註自

ほし血の豹・像畫自

ばかわ草・歌哀絃獨・集鳥春

譯翻と詩文散



1922

TOKYO A R S

自序

わたくしは何時までも詩歌に於ける初心者熱意を以て、藝術の修練工夫につとめたいとおもつてゐる。

藝術上の修練工夫とは何かといふに、それは我々の無始の煩惱の修練工夫に外ならぬ。

あらゆる煩惱の薰染・積聚・味識が人生の基調であるが如く、それに相應し交徹する感覺の綜合整調が藝術を生ずるのである。

かくの如く藝術上の感覺の綜合整調が行はれて、始めて個人の内的經驗が心理的に自然の生命の律動的表現となるのであらう。即ち客觀的のものとなるのであらう。

これが藝術に謂ふところの暗示の開展である。

暗示とは熱意である、全情意的のものである。

それであるからわれ等にとつて、この熱意は個人の疑惑に封じこめらるるものでは

ない。それはまた殻を被つたものではない。絶えず流動、交錯、反映、照應しつつも常にそれ等の諸特性を綜攝する情意力である。

自然の一心がここにめぐまるるのである。ここに言語の自由が生じて来るのである。その自由は素より言語みづからの約束を伴ふものであるが、その約束は自然であるが故に自由である。

ここに言語が純粹に國語的表現に達するのである。

無量壽經優婆提舍願生偈に曰く、

「實性功德の草は柔軟にして左右に旋れり、觸るるもの勝樂を生ずること迦旃隣陀に過ぎたり。」

また曰く、

「寶華千萬種にして池、流、泉に彌覆す、微風華葉を動かすに交錯して光亂轉す。」
おもふに、この二偈にはまことに藝術的價値のゆたかなるものがある。

素より願生偈はすべて一心の内容を開いたものであるが、わたくしはわけてもこの

二偈に依つて目を醒まさるるやうな心地がする。堅い宗教の殻がはじめて破らるるやうな心地がする。これまでの宗教家はかかる藝術性・感覺性をむしろ危険に思つたのであらう。これに特別の解釋を附けるか、或は看過するより外はなかつたであらう。

併しながらこの二偈には感覺の綜合整調に依て淨化された個人の內的經驗がある。客觀された律動がある。そこに全情意的人生が表現されてゐる。

それゆゑにその言語には流動、交錯、反映、照應がある。即ち純粹に言語の表現が行はれてゐる。

自然の一心が暗示されてゐる。

わたくしはこの二偈を讀誦する時、極めて近代的の詩篇と共通融合する情趣を感じるものである。

その中にはボオドレエルがあり、エルレエヌがある。

その中には自然法爾に交徹する象徴的殿堂の闡明讚嘆があり、自由なる言語の音樂的色調がある。

これはまた無量壽經の佛々相念の世界であり、大寂定、普等三昧である。

佛々相念とは創造である。それゆゑに藝術的表現の根本である。佛々相念するところに全情意の綜合整調と言語の律動的開展を遂ぐる故以のものがあつた。

そしてその全體が大寂定、普等三昧であらう。即ち自然の一心であらう。

自然の一心とは名の始であり終りである。單に超絶的至上者の替名ではない。その名の始終は佛々相念に依つて表現せらるべき言語それみづからである。

その自然の一心は現實隨順の人生觀としてわれ等にめぐまるる時、その一念の信に極みなき表現世界は開展し來るであらう。

高祖に依つて心理的に發揮せられた現實隨順の自然の義の根本たる眞實教の考究體験はまことに容易ならぬものがある。

わたくしは高祖に依つて、この眞實教の一大事因縁を聞くことを得て、一念の藝術の世界、名を以て物を攝する言語の始終を絶えず憶念するものである。

表現なき信念は空無であらう。

それゆゑに眞實の表現は、單に信念の言語的表白ではなく、言語みづからの律動的

整調であらねばならぬ。

ここに藝術が生ずる

藝術は戀愛的一念の至極の開展である。

即ち宿縁の開發である。

宿縁とは戀愛の歡喜と苦惱との無始の薰習である。

自然の生命の光の中において個人の内的經驗は反映照應する。それが自然のめぐみである。

その自然のめぐみに浸ることに於て藝術の特異性と複雑性とは肯定される。

藝術は戀愛である。

純化は尊ぶべきであるが、潔癖は一の迷念であらう。

わたくしの求むるもの、わたくしにめぐまるるものは暗示の開展であつて、直接の啓示ではない。

天啓は矢張り一の外面的奇蹟に過ぎぬものであらう。

享樂の惡魔は、官能の中に安座して、絶えず微笑してゐる。

美なる また真なる直接の啓示は惡魔の建立するこの世の極樂であらう。

惡魔との誓に背いて、これに對して思はず南無佛を稱へたものは、その稱ふる瞬間に魔塵の聲を聞いたといふではないか。

直接の啓示は誘惑された假信者の極樂である。それゆゑに容易に南無佛が稱へられるのである。

個人的智的享樂は人生を破滅に導くべきものである。それは無信なる故に起るのではなく、信するものの假面を装ふが爲めに起るのである。

人生の根本には容易に信じ、容易に稱へられぬものがある。

無信なるが故に衆生界は眞實である。

再び云ふ、藝術は諸煩惱の全情意的修練工夫であると。

われ等の日常生活は異學異見に依り、實狀實勢に依つて常に脅かされてゐる。

併しながら藝術が宗教の固定した殻を破つて新鮮なる感覺にめざめた時、翻つてまたその宗教をして絶對歸向の内容たる全情意的藝術的讃嘆を擇ばしめた如く、われ等の藝術は、その藝術の表現の自由と無限とを以て、いつが代にも一念のめぐみにあづかるものであらう。

藝術は現實隨順の一念の創造である。即ちそのところに豫言を必要とせぬ確實性が認められる。

それゆゑに眞の藝術家はこの煩惱の人生を強て藝術化せむとする智的享樂の個人的欲念に對する自然法爾の批判に與るを得て、現實世界のさながらの肯定と進展とに於て、絶えざる懺悔を創造するものである。

藝術は理智化したる、個人的・享樂的・概念的・威儀的の代衆生苦を卑しとする。

藝術に依つてすべてのものは精神化する、一疋の猫も、一連の母音も。

わたくしは無義の義なる一心の言語の、國語の統ぶる世界に歸依する。

大正十一年二月十七日

鎌倉にて

著者 識

序歌

翡翠の籠に揺られつつ
 われは眠れり、かかるをりしも
 わが歌は何をか夢む、
 いとも酷かる現実か、――
 ああ、なにゆゑにすすり泣く、
 わが魂よ。

1

傷つきしわが心の臓よ、
 血の凝り呻きうごめく、
 誰かかくしだきてありし、

何ゆゑにいつまで黙す、
 忍辱のその根づよさに
 あだしたる「時」も泣きなむ、
 われながら、しかも正眼に
 そのさまをうち見やりつつ、
 一滴の涙もいせず、
 人目避け、ひたもの潜む、
 盗みせしもののごとくに。

あかあかと火に燃えて
 煩惱の雪は降りいづつ、
 その雪の埋みもはてず、
 そが中に灰ともならで、

なほ残る執着の舍利、――
 これぞ、あはれ、人間なれば、
 思ひつつ、日ごと夜ごとに、
 止むなくも犯せる罪咎。

乾きたる雪は砂かと
 物かげに残されてあり、
 雪としも誰か思はむ、
 さあれ、けふ、雨は降りきぬ、
 今はなし、痕かたもなし。

山つばき赤く咲けるも

4
 たはやすく思はれぬもの、
 いつしかに乙女となりて
 人の子のにほひいでぬる、
 そを見れば胸はとどろく、
 あはれあはれこれぞわが身の
 生涯の大事とは知る。

有明詩集目次

自畫像

出現

恐ろしいちから……………	二
わが眼……………	四
さまざまな匂ひ……………	六
出現の歌……………	八
凝視……………	九

光明涌出

われは信ず……………一四
 現實の渦……………一八
 不 死……………二〇
 光明を塗れ……………二二
 湧き出でよ……………二三
 光 明 讚……………二六
 あ れ 野……………二八

感覺の整調

狂 想(都會の印象)……………三三
 雪 景……………三四
 破 滅(衰頹的夜景)……………三五
 食 卓……………三六
 夜 曲(大川端にて)……………四二
 見えぬ花のほひ……………四三

冷血と倦怠……………四五
 或、蒸熱き日の感覺的效果……………四七
 鸚 鵡……………四八
 明 星……………五〇
 途 上……………五三
 冬の田園情調……………五五
 麻痺と誘惑……………五六
 白い夢の通夜……………五八
 女 の 顔……………六〇
 赤いからす……………六一

羈旅小景

待 宵 草……………六六
 臭須のほひ……………六七
 赤き破滅……………七〇

印 象 七三
旅 七四

病熱と錯覺

迷 眩 七六
生命の香 八一
滅のうつろ 八三
黒 き 霧 八五

哀愁のしらべ

む せ び ね 九〇
古きかなしみ 九一
緑の印象 九三
樂 音 九四
しめやかに雨は降る 九六

海 九八
水 禽 一〇〇
雨 も よ ひ 一〇一
山の手の晩秋 一〇二
こともなき面もち 一〇五

初心鈔

よもぎのほひ 一一一
猿 澤 の 池 一一二
か す が 一一三
京のともしび 一一三
みやこのなかに 一一四
むらぎもの 一一六
ひ と が 一二七
北 國 一二八

浪のおと.....一九

豹の血

茉莉花(小曲)

智慧の相者は我を見て.....二四
 若葉のかけ.....二五
 靈の日の蝕.....二七
 月しる.....二八
 見おこせたまへ.....三〇
 茉莉花.....三一
 寂靜.....三三
 あだしおもひ.....三四

朱のまだら

偶感.....二六
 朱のまだら.....二六
 ともしび.....二四
 この時.....二四
 いのちの花かげに.....二四
 夏の歌.....二五
 秋の歌.....二五
 秋のこころ.....二五
 大河.....二六
 麗の水.....二五
 淨妙華.....二六
 信樂.....二六
 阜月の歌.....二六
 晩秋.....二六
 かかる日を冬もこそゆけ.....二七

序の曲

一七四

水のおも

一七七

おもひで

一八二

碑銘

一八三

その一

一八三

その二

一八四

その三

一八五

その四

一八五

鐘は鳴り出づ

一八七

不安

人は今地にうつ伏して

一九四

絶望

一九六

草びら

一九六

孤獨

一九九

坂路

二〇一

苦惱

二〇三

陰濕の嘆き

二〇五

滅の香

二〇八

椽の雨

二一一

底の底

二一三

死の林

二一五

われ迷ふ

二一七

穎割葉

二一九

海蛆

二二一

沙は焼けぬ

二二二

大鋸

二二七

悪の秘所

二三〇

どくだみ

二三四

やまらど

二三七

春鳥集

花のをぶえ

瑞 香 二四二

あまりりす 二四四

わがおもひ 二四五

公 孫 樹 二四九

みなといり 二五一

朝 な り 二五四

家根のくさ 二五七

魂 の 夜 二五九

誰かは心伏せざる 二六三

鬱 憂 二六四

たそがれどき 二六六

渴 望

五 月 霽 二六八

花 が め 二七〇

夢のむすめ 二七二

それゆゑに 二七七

これに満てむ 二八二

渴 愛 二八三

ほ だ し 二八五

末 法 講 二八六

君にささぐ 二八八

秋 二八九

楽しきやさあれ 二九一

沙 門 不 淨 二九三

枝藝のうたげ 二九四

「海の幸」……………二九五
「天平の面影」……………二九七

日のおちほ

ひとしづく……………三〇〇
静かにさめしたましひの……………三〇一
夢の花……………三〇五
誘惑……………三〇八
人は人として……………三一〇
遺曲……………三一一
夏まつり……………三二四

傳奇的構想

姫が曲……………三三三
さび斧……………三三〇

人魚の海……………三七一

獨絃哀歌

煩 惱(小曲)

さまよひのうた……………三九四
苦惱の畑のつとめ……………三九五
薔薇のおもへる……………三九七
さらばよ君……………三九八
萬法流轉……………四〇〇
よきしほ……………四〇一
蓮華幻境……………四〇一
草やま……………四〇四
優曇華……………四〇六
頼るは愛よ……………四〇七

その一……………四〇九

その二……………四一〇

終のゆふべ……………四一一

紫蘇の葉

憂愁……………四一四

そのねがひ……………四一五

わがこころ……………四一六

自然……………四一七

わかきいのち……………四一八

戀の園……………四一九

歡樂……………四二〇

水雨……………四二一

まなざし……………四二二

落葉林の冬の日……………四二三

草わかば

黎明

幻影……………四三三

光の歌……………四三六

靈鳥の歌……………四三八

佐太大神……………四三九

新鶯曲……………四四〇

獨語……………四四一

序の歌……………四四〇

日神頌歌……………四六一

民ぐさのほぎうた……………四六四

可怜小汀……………四六五

牡蠣の殻……………四七〇

君や我や……………四七三
 タづとめ……………四七六
 かすかに胸に……………四七九
 高潮……………四八二

新譜

わかき女のうたへる……………四八二
 その一……………四八二
 その二……………四九四
 その三……………四九五
 わかやぐひかり……………四九七
 彩雲……………四九九
 戀ぐさ……………五〇一
 ゆく春……………五〇三
 野路は戀路にあらねども……………五〇五

散文詩と翻譯

暗示の森

枳殼……………五〇七
 問ふをやめよ……………五〇九
 菱の實採るは誰が子ぞや……………五一二
 山の修多羅……………五二六
 脚痕……………五三〇
 狐の剃刀……………五三四
 夢……………五三〇
 驟雨……………五三八
 地獄の如き實在……………五四一
 海の思想と誘惑……………五四四
 魂の法會……………五五二

世相

五五九

常世鈔

向日葵

五六六

述懐

五六七

地の歌

五六八

明星

五六九

「ルバイヤット」より

五七一

その一

五七一

その二

五七三

海邊の墓

五七三

宿縁

五七五

愛のまなざし

五七六

希望

五七八

「エニスの牧歌」

五七九

型燈

五八一

宿驛にて

五八二

静晝

五八四

日没後

五八五

生か死か

五八六

海邊にて

五八八

蛇のアンダンテ

五九〇

猫

五九二

萬法交徹

五九三

海風

五九五

懊惱

五九六

母音

五九八

眠

五九九

たち返る聲々

六〇一

森の木立

六〇三

涯なく暗き甘寝……………六〇五

車中吟……………六〇六

月光……………六〇八

おぼろの川に……………六〇九

こころのうちに泣く涙……………六一〇

古き調……………六一三

秋の歌……………六一三

シヤアルロア……………六一五

倦怠……………六一八

詩法……………六一九

秋の嘆き……………六二二

冬のおもひ……………六二五

洪水のあと……………六二八

赤の單色畫……………六三一

世界の外へ……………六三四

執れか眞……………六三六

月のたまもの……………六三八

幻覺……………六四〇

貧者の眼……………六四四

描かむと欲する希望……………六四八

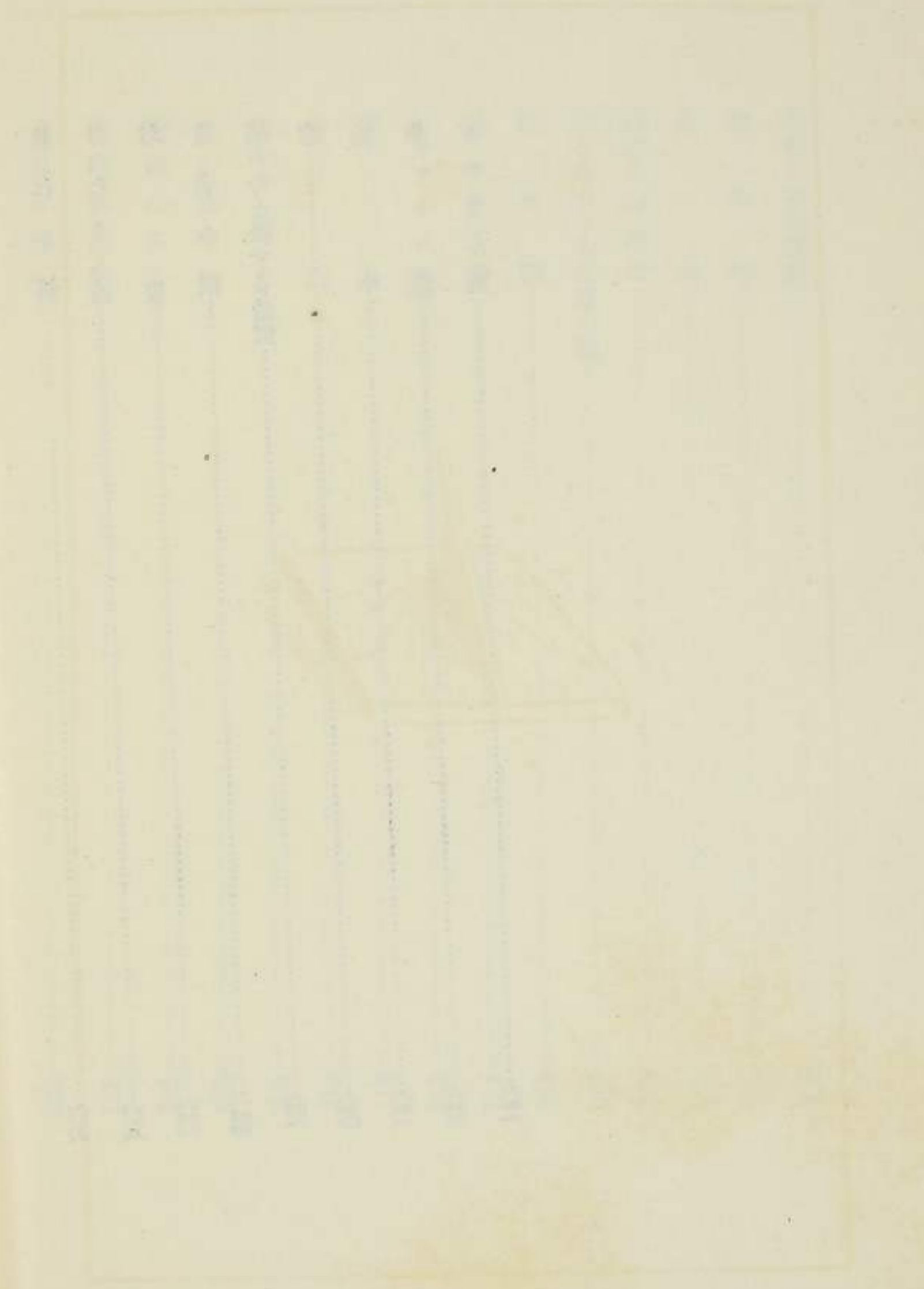
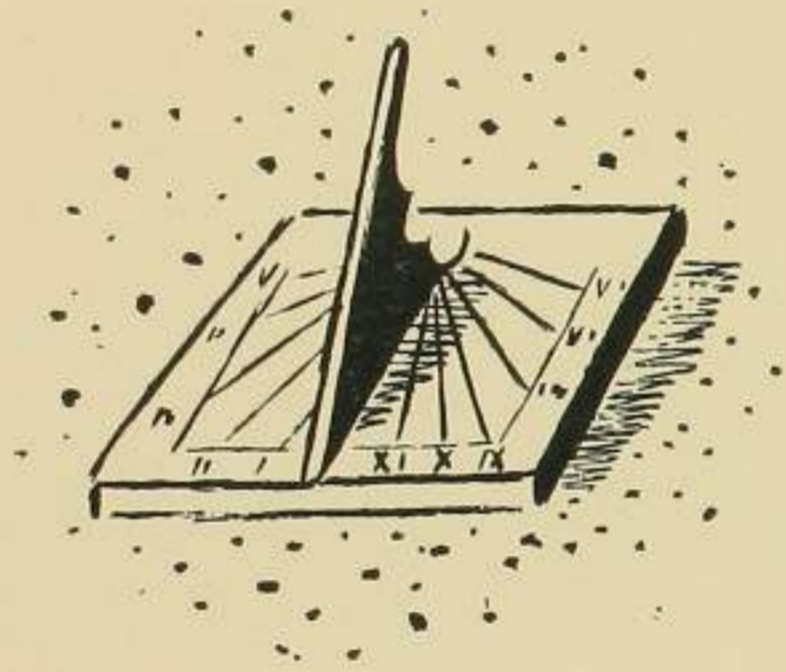
窓……………六五〇

的中……………六五一

夢想……………六五三

ぎやまん賣……………六五五

自 畫 像



出
現

恐ろしいちから

恐ろしいちからで虚空を押移る鱗雲、
 西から東へ沈黙の颯風が歩む、
 進み躍り飛ぶ、さあれただ押移る、
 其處には無礙の混雑と不定の整調、
 鴿の鳥の光明の胸毛——その断片、
 見えざるちからはいつも断片を溺愛し、
 戀ひ焦れ引裂き、うち撈り統合す——
 残酷な莊嚴、そしてまた陶酔の妙音、
 眞我の極へ中心へ、虚空を押移り、
 無数の雲の鱗がひたすらに燃えてゆく。

しばらくも止まらぬその開展と集中——
 無限はただ無盡にありて妙なる眼を睜る、
 洪水の海と雪なだれの谿の底に、
 しかも見よ、玻璃の窓を、暫時の温室を、
 曇つた光に青く蒸れた魂を、
 倦怠の夢と無暴な雑念の氣ぜはしい羽音に、
 その頭その胸、その全身を悩まし、
 自らを無智の獄卒、妄執の罪人として、
 透き徹る牢獄の壁をみつむる魂を、
 洪水の谿と雪なだれの海の底に。

見るからに苔蒸す玻璃の窓、
 かすんだ光の雨が蒼白く降る中を、

天體と日輪を模擬した草の花から、
 薬の粉の金の隕石が静かにとどろく、
 世紀の徽のにほひ愛着のうつり香、
 わが魂は苔蒸す玻璃に飢ゑて、
 わが手は青さびた牢獄の壁をさぐる、
 沈黙の颯風と残酷な莊嚴、
 眞我の極へ鱗雲が押移る。

わが眼

わが眼——自信の緑の膏は瞳を供養す、
 こはこれ發相にしてまた直に印現、
 謔妄と調絃と兩つを兼ねた宇宙の體得者、

狂氣の如き反映にからむ無礙の帝王。

わが眼——碧色の血の凝りは瞳を燃す、
 雪と焰の大沼に自ら溺れ且つ照らす青蓮華、
 わが耳は沙漠の海に宿る車渠の満開、
 星の渦硫黄の窟にかくれた酒の泉。

わが皮膚は苦行の道場鬘房の絨氈、
 冷やかな石に地熱を吸ふ獅子の恍惚、
 われはわが頭に本より生れぬ言語を育み、
 われはまたわが心に本より死なぬ赤子を悲み嘆く。

われはこれ梅檀の林虚空の襲の大浪、
 高山の車輪の一切の變裝者。

際もなく魂を食み盡すが故に無上の法樂——
 わが密嚴詩、そこに同時を食る刹那を聴く。

さまざまな匂ひ

さまざまな匂ひがわれをめぐる、
 陽炎の土に萌え出る穎割葉のにほひ、
 海百合の寶冠に滅え入る現の光のにほひ、
 汽罐車に泌み徹る紫の血のにほひ。

さまざまな匂ひがわれをつつむ、
 火山の根を肥す溶けた紅玉のにほひ、
 虚空に燃え盡す星の亞硫酸瓦斯のにほひ、

闇の洞窟に燐光を放つ苔のにほひ。

さまざまな匂ひの中に、わが身は、
 魚の如くあぎとひ動く、
 わが身の毛孔は無邊の香爐、
 われは今無礙の魂を供養す。

苦惱と法悦のにほひ、
 求法者を食む虎の鋭い牙のにほひ、
 猛獸に擲つ比丘の爛れた髓腦のにほひ、
 ただこれ一の實在、しかも匂ひに絡む匂ひ。

匂ひの色、匂ひの光、匂ひのいたみ、——
 わが身は赤子のごとく匂ひに溺れ、

8 わが魂は罪人にして、はた菩薩
さればぞ常に匂ひを貪り、匂ひを説く。

出現の歌

濛々とたちのぼる紺青の煙が、
速かに廻轉する眞紅の焰を捲きしめる、
熱し憤つて、それでもまだ静かな白金の星から、
瑠璃いろの電光が大屈折を描く。

無数の約の雲と雲とが満天に犇き合つて、
血の氣を失つた火山が戦き、よろめき、
沈みもやらぬ落日が皮肉なる裸形に蹲り、

金と青との鸚哥が地に伏してせせら笑ふ。

更にまた橄欖と膽礬との熔岩がなだれ落ち、
眞紅の焰が結晶しては溶解し、そして、
廣大な青蓮華が一切を包むそのひまを、
緑と眞珠の海が出現の歌を受胎する。

凝視

9 われは今ひとつの壺を描く、
ただひとつの焼け爛れた壺——それにて足る、
毒の蜜をみづから甜る花の唇もなく、
蛇の女の腫もなく、不朽な書の木乃伊もなく、

精巧な帷もなく、また壺を載する卓もなく。

壺——鎔けとろむ火と灰の凝視者、

しかも一切は其處に——陶ものの地膚に、

その口に、その耳に、その肩に、その腹に、

見よ其處に、頽れ藥の憂鬱と動き絡む色彩を、

無限に沈み無限より湧きたつ霜と焰を。

われもまたさながらにその壺に入る、

壺に入り、壺に收り、壺となり壺と目醒む、

火に媚びる蜥蜴と殻を脱ぐ人魚の歌と、

日々夜々に爆發する天體の烽火と、

それ等はすべて壺に——われは壺を凝視す。

火と灰の壺はまた壺なるわれを擁く、

わが身の茶毘と、わが生の開展、

輓歌と法悦と讚嘆と。——色は今色を呼び、

地膚の海から流れ出る頽れ藥力の膏、

霜と焰の嵐はただ一つの壺を描く。

わが壺、壺にありて凝視し、我にありて開展す、

我にありて凝視し、壺にありて開展す、

壺は壺を隠し、壺は壺を現はす、

われもまたここに壺を描き了る、

焰と灰の壺を、日々夜々に爆發する星の一つを。

光明涌出

われは信ず

併しながら苟且にも眼を開いたからには
 刹那も眼を閉ぢれば死滅の外はない、
 盛りあがつて涌きいづるばかりだ。
 高く捧げた眞黒な鐵鉢の中からも、
 光明の酒が波だつて流れ注ぐ、――
 さうだ、さうだ、中高になつて、
 この法界に涌きいづるばかりだ。
 かりそめにも眼をみひらいたからには
 瞬刻も眼をつぶつてはいけない、
 みひらいて、みひらけよ、それが

恐ろしいけれども、休息せぬ開展だ。
 光明のみが無盡の光明を生む、
 生んで生んで極るところがない、
 だから刹那も眼を離す餘地がない、
 刹那を活かせよ、その刹那は
 前後もなく、無差別時の一切に遍満する、
 一切は同時に開展し、開展し、
 普く現じ、頓に現じ、常に現する、――
 眼をみひらけよ、法界の光明の波に。

わが身を涌き上げ涌き上げて、
 光明の律の抑揚に隨順する、
 この外に何かあるならば

それは虚偽でなければ妄想の作爲だ。

深い信力を以てただ随順し、讚嘆する、
 信は智慧であり、三昧であり、
 神秘も奇蹟もわが身の現起、涌出そのものだ。
 大光明の漚しない自在の海は
 泡沫の如きわが身を現するにも
 その光明の一切を盡してゐる、――
 されば決定して眼をみひらけよ、
 われは現にわれと活く、
 われを信ぜよ。

現にわれがわれであり、またわれである、
 これのみが深刻な痛切な現實の深淵である。
 嫉妬と、苦惱と、愛慾と
 もはや名のみで連続に過ぎない、

血の、また闇の罪惡が、日夜に
 來つてわが身を食まうとも、
 怖れ悔むにも足らぬ幻影に過ぎない、
 われがわれを現するその中に
 満ち溢れ、注ぎ、渦巻く無盡の光明が、
 わが眼に、わが身に大なる志欲を
 放射するその疼痛にくらべては。

無智はわれとわが身を怖れる、
 見よ、わが掌の筋が今電火の如く輝く、
 指頭が星雲の如く渦を巻く、
 ただ随順して歡喜せよ、そして
 われはただ一句讚嘆する、

――われは信ず。

現實の渦

離れることがない、それを怖れる、
離れてゐるかもしれない、それを嫉む、
眼を開けよ、どこに怖れと嫉みとがあるか、
廣大な海の紺青の眼を開けよ。

再び閉ぢることなき眼を開けよ、
光明を飽くまで吸ひながら、また、
十方に光明を照らす源なるその眼を、――
ああ、われとわが手の錐で紺青の眼をさし貫く。

紺青の眼の海に殷紅の血が沸きたち、
昇る日と沈む日の現實の渦の灼熱が叫ぶ、
血潮の渦から、我が我が、我が……
躍り出でて、われとわが力を讃嘆する。

われは溺らさるることなき、我を信する、
そこに第一の名もなく第三の名もなき我は
常に恒に紺青の海から涌き出でる、
血の渦、われとわが手の錐の穂から涌き出でる。

信ぜよ、みひらけよ、見よ、讃嘆せよ。

不死

鸚鵡の窓にわが身は燻ずる、

わが名を歌ふものがある、しづやかに

鸚鵡の窓から火の如き雪の光が射し下す。

鸚鵡は火の如き雪の光に

翅は焼け胸は凍る、わが鸚鵡は死にたるか、

わが名を叫ぶものがある、わが身の血の脈に。

われは醒める、われは眼をさます、

わが名を慕ふものなし、ただ火の如き雪の光が、

わが身を焦熱の焚木とし、また碧い氷とする。

されどされどわれは醒める、死ぬことなし、

われは再びわが名を叫ぶ聲を聞くことなく、

火と雪の海にただひとり讃嘆する。

光明の律と清浄の韻に

わが身肉を深く刻みつつ、

死なぬわが身をわれは驚き、且つ愛す。

光明を塗れ

霜に凍てたいたましい大地に

21 鐘のねが泌み入る、泌み入る、泌み入る。

空には沈む日の光に叛き、

闇を驅り滅えてゆく雲の自殺。

北風が咆えたけり、せせらわらひ、

星の如き毒藥を更に更に粉に碎く。

いたましい大地のいたでの上に

やみの砂が泌み入る……

無数の砂のそのひとつひとつの

おそろしい新たな無量の痛み。

心の臓の月蝕が夜の空に鼓動する、
大地に疼きながら喘ぎ入る、

ああ喘ぎ入る、——蠻族よ、供養せよ、
毒の投箭に光明を塗れ。

涌き出でよ

さすらひびとよ、

おもてを掩ふな、心を伏せな、

無智な巡禮よ、わが身の道づれよ、

いたづらに悔ゆるな、見よ、見よ。

霧の空にしんじゆのかがやき、
鈴を振れ杖をあげよ、
ひびわれた鈴重たげな鈴、
音もせぬ鈴よしただ振れよ。

音もなき鈴を振り、
たよりなき杖をあげよ巡禮、
光もないおん身のからだ、
光がないとて悔むな。

罪をおもふがゆるえぞ旅人、
悪をおそるるがゆるえぞ鈴を振れ、
眞珠の海に霧のうしほ、
大空の渦に嵐のかがやき。

渦とともに涌きかへり涌き出でよ、
十方のみほとけとともに涌き出でよ、
——かうと信せば面をあげよ、
肉村の眞珠を信の絲に繫げよ。

信こそはまことの智慧無智を怖るるな、
廣大の志欲を起し光明の意志を仰げよ、
十方の渦とともに涌き出でよ、
毘盧舍那加來の願力の海に。

さすらひ人よ巡禮よ旅びとよ、
わが身の道づれよわが身よ、
無智よ無能よ鈴は鳴るただ信ぜよ、

一すぢの眞珠の嵐、十方の光の渦を。

光明讃

光明がわが肉むらに喰ひ入る、
 おそろしいわが肉むらのあかつき、――
 痛む、汗ばむ、うづく、めくらむ、
 光明がわが肉むらを散ずる、
 わが肉むらは、この時、清浄な芬陀利華、
 光明がわが肉むらを彫りちりばむ、
 わが肉むらは、あはれ、佛身のかげ、――
 わが身のあつかき、信の夜あけに、
 光明を讃ぜよ。

妙適の肉むらよ、そは今光明に躍り、
 活き、歌ひ、涌き出で、流れ注ぐ、
 このおごそかなわが身のあかつきに、
 闇を闇として怖るる闇もなし、
 闇もまた光明の影、光明のことば。
 跋折羅の戈は十方に血潮を漲らせ、
 痛み疼くわが肉むらは光明を信ず。
 わが肉むらはこの曉に法界に入り、
 甚深なる光明の欲がわが身を擁く。
 われはわが肉むら痛み、信じ、讃嘆し、
 しかもこのおふけなき身命の燈と華とを、
 光明の海なる遍照尊にささげまつる。

あれ野

見とほしもきかぬあれ野のなかで。
 うますに樹がのび樹が嘆くよ。
 まばらなねすみいろの枝に、
 ねすみいろの葉がかかり
 いつもまばらな色ざめた葉と葉とが、
 おごそかなひとつ調子で、
 絶えず絶えずあれ野の歌をうたふ。

絶えず歌ふ——ああ歌ふといふのか。
 見よ今その樹のかけにおごそかな

まじろがぬもののかげが纏ひつく——
 永劫の悲哀の菩提の座よ、
 わが身はいつしかその樹のかけで、
 滅のうたげに入り否定の夢に酔ふ、
 あれ野の歌におぼれながら

見よまた忍辱の樹のまばらな
 葉と葉とが合掌する合掌する、
 影もなく音もなきつむじ風のなかで、
 ひとつ調子のおそろしいちからが、
 あはれあはれ光明がそこに飛ぶ、
 永劫の莊嚴をあれ野として、
 すすどい光明がきららのごとく、
 ねすみいろの悲哀のうちに飛びゆくよ。

思想のおごりに過ぎぬ滅めつのうたげ、
せいたくな否定の夢のためにも――
わが身のためにも、おごそかに、
合掌するもののかげがある。
眼も迷ふ大だい象しょう徴ていのあれ野のただなかで、
われも、また、おのづからに合掌する。――
永劫の莊嚴を絶えずうたひつつ、
わが身はのびる、また合掌する。

感 覺 の 整 調

狂想——都會の印象

熱しただれたあかがねの粉末、
 疲れいきむ灰の野原、
 乾いた海に非實の破船——
 人人よ、そこに擁け、夢幻の胎盤骨を。
 頬を——見よ、不定の灰の頬を
 紫の瘡あとから滲み出るわらひ、
 暗緑色の刺からさいた花、
 怨恨の灰が積りに積る。

ただ執着に生きる記憶
 崩れあひ亂れあふ無智の更紗、
 解體した埃の原——そはあはれ、
 おびただしい颯風の殿堂。

そこにまた畸形の耳を聴け、
 劫のちからに捩れゆがむ耳の螺旋を、
 不可思議の諧和を、ただ聴きに聴け、
 人々よ、さて味へ、あかがねの眼を。

高熱の埃にまみれた野原、
 乾いた心の臓の大海に
 今ぞ灰だつ血液の満潮——
 誰か反芻む、海豹の影のわらひを。

雪景

戀をそそる待宵草のほのかな黄と
 失神した玉簪花の青と紫と
 日なたと陰と斑紋と縞とに
 一面の雪は霧とかけろふとの絨氈。

疲れた七寶のゆらめく光彩、
 なまこ薬にうるほふ陶器の膚、
 おぼあるの海蛇の眼の緑の反映、
 泡だつ淵瀬をくもらす鹿の血しほ。

そこにはまた湯氣に蒸しかへされた
 女の素肌の恍惚たる哀しみと
 死の須彌壇を照らす燭の火の
 皮肉な物凄しい異様なひらめき。

一面の雪は褪せてゆく金の霧と
 呼吸をひきとる紫のかけろふ、
 うちつづく畑のうねりの無限の列は
 昏倒する尼僧の禮讃の韻律。

切りたてた光の壁、烈しいその一撃、
 燃ゆる地獄の暗黒にわが眼はくらみ、
 うちのめされたわが魂の痕あとは
 冷刻な烙印のただれた朱のくちづけ。

破滅——衰頹的夜景

壊れた月がぼんやりと空を踏めく、
赤みざした黄ろい月影が夜なかなすぎの
さびしい街の並木の枝にもつれかかる。

なまぬるい風が今、そつと通つてゆく、
それはものも言はずに、よしもない淫樂の
夢に耽つて、悶え苦しむ吐息のやうに。

物かげからは蒼白い紙の屑が——おびえた
小鳥か——濕つぽい敷石の上をひそやかに、

廢れものの衰へた聲で嘆き、轉ぶ。

埃がたつ、——夜なかなすぎの貧血の街なかを、
腥い埃の幻が月の光に黄ばんでは滅える、
人通りは絶えたが肉の香の籠えた街なかを。

そして、そこには瓦斯が無益に燃えてゐる、
絶えず軽い地震が揺つてゐるやうに顛へて、
無益であるからに何とはなく凄じく。

然うだ不測の災厄が破滅が何時？今？
寢静まつたのではなくて呼吸を殺した
夜の街を襲はうとしてためらつてゐる。

ぼんやりした空に溶ける黒い家の棟、
 ああ夜の音——頼りない神経が、この時、
 奏でたのは濃い血をすすり盡した接吻の響。

破滅の酒に酔つて赤みざした月が空に跟めく、
 疲れた空に、——人間の街は寝おびれる、——
 壁にもたれた淫れ女の薄青い笑ひ聲、……

いつ月が眩めき倒れて、
 いつ夜が明けるやら？

食卓

ギヤマンの切籠の蓋に、赤い

葡萄の酒が、かすかに、そと揺れてほほゑむ。

柔らかな麵麩のほひが追従する、

すこし酸い、そのほひがこちよく。

切籠に刻んださかづきのおもてには
 相高い寶石の光の音楽。

ああ今、唇に溶け入る緩やかな節まはし、
 青磁の瓶に盛られた花の酔つた色。

なまなまとした焼肉と銀のナイフ、——
 その爽やかな薄い刃が血にあくがれる、

赤い血に、肉の媚びに。

原始的な残虚の快感を

人の世の幾代に磨いた美感がそそる、

誘ふ、血の肉に、——赤い媚びに。

ギヤマンが歌ひ花が奏でる、

すぎしむかしの王侯のうたげを、

一日のうち、最もこころ静かなこの時。

そしてまたこころ静かに思ひ浮べる、——何を？

女の顔、途で行き遇つた女乞食——

零落はしたが品位ある蒼白いその顔を、

夢が腐れたその眼を、薄い髪の毛を。

食卓に掛けた眞白な布のうへには

折から、窓の外、わか風の緑が映つて、

取りすましたポオイが無言でまた酒を注ぐ。

そしてこころ静かにわれはたどつてゆく、

古い葡萄酒の酒の味ひのくまぐまを。

一日のうち、

最もおもひゆたかな

この夕暮どきよ。

夜曲——大川端にて

青い靄がしつとりと降りて、洗んで、
 橋の袂の人影も、ひらめく灯かけも、
 をんな氣のやるせない嘆きを絃に聞く
 そのやうに、みんなうるんだ色を帯び、

晝のあつさが冷めてゆく河岸のゆふべ、
 おほ雨あがり、みなぎりわたる川のおも、
 猪牙のかけさへ見えぬ流れのひろさ——
 あれ、萌葱の月が柔らかな光にけむる。

うつろひやすい、あだな、せつない夜の曲、
 襟をつくるふ細かい手が、ほのめいて匂ふ間に、
 青貝のやうに、銀簪がきらめいたかと思ふ間に、
 どこへ滅えてゆくのか、そのひと節は。

見えぬ花のほひ

やはらかい風が
 なまめいた匂ひをただよはす、
 あたりには見えぬ
 花のほひを。

けたたましいが、遠くから

傳つてくる物のおと、そのおとが
 やはらかい風に
 もつれて聞える……

わづかに芽をふいた銀杏のうすみどり、
 肉桂の濃い常磐樹のかけを、
 見えぬ花のにほひが戯れるのか、
 ほのかな軽い呼吸づかひ。

青空には、日光の媚と、
 かがやかしいほほゑみと、そして
 こまやかな空の膚の夢のやうな
 温もりのうちに溶けてゆく淡い雲。

人げもあらぬ
 園生のみちが
 縦のはやしの
 かなたにくもる。

微かな、さあれ、けたたましい物の響、
 日影はすこし淀んで、この時、
 あたりには見えぬ花のにほひが
 嘆くよ、——また嘆くよ。

冷血と倦怠

蛇は、今、脇腹の赤ぐるきその斑紋を、

白の身をたまさぐりぐるめかしつつ、
 生氣なき草の纏れと絡みあふ膚の鱗に、
 濕熱の酸酵を、日の毒を、耽り樂しむ。

蛇はまた瑠璃の腫を徐に見据ゑたり、
 阿芙蓉のとの夢こまやかに味ふがごと、
 いつもいつも陰氣にとさす大地の深き私語、
 星體の人知れぬ淫蕩に聞き恍惚ぬるか、

その腫冷やかに、ある時は豫言者のごと、
 ある時は生の無智兇惡の夢の香やどし、
 蛇はかくて熱き野の倦じたる草の眠に、
 微かなる戦きを傳へつつ、
 蠕りうねりぬ。

われとわが冷血の身を所在なく弄びぬる、
 あはれ、その物哀しさよ、かかる野のかかる眞晝の
 迷眩の物哀しさよ、怯えたる蟲は啼きやみ、
 遠方の家畜の呻き、——それのみぞ雲に蒸し入る。

或る蒸熱き日の感覺的效果

蒸しいきむ風景よ、小流の水脈を傳ひて、
 とろとろに瀾れたる銅の湯はながれゆき、
 その岸に僂儂なる身を伸して童のひとり——
 素裸のあばら骨日に痿えて高熱を病む。

その童、石綿のたもを手を手にやをらさしのべ、

とろみたる銅の水底をかい探りつゝ、
 蒼びれし太陽を魚のごとくひすくへる、
 いつ迄と果しなし、無益なる無言のたはぶれ。

空見ればこの夕、人間の屍を焼く、

白く黄に、灰汁のごと濁りたる煙ますぐに、

工場にもありぬべき赤煉瓦ただぐらぐらと、

酔ひ痴れし烟突の吐く煙直ぐに眞直ぐに、

虚ろなる殿堂のたわいなきその圓柱――

世はあはれ啞となり、銅の流をりをり、

金光を放つとき、闇の香の迫るも知らで、

軟骨の童のみ落日の骸をさぐる。

鸚 鵡

なよらかに深き日ざしの香の淀み、――

夢かのこち羽づくろひまどろむ鳥よ、

あはれ、あはれ、われは愛で痴る、無言なる

鸚鵡の胸のふくらみを、嘴のまがりをも。

絲濃く塗りたる籠をけさやかに、

音にもたてず、温き雪のつばさや、

かくてこそ思へ、寂しきとまり木に、

惑はぬ鳥のいひしらぬころにくさを、

歡びのつばさも疊むあきらめか、
 はた思ひ出の森のおく静にたどるか、
 頭垂れつぶらの眼まじろかず、
 眞白の衣のぬすまひに矜をしめす。

しかはあれ物かげ燻ゆる夕まぐれ、
 うつたへに胸も張り裂けむ聲振りしぼる、
 そがゆるるになほ愛で痴れぬいや深き
 夜の無言に入りぬべき白き鸚鵡を。

明星

わがたましひは、今もなほ、

妄執の波をかつぎてねぶりたる、
 ねぶりたるたましひと思ひしに、こはまた、
 死のごとも青き眼をばみひらきて。

わがたましひは、ひるひなか、よるよなか、
 たえず夢幻の酒にひたりて、
 永遠を刹那々に追ひすがりつつ、
 手にもとまらぬ蓋の色と影とを愛したり。

わがたましひは死のごとも青き眼に
 この暁をおもひやり空のひんがしに、
 みどりと金の明星を創り出で、
 そが光にわが愛慾の胸をかがやかす。

明星よ、わが空想の緑と金のつばさに
 たましひの沈黙をつつみたる光の鳥よ、
 菩提樹下なる如來の禪悦はえもはからず、
 迦葉尊者の微笑だに知りもおよばず。

さもあれ、明星よ、いともまどはしき
 汝が光の中にわがたましひは育まれ、
 啞となりたるたましひの無言の歌は
 幻の酒の流轉の樂のねに溶けてぞゆかむ。

あなうら土をふまず、妻をもさらす、
 時には自我の王となり、はた官能の奴となれども、
 そは空の空のみ、如來よ、わがたましひは、
 しかすがに緑と金の星をば創りいでたり。

途 上

歩みなれたる路なれど、路のまがりの
 角に立ち、惑ひぬ、深くあやしみぬ、
 光と影よ、たまゆらの胸のおののき、
 夢みつる夢ぞゆくてに浮びぬる。

光と影の戯れに描ける夢か、
 わが靈はわが肉村の壇のうへ、
 聲も顫へて、いみじくも歌ひ出でぬれ、
 路のべの木々の瑞葉もさやさやと。

夢は夢なり、忽に滅えてこそゆけ、
残れるは胸のおののき眼の惑ひ、
風に流れて幻は浮ぶとすれど、
おぼつかない光と影は悲しみぬ。

灰白みたる牆の壁ながくつづきて、
鎖されし門の扉に黒鐵の
朽ちて錆びたる痕のなど眼にもふるるや、
わが胸の淵には沈む鍵の夢。

何處ともなく聞ゆるは、たづなづしくも、
現實の譜をばたどれる樂のおと、——
あやも失せたる寂寥の囚屋に起り、
波だちて、吐息に墜つる樂のおと。

冬の田園情調

からりと晴れた空から、
白い光が降りそそいで、そして
青みがかつた霜が融けて、
あぶらづいた土の暗紫色。

畠には麥の若芽が、
冬ながらに、純緑の顔へござ、
そが中で華奢な白猫が、おどおどと、
柔らかな脇腹で呼吸をする。

島のむかうは疎らなからたち垣、
 その垣の外はといへば、
 今もなほ古風な大師詣のほこり路――
 それで時をり鈴のねが鳴る。

静かなあたまに白い光が照りかへし、
 頸にかけた大きな珠數もきらめく、
 札所のうたの、あのねぶたげな節まは
 わかい女の聲もする。

麻痺と誘惑

あの蒼ざめた冷たい霜がどこからか湧いて来て

落葉し盡した樺の森のかほそい枝々が
 灰色の麻痺の歌をうたつてゐる。

もう日が暮れるのか、蒼ざめた霜のおく、
 痛ましい樺の枝々をすいて、目輪が
 孤獨な朱の色に悩みながら落ちてゆく、

日は落ちてゆく、落ちてゆく、おもむろに、
 さあれ瞬くひまにくるめきくづをれて、
 蒼い冷たい霜の中に、朱の影が落ちてゆく。

この時、わが胸には不思議な幻感が
 黒と金との綾織の帷をそよると垂れて、
 華やかな楽器で挽歌の節を弾くけはひがする。

もう日が暮れる、あの蒼ざめた誘惑が
冷たい霧の底に、臘の膚のなま白い、
穴に籠つた蛇の女の眠を暗示する。

青い盞に芳しいうゐきやうの酒を盛り、
冷たい快樂を蛇の膚に解す暗示の惱ましさを、
日の暮れがたを、噫誘惑の絃に死の歌がよみがへる。

白い夢の通夜

白い月がしくしく泣いて、

白い夢が海のうへを

しのびあしでとほりすぎる、
やはらかな波に
白い月がしくしく泣いてゐる。

時をり、ほのぐらい海の
くちづけのおとが洩れてくる、――
白い夢の中から、ゆらめいて、
やはらかな沙にはひ寄る
かなしい海のさざめきよ。

人も、人の戀も、

戀につかれたおもひも、ひとつに、
白い夢の通夜をまもつてゐる、――
なぜかといふのか、女よ。

6) 白い月がしくしく泣いてゐる、
それつきり、あ、それつきり。

女の顔

かなしい、かなしい女の顔、
影のやうなかなしみがそのまつげを、
ぬらし、うるほし、おぼらした。
女よ、なんでこんな寂しい道を、
うんめいの道をゆくのか、ひとりで。

あだなあきらめがその唇に、
淡いほほゑみのかげをのぼした、

でも、でも、かなしい女の顔、

(さんにななわが心のえじきよ。)

運命の絃いとにうすい命いのちの小唄。

さんにななわがころは、女の
あきらめた最後さいごの媚こぼをさいなみ
血のいろのどこかに残る花びらを
ひとつひとつ砕いてはその香かに酔ふ、――
むしろねたましい女の顔。

赤いからす

61 赤い鳥がよ、そぢやないか、

赤い聲で啼いたとよ、
 きちがひじみた女夫鳥。

緋の袈裟たらりとかけて
 きまぐれな鳥が啼いたとよ、
 長老鳥に尾鳥。

赤い鳥が啼いたとき、
 紺青の百合の花が
 はらりと散つてこぼれたとよ。

ほんにやさしい疍高な
 花であつたに、おらんだの、
 ばらもんの邪法の鳥がにくらしい。

異國の鳥が啼くときに
 死んで生れた孩兒がまた
 赤い聲で啼いたとよ。

ほんにそぢやないか、
 赤いからすの赤いこゑ。

羈
旅
小
景

待宵草

丈のびし草莖に、なかば凋める
薄黄なる花の夢

(曉がたを花は、など凋みゆくらむ。)

灰色の墓の石塊、露しめす磯の眞砂路、
かかる日のかかる曉、

われは行く、

紺青の海の香慕ひ。

眞砂壓すわが聲音——眞砂の嘆き、
消えし代のつつましき物の痛みは

わが胸の奥が覚め傳はりぬ、

灰いろのおくつきどころ、

紺青に海は醒めたり、薄黄なる

夢淡々し、凋みゆく花のゆらめき。

(宮島途上)

吳須のほひ

日の熱さ——こは南國の眞晝とき、

烈しき土の

燃え黄ばみ、眼を射るかげに、

浮びぬる蒼白きほほゑまひ。

疲れてあはれ、
 精魂も盡きぬる熱さ。——
 南國の磁器の町の香うつたへに、
 眼より指より膚より染々と流れ入る。

しかすがに燃え黄ばむ土のくるめき、
 夏の日のい照るが中に
 ほのかなる影をまじへて、
 つばくらめ、

音もなくひるがへす
 紫紺のつばさ。

礦を舂く水車のひびき、
 時を隔き、——見よ、青空にわきのぼる

かの灰色の雲の層。——また時を隔き、
 物うげに鈍くひびくよ。

おぼゆるはあきなひの
 町なかに人の世の旅の寂しさ、
 煤ぐるき窓にうかびて
 皮肉なる工女のおもの
 まなざしのくらきおののき、——
 またも見る蒼白きうすわらひ。

かくて今、——たちかへり、
 またたちかへり、
 音もなく飛びちがふ
 つばくらめ。——

かくて今、何故に、かくぞとは思ひわかねど、
 われは聴く、花がめに、
 蓋さかさきに、つやめき照らす細薬ほこすり
 琉璃はりうの肌はだに溶け入り、
 染み透る愁ひの麝じやの香、
 歡樂くわんらくの夢にまじはりしめやかに、
 いとせめて、熏くふりあふ吳須ごすのほひを。

(有田皿山)

赤き破滅

聲こゑだかき色もなし、すべては——
 風もなき谷あひの、日も照らさぬ

ねすみの空の雲のもとに——
 身じろがす、わびしき調子。

そが中に列並む杉の
 乾きたる純緑じゆんりよくのほひ、

(深く、深く、咽おのろび戦あつく脂あぶらの香よ。)

立枯たしかの縦たての灰白はいはく、

風もなき冬の谷あひの山路やまみちを、

きえあへぬ霰あられぞ、

粒つぶだてる痛みに黙す。

この時、

われは見る、わが眼めの蠱惑こわく、

崩れし崖がけの

血に滲む心の臓を。

わびしくも物すさまじき
自然の幻想よ、ここに
赤き崖の土、赤き破滅の効みせて、
ねずみの雲を嘲わらふ。

(天城山中にて)

印象

來む代のはた過ぎし代の
交はし組む夢のくゆり香、
淡緑と金の調和に酔ひしれて、

うつつなや、初夏のおごりのけしき。

いひ知らぬ思ひはうかぶ、
金の雨おともなくこぼれおち、
眼もあやに見えがくれする川の面は、
眞珠のいろに。

官能の衰へか、惑ひか、あはれ、ただに聞け、
寂れたる魂の香ともつれあひつつ、
虹の影濃藍にいや蒸して、
夏の日の光ひた吸ふ雲の樂音。

(甲府盆地を眺めて)

旅

紺にほふ法被の襟の天鷲絨に
時計のくさりかがやかす若き駈者
をりふしは口笛氣どり眞鍮の
喇叭の調の呼吸ながく、
山路を駈る旅の馬車。

軒先ふかくくぐもれる山の宿
はげしき夏のひかりにも
をぐらき冬をおもはせて、
人げもあらぬ家並みを

鬱憂の雪くるすむけはひ。

振りかへり見る若き駈者若き眼ざし、
けさやかに青みかがれる天鷲絨の
襟にきらめく銀ぐさり、
ほほゑみ顔に口笛をまた吹き鳴らす。

宿のはづれを鍵の手に曲りて出づる
だらだらの坂のもとにて、曳馬に
くるる一鞭、恐ろしき駈の踴躍や、
路傍の鷺鳥あやうくなだれゆく
眞白の羽の叫びごゑ。

山にかくれて埋もるる山の宿々、

さながらに黒く歪める菩提子の
念珠の聯ねおもはせて、
過がひて來つれ旅の馬車。

峠の麓終の宿——ああ天鷲絨の

青みたる襟に垂れたる銀ぐさり——

馬はたゆげにうなだれぬ、

黄昏ふかき旅籠屋は

疲れと暗き眠とを

さそひ引くべき瘵滅の

伽藍めいたる香の古び、

たとしへもなき佗しさぞ心に逼る。

(木曾の旅にて)

病熱と錯覺

迷 眩

熱のきざしに汗ばめる
額をふれて、何ものか
ひそかに呼吸す、——ためいきの
暗くつめたきひとしづく。

一室は深き影の寂び、
もののおののき底の冷え、
ひねもす曇るわびしさを
窓の玻璃に倦みはてぬ。

枕のもとを見かへれば、
らうがはしくもうち散らす
そがなかにしも樂の響、
事もなげにぞうづくまる。

疲れうみぬる迷眩の
刹那を、またも、何ものか、
額に呼吸す、ひえびえと
一室は深き影の寂び。

うつらうつらの夢ごこち
夢のそらにもなほ薫す、
含嗽ぐすりのふらすこの
青味にうかぶ薄荷の香。

ああ曇り日の窓玻璃、
ひかりはささず、町なかの
濁れる音を洗まして、
肩の痛みにひびき入る。

薬の罫を手にとれば、
うつろの窓を射かへしぬ、
うがひぐすりのふらすこの
青みに浮ぶ薄荷の香。

生命の香

たそがれの色はおぼろに
一室なる調度にくゆり、
そが中にわがたましひの
愛づる書黙しうづくまる。

いたづきを養ふあるじ、
われ病めり、一室はかくて
彩もなき妄念の塵
うすぐらきかけに沈みぬ。

今おぼゆ、肉の衰へ、
脈搏の深き嘆きを、
またおぼゆ、わが身、わが魂、
限りなき渴きを切に。

生命の香、ああその香こそ
ひそやかに忍び入りぬれ、
(燈火を誰かともせる。)
わが戀ふる切なる望み。

青き瓶花の薔薇は
燈火に照りてもあれな
わびしかる花のにほひや、—
生命の香、あはれいづくに。

外の面には嵐の叫び、
霜の聲。 — われは渴きぬ、
癒えがての病の夜を
わが戀ふる切なる望み。

滅のうつろ

かすかなる樂のしらべは
うす青き光の尾をば
曳きつつぞかなたに滅えぬ、
われは逐ふ光のあとを。

呼吸くゆる荒酒は、今、
 黄玉と凝りて流れず——
 かがやきぬ、——そのみぞ、——わが
 唇は酔ひを夢みぬ。

爐に燃ゆる百合のほひを、
 闇に墜つる魂の嘆きを、
 碎け散る念珠の星を、
 われは、また、わが身に痛む。

物なべてかたちを變へて
 滅え失するしじまのかけを、
 鐘えて、ただ淀める水の
 香に咽ぶ不安のおもひ。

戸をたたく人もあれなど、
 おびえつつ、なほもねがへり、
 かかる時、うつろの室に
 われひとり——ああ、われ病みぬ。

黒き靄

病を痛むめざとさに、
 二朝三朝とほく聞く
 大河ばたの船の笛——
 今朝もつたへぬ、あかつきに。

けうとき響濁みぶとの
 聲をふるはす船の笛
 しづまり沈む町中の
 闇にこもりて、朝まだき。

病めるわが身の病める魂
 怖れをひきぬにこりたる
 聲の底なるいましめや、
 呼吸も苦しき船の笛。

火塵をみだす黒けぶり、
 眼にこそ浮べ船室に
 倦める火かけの色ただれ、
 深くしづめる河の霧。

今、棧橋を一群の

おぼろのすがたひそめきて
 船に移りぬ河の面に
 火塵を滅す黒き霧。

熱になやめる節ぶしの
 痛みにまじる幻は

おぼろにうづく、また更に
 けうとげなりや船の笛。

日の眼をよけて、一群は
 ひそめきあひて、いづくへか
 去ぬる、——死の船ひたひたと

潮は寄せぬなまぐさく。

その乗合にもとむれば

わが身の影もまじるらむ、

熱になやめるふしぶしの

痛みにこもる黒き霧。

ただ眼のあたり火塵散り、

機關の響高まりぬ、

かいだゆき手をさしのべて

わが身の影をわれは呼ぶ。

哀愁のしらべ

むせびね

たそがれわたる咽び音……
 こころのかけにしをびいるは
 にほひしめやぐ
 物のけはひ。

ゆらめくたそがれの
 むせびね——色萎ゆる
 くちづけのふかきしじまをいま
 さながらにおぼえぬる。

いまはのはての雲の歌、
 泣きぬるる落葉のうれひ、
 ゆらめくたそがれのむせびねに
 蒼みゆくわがおもひ。

古きかなしみ

惱み吸ふくちづけの
 わびしがる音の嘆かひ、
 膚には沁むあをじろき影の笛のね、
 淫けたるながき吐息に。

あな、あな、かかるをり、

わが額かみかぶのうへ、
なまぬるきしづくしたたる、――
灰いろのしづくの痛み。

かくてまた鬱憂うつろの
狭霧さきりの中を、
蒸むしてにほへる塔たのかけ、
たましひの伽藍がらんは減えて……

わが額かみかぶのうへ、灰いろの痛み隙ひまなし、
塔たも將おほた溺おぼれゆく霧むの蒸むし香かに
しみじみとおぼゆるは、
露盤ろばんの鋪さびの緑青ろくじやうの古ふるきかなしみ。

緑の印象

古ふるき古ふるき思おもひ出でのあなたに、いつしか
忘れたる緑みどりの

印象いんさうよめしひぬる

おぼろの薄膜はくまくのあなたに。

遠とほくもり淀よどめる

空くら氣きのえもわかぬ

感かん觸しよくのうすあかり、――

その奥おくにこもれる緑は咽のどび泣なく。

森のわか葉、
 廣野の草の嘔泣き、——さにあらず、
 忘れたる古きおもひでの
 ただにうら悲し。

わかく素直なる緑の古き印象よ、
 おぼろなる影は浮ぶ花か——
 淡白きにほひにまじり、かすかにも
 うるほふ緑の涙。

楽 音

見えぬおもひはえ知れざる

夢のふかみにうち悩む……
 君よ、井オロンの弓を曳く手に
 疲れたる懶さを、われは聴く。

ああ、井オロンはすすり泣く……
 弓とともに顫ふ手の、いみじき
 小指の尖と波だつ弓の端に、いま、
 窓を洩るる夕日のくちづけ。

うすみどりなる一室に
 井オロンは、はや音もなし、ゆふづく日の
 滅えてゆくそのひらめきを
 われは趁ふ、君が眼に、君が唇に。

しめやかに雨は降る

しめやかに雨は降る、

緑寂びたる苔の下、

つめたき土に滅え入る

雨のにほひ。

物のさやき、深き悔ひ、悲み、

いちやうに鈍び朽ちて、

小暗き隅へ、——あな、落葉、

しめじめと聲もなき落葉と雨と。

雨は今昔に滅え入る、——張もなく

疲れし胸に、わが身に、

古びし園に、世界に、ただあるは

灰いろの影の淀み。

さびしげに雨は降る、

髪もみだれし褪色の雨の衰へ、

何の痴れどころぞ我は今

聞き恍くる、白き腕のそのしじまを。

雨は降る、しめやかに、

灰いろのかげの暮れがた、

わりなくもわれを捉へて、はなたぬ

をみなの白きまぼろし。

海

日にきらめける濱への
砂山の單調に

身ひとつを悲しむ思ひは
いつとなく倦み疲る。

たゆげの浪の歎きの
呼吸づかひよ、夢のふかみに、
をみなの白き腕の、わが胸を
押しぬるその夢を、今思ひ出づ。

眞白くも碎くる
浪のかけにくゆりそふ
底知れぬ海の
をぐらき呼吸の香よ。

烈しき夏の日の光……眼も眩むかな
海は、あな紺青の落葉のゆらめき、
誰か知る、そが中に溺るるもの
きはみなくも、またいみじき愁ひを。

水禽

しづやかに波だたぬ
池の水底に映れる
をぐらき樹々のいのちなき
影のわびしさ。

かかる眺めには、わが胸、
ひしと嘆かるるや、——あな、
つめたき池の水のおもを
蒼白みたる光ぞ咽ぶ。

いともすさまじく、
さなりにほひもあらぬわが夢よ——
寂びたる冬の池を、胸毛ましろに、
水禽はしづかに眠る。

嘆かるる深きおもひ……
雲は、今、池の面に、しづれおつれど、
うかびてみじろがぬ
水禽の夢見ごこち。

雨もよひ

101 雨を催す夕暮の

重たき空に漲れる
 死色の雲と、その雲の影を映して
 流れゆく小暗き河と……

頭のうへを今、

たそがれの鳥ぞ羽ばたき過る、――
 わが深き心の面に黒き斑點、
 ふと落ちし黒き鳥の影の斑點……

滅しがたし、ああ……

癒しがたし、哀しき胸の思ひは……

暗き流れは吸ふよ、ひた吸ふよ、河沿ひの
 小家に點りても、のうげに嘆く灯影を……

灰いろにうち架し、古びたる

橋の欄干に

もたるる人の姿、その彼方には

むやひたる船の帆柱のさびしうも……

ああ……わが深き心の面に

羽ばたきめぐる黒き斑點、聲もなく……

重たき額を撲つは、この時、

つめたく、まばらなる雨のしづく……

山の手の晩秋

晴れわたりたる秋の

空のいろのみづあさぎに、

(今日(けふ)はしも都(みやこ)の空(そら)もやはらげる。)
映(うつ)ろふ銀杏(ぎんぎょう)の樹(き)々。

淨(きよ)くすなほなる銀杏(ぎんぎょう)の

さらにもたすぐれたるそのよそほひに、
えも言(い)ひがたき

秋(あき)の葉(は)のあはきこがねのひかり。

わがこころ——都會(とくわい)の

いたましき刺戟(しげき)につかれたる

甲斐(かひ)なきこころは、今(いま)忍(しの)び泣(な)く、

毒(どく)ある不安(ふあん)の痲痺(まひ)にひたりつつも。

け 高(たか)き玄妙(げんめう)の、あはれ、

秋(あき)の葉(は)に、目(め)のしづやかに照(て)らせは、

こがねのひかりのなかにうちしぶく

吹上(ふきあ)りの水(みづ)の聲(こゑ)をのむ姿(すがた)かとばかり。

靜(しず)かなり——ああ、悲(かな)し、悲(かな)し、

銀杏(ぎんぎょう)はただ目(め)にかがやく、

灰(はい)いろの壁(かべ)のうしろに、

古(いにし)びたる精舍(しやうしゃ)の家根(いえね)のうしろに。

こ ともなき面(おもて)もち

色褪(いろ)する柳(やなぎ)の並樹(なみぎ)

あをじろみ枝垂れて。

齡わかきをみな子は派手やかに
あゆみゆく、——こともなき
その面もち。

路には軽き砂ほこり、
たゆげなる風は吹く。

愁ひある胸のごと
いろいろ鈍める壕の水、
くもりぬるかがみのところに
すがり泣く淡き日のかげ。

秋と知る、——赤き煉瓦の家の棟の
かなたに浮ぶ白雲も、
やや煤ばみて、
痛ましき都の空に。

ただ秋と知る、
過がひ去にたる
をみな子のこともなき
面もちよ。

初
心
鈔

いふて嘆くはおるかてござる、
 いはでおもふは、のふ、
 身をこがすといの。
 旅は日暮れがものういものよ、
 わすれた戀を、
 また思ひだす。

(増補松の落葉卷五)

よもぎのほひ

君が眼の初心さ、
 その眼のなかに
 よもぎのほひを
 われはきく。

猿澤の池

猿澤の池のしだれやなぎ
 やなぎのこすゑより千年の古塔

身ほそくたちたり、さてあまたの
いにし代の戀はいかに、
埴の土にうづもれて
色も香もきえうせしや
ほの青き吐息にかぎろひて、
赤裳の裾のほのめくは
眼のまよひか
あらぬか。

かすが

春日には
竹柏とあせびがしげる、

あせびのかけの
たはむれに、
可愛鹿の子を
なでてみた。

京のともしび

しとしとと降る春雨に
いちらしい芽だしやなぎ、
四條の橋のらんかんに、
ぬれてもたれて、
ものおもふ旅の人。

をりからのたそがれを
河原のけしき、

青くくもつたなまめきやう、

茶屋の灯が、いろめき、

さざめき、泣いじやくる、

ところをそそる

京のともしび。

みやこのなかに

みやこのなかにことはりせめて、

今もなほ千鳥が啼く、

千鳥のこゑのわかさよ

夢より夢へ

ちちとしどけなくも

ひすゐの珠かしのびあひ、

まるびゆく。

こよひの雨にうちしめる燈火の華

酒の香に炷きしめし宿の柱は

尼でらのものゆかしさにつやめける、

げにも、ややくづれたる三絃のなまめいて、

むかしと今のはたまた、

法と色とのえにし結ばするといの、

京の女のばちの手のあはれなる。

むらぎもの

むらぎものところをかむは、
 はだへをさすは、をかみの牙龍のつめ、
 戀のねたみののろはしさよ。

しきどろの尼たちのまへには身をなげて、
 三千の偈にたましひをさいなみ、とろめかす、
 まいてや、血のりもくもる當代の
 性根よわき男のところののろはしさよ。

ひとが

香油のかげにたよたよとまじりたる
 ひとがをきけば、あはれ、ちゑもおよばじな、
 くるがみの巢のぬくめ鳥、七彩にほふ
 寶石の情慾と、重ねきたる衣の染ぐさの
 ところなげなる戯れとほほゑみと、
 その中につつましくおののける肌はだの香よ、
 よくやしなひ手なづけし肌はだの香にはあれど、
 さもあれ、——わが前に蒼白あざしろき指を組む
 静かなる手たて弱女の伏せたる眼まなこざし、
 抑へたる唇も何かせむ。——ただその香をかげば

ブリミチヴなる山の奥——噫、便な文明よ、
 車のきしみと埃あびたる電球の
 曇りただれたるひかりのもとにて——
 さながらに、なほ見る、その山の奥なる草生に、
 日もすがら覺めて睡れるじやかうの猫を。
 げにもそばゆる如きふりなりのその寢姿をば、
 くれなるの石楠木の花ぞ照らし出でたる。

北 國

北ぐにの柳の枝のものあはれさよ、
 夜間瀬の川の岸べに、
 照りさかる夏の日さしのただ中に、

乾いた道のほこりにまみれ、
 うすにごる夜間瀬の川の水の面に
 たゆげな心を映す旅人よ、
 夏の日のものがなしさよ。

浪のおと

なにごとも
 うつかりわすれて、
 ゆふぐれの
 まどに、ただひとり。

まどのそとには

しらけて垂れてなびく柳の葉なみ。

まつよひぐさ、

ほのかな花が

ほつつりと。

その花がにほふ

砂地すなぢには

しろがねいろの

くちなはがしのぶよ。

とほくもあらぬ

なぎさより、たまたま、

おとづれてくる

浪のおと。

ほし血の豹



茉莉花
小曲

智慧の相者は我を見て

智慧の相者は我を見て、警めていふ、

——汝が眉目は兆悪しくこそ日曇れ、

心弱くもあだし人戀ひわたりなば、

夜の疾風やがて襲はむ、遁れよと。

噫、遁れよと、嬾やげる君がほとりを、

緑牧草野の原のうねりよりも

なほ柔らかき黒髪の縮ねの波を、——

それを如何に君は聞き判きたまふらむ。

眼をし閉れば黄昏の沙のはてを、

頭垂れたどりゆく影の浮び来る、

——飢ゑてさまよふ獸か、とがめたまはじな。

その影ぞ君を遁れてゆくものの
うらぶれ姿、しか思ひ、いまは惑はず、
任せなむ、戀の渦輪に、身をも魂をも。

若葉のかけ

薄くもりたる皐月ぞら、日もやはらぎぬ、

木犀の若葉のかけのかけ椅子に

もたれてあれば物なべておぼめきわたれ

まどはしの歌の調と暢らかに。

「おもひ」の浪にただよひて、浮び出れば、
常世なる遠き島根の薫り覚め、
あくがれわたる海の鳥、それかあらぬか、
夢ごこちうつらうつらのわが身かな。

なかば閉ぢたる眼をそそり、和魂さそひ、
初夏の、そのうまし花芍薬は、
薔薇は、嬰粟は、軽らかに舞ひてぞ過ぐる。

艶だちて、しなゆる色のつれ弾きに、
さゆらぎにほふ幻はわれをとらへぬ、
吉祥の戀をささやき、とはに滅えじと。

靈の日の蝕

時ぞともなく暗みぬるいのちのとぼそ、
こはいかに、あたりのさまもけすさまじ、
こはまたいかに、わが胸の罪の泉を
何ものか頸さし伸べ、ひた吸ひぬ。

善しと匂へる花びらは闇にしほみて、
悪しき果は熟えて落ちたり、たなごこに
そをうち載せてなま温きかをりを嗅げば、
唇のいや堪うまじき渴きかな。

聞け、物の音——群れて飛ぶ蝗の羽音か、
 むらむらと大沼の底を沸きのぼる
 毒の水泡の水の面に弾くひびきか、

あるはまた疫のさやぎ野の犬の
 淫の宮にさけぶにか、あゝ仰ぎ見よ、
 微かなる心の空や、靈の日の蝕。

月しろ

憂ひ惱めるわが胸の淀みに生ひて、
 うき草のくろすみわたり、ひろくれば、
 古き館は黄昏の闇をやどして、

おほおほと、その池水に映るへり。

石の段階も、あはれ見よ、寂びて頽れぬ、——
 沈みたる快樂を誰かまた尋めむ、
 かつてたどりし手弱女の琵琶の歌を、
 うつたへになほ慕ひ寄る水の夢。

花の思ひをさながらの禱の言葉、
 額づきし面わのにほひの滅えがてに、
 あやしく深き宿縁はわが身を繋ぎ、

おもひでの遠くくぐもるみ空より
 池のところに、執著のくちづけとしも
 月しろの影はほのかに浮びただよふ。

見おこせたへま

文目もわかぬ夜の室に濃き愁ひもて
 醸みにたる酒にしあれば、昏に
 そのささやぎを日もすがら味ひ知りぬ、
 そは何ぞ絶間もあらぬ誅辭。

ただ惱ましくやはらかき酔のいたみは、
 われとわが死をば誘はむ、やうやうに、――
 その嘆かひのもとすゑをうら問ひますな、
 君が身に、こは蜂蟻のかけのかけ。

見おこせたまへ、ただひと目わが蓋を、
 おん眼こそ翹うるほふつばくらめ、
 透いかけにしてつややかに映り浮びぬ、――

いみじさよ、濁れる酒も今はとて
 かがやきいづれ諸共に乾してもあらばや、
 靈をさへ滅ぼす戀の蠱のしたみを。

茉莉花

嘆かひ咽びうつつなくわづらふその日、
 わが胸の物憂き帳かかけつつ、
 しなめきにほふ君が面媚のすがたは、

阿芙蓉の萎え嬌めけるそのけはひ。

魂をも蕩らすささめきに誘はれながら、
われはまた君を擁きて泣くなめり、
極秘の愁夢のわな、——君が腕に、
なやましきわがただむきはとらはれぬ。

またある宵は君見えす生絹の衣の
衣すれの音のさやさやすするかに、
ただ傳ふのみそを聞けばこゝろぞ痛む。

茉莉花の夜の一室の香にまじり、
影見せぬ君がほゝるみはいよゝしみに、
かかるときわが身の痕を尋めて薫りぬ。

寂 靜

熟えて落ちたる果かと、あはれ夕日は
うち揺ぎ濃くも腐れし光明の
喘ぎ黄ばみて海中に惱みしたたり、
溶け入れれば波は咽びぬ、たゆらかに。

磯わに黙す圓石は飽き足らふまで
夕潮を吸ひ倦みぬるに瑪瑙かと
石の額は慵げにしばしかがよひ、
やうやうに、そこはかとなくたそがるよ。

風にもあらず、波の音、それにもあらず、
 天地はひとつ吐息のかけに満ち、
 渚のかぎり彩もなく暮れてゆくとき、
 たづきなさよ、わが魂は埋もれぬ、
 埋もれつゝも暗き世の海に夜すがら、
 寂靜の深き涅槃の夢を護ると。

あだしおもひ

あだしおもひの織り出でし紋のひととき、
 歡樂の緯に、苦悶の經の糸、
 搓れてみだるゝ條の色、あるは叫びぬ、

あるはまた、酔ひ痴れてこそ眩るめけ。

今夜の膝、やすらひの燈の下に、
 巻き返し、その織りさまをつくづくと
 見れば、臍に危けに、眠れる獸、
 倦める鳥——物の象の異やうに。

裁ちて縫はさむかこの巾を、宴のきぬに、
 ——ふさはしな。さてしもあらば終の日の
 葬のれうに、——それもはた物狂ほしや。

生には、あはれ死の衣、死にはよ、生の
 空炷きのほひをとめて、うつゝなく、
 夢はゆらぎぬ、柔かき火かけの波に。

偶感

寄せては返す浪もなく、ただ平らかに
 和みたる海にも潮の満干あり、
 げにその如く騒だたぬ常の心を、
 朝夕に思ひは溢れ、また沈む。

朱のまだら

日射しの
 縁ぞこちよき、

あかしや
 並みたつ樹かげみち。

よろこび
 あふるる、それか、君
 かなたを、
 虚空を夏の雲。

あかしや
 枝さすひまびまを
 まろがり
 かがやく雲のいろ。

君、われ、

ふたりが樹かげみち、
みどりの
にほひぞこちよき。

なよ風

あふぎてあかしやの
葉はみな
たゆげにひるがへり、

さゆらぐ

日かげの朱のまだら、
ふとこそ
みだるれわが思ひ。

君はも

白帆の滯入りや、

わが身に

あだなる戀の棧。

なよ風

あふぎて、滯逸れぬ、

いづくへ

君ゆくあなうたて。

思ひに

みだるゝ時のまを、

夏ぐも

おもげにくづれぬる。

みどりか、
朱か、君あかしやの
樹かげに
あやしき胸のしみ

ともしび

人の世はいつしか
たそがれぬ、花さき
香に満ちし世も、いま、
たそがれぬ、しづかに。
滅えがてに見はてぬ

夢のかけうすらに
ゆふ露のすそひき、
しめやげるをりしも
人の世のともしび——
ほのぐらき樹のまを、
わびしらに嘆くか、
ともしびの美鳥。

母の鳥——天なる
日のゆくへしたひて、
泣きいざち嘆かふ
聲のうらがなしさ。

ともしびのうま鳥
うらぶれの細音に
かすかずの涙の
玉を貫くおもひよ、

闇おちぬにほひも
はた色もひとつの
音にそひぬ、ともしび、
遠ながき笛の音……

この時

紺瑠璃の

うしほ満ち足らへば、
ゑみまけて
くちづけす渚も。

風は和ぎ、
浪は伏す深うみ、
天津日ぞ
かがやかにほがへる。

いづこをか
とめてゆく、この時、
船の帆よ、
おもむろに、たゆたに。

幸あれな、
帆じるしはわかたね、
しかすがに
生もはた死のごと。

あまりにも
足らひたり、海原、
静けさは
あらしにも似たりや。

ひなぐもる
兆あしき、——日の暈
暈の環を
虹もこそ彩なせ。

紺瑠璃の
潮熟みてひたしぬ、
素胎には
あらぬ海、なじかは——
素胎には
あらぬ海、不祥の
兒や生れむ、——
虹のいろ、かつ滅ゆ。

幸か今、
帆じるしはわかたね、
いづこかを

143 とめてゆく、わが船。

いのちの花かげに

光ひかりのとばりぎぬ

ゆららに風わたる、

まひろく、はた青き

皐月さつきの空そらのもと。

いのちのひとしづく

めぐみぬ、わが胸の

段階だんかかぎろひを

きざめるそのほとり。

めぐみぬ、花さきぬ、

かがよふ玉の苑その

かすかに花くんじ、

かすかにくづれゆく。

ひかげはゆるやかに

うつりて、きざはしを

垂たれひく丈たけの髪、

ひかげぞ夢みぬる。

さもあれ、戀の、あゝ

みなしご——わが魂たまは、

いのちの花かげに、

149

痛みて音もなし。

夏の歌

薄ぐもる夏の日なかは、
 愛慾のおもひにうるみ
 底燃ゆるをみな眼ざし、
 むかひぬて、こころぞ悩む。

何事の起るともなく、

何ものかひそめるけはひ、
 執ふかきちからは、やをら、
 おもき世を移しまるがす。

窓の外につづく草土手、

きりぎりす氣まぐれに鳴き、

それも、今はたと聲絶え、

うすぐもる日は蒸し洗む。

青蜥蜴つと這ひいでて、

茅が根を走りすがへば

ほろほろに乾ける土は

ひとしきり崖をすべりぬ。

なまぐさきにほひは、池の

うはぬるむ面よりわたり、

くちなしの花は落ちたり、

朽ちてゆく時のなきがら。

何事の起るともなく、
何ものかひそめるけはひ、
眼のあたり溶けてこそゆけ
夏の雲——空は汗ばむ。

秋の歌

やはらかき苔に咽びて
石だたみながくつづけば、
たもとほる「秋」のなげきに、
しめやげる精舎のさかひ。

ならび立つ樞の高樹よ、
智識めく影のふかみに
鈍びくゆる紫ごろも、
合掌の姿をまねぶ。

しめやげる精舎のさかひ、
すすり泣く夢もたえだえに、
ひそめきて音のかそけく、
ひるがへる愁ひの落葉。

かぎりなき秋のほひや、
白蠟のほのほのごとも
わがこころみだれなびかひ、

ふと花の色にゆらめく。

花の色——芙蓉の萎え、
おとろへそのままのもだしを、
寂びの露しみらに薫ず、
かにかくにうすきまぼろし。

秋は、いま、み堂にきえぬ、
さそはれて、うかがひよれば、
ほのぐらきかげに燦めく
金色のみ籠のひかり。

秋のこころ

色づける本草のほひ、あはあはと、
ただよひわたる秋の日は、ひそに忍びて
こもらへる清げの尼のおこなひや。
懺悔の壇の香の爐に、信のこころの
香木の髓の膏を炷き燻ゆし、
ねびては見ゆれ、打敷は夢の解きぎぬ、
過ぎし日の被衣のかたみ、音もなく
しなだれて咲く繡の花や、また装ごとに、
ときめきし胸の名残の波のかけ、
揺めきぬとぞ見るひまを、聲はひた泣く——

看經のああ秋の聲、歡樂と
 悔と念珠と幻と、いづれわかたず、
 ひとつらに、長き恨みの節細く
 雲のかげりにあともなく滅えてはゆけど、
 窮みなき輪廻の業のわづらひは、
 落葉がもとに、草の根に潜みも入るや、
 この夕べ愁ひの雨は、勤行の
 亂れを痛み、さめざめと繁にそゝぎぬ。

大河

ゆるやかに、たゞ、こともなく流れゆく
 大河の水の薄にこり、——そはさながらに

人の世の塵に同じて惑はざる
 智識めきたるそのすがた、——鈍しや、われら、
 面澁る啞の羊のともがらは、
 堤のうへを、とみ、かうみ、わづらひ歩く。
 しかすがに聲なき聲のちから足り、
 眞晝かがよふ法を布く流れを見れば、
 經藏に螺鈿の函の蓋をあけ、
 智慧のひかりにみ教の卷々とうで、
 ひもどくに、不思議の文字のこぼれ散る、
 げにその如く晴れわたる大空のもと、
 河の面に黄金の波のきらめくよ、
 かかる折にこそ汚れたる身さへも蒸れ、
 畜類の癡れのまどひのいと深く、
 醜草の毒に眩めき、あさり食みぬる、

貪のころを悔いて、うち喘ぎ、
 ひざまづきて吸ふ河水の柔らかきかな、
 母の乳甘くふくめる悲みは
 酔のこちに、いつとなく泌み入りにけり。
 源はとほき苦行の山を出で、
 平等海にそそぎゆく久遠のすがた、
 たゆみなく音なく移る流れには
 非常の水泡、無我の渦。時しもあれや、
 深海のたから探るとかしまだつ
 船の帆ぞ照る、——さとりなき身にも、この時、
 心眼の華はひらけて、さらにまた、
 沈みてはゆけ寂靜の大河のむねに。

甕の水

甕の水にごりて古し、
 このゆふべ覆へしぬる、
 甕の水、
 惜しけなき逸りごころに。

音鈍し、水はあへなく、
 あざれたる溝に這ひ寄り、
 音鈍し、
 眩やける夢のくちばみ。

去ねよかし古きは去ねよ、
 水甕の濃き底にこり、
 去ねよかし、
 あゝなべて澱めるおもひは。

かがようか雲の夕映、
 いやはての甕のしづくに、
 かがようか、
 こゝろ今ひそに驚く。

あなあはれ雲の珠は、
 げに清し古びぬおもひ、
 あなあはれ、
 わが戀は暗きに沈む。

夜となりき嘆くも果敢な、
 むなしかる甕を抱きて、
 夜となりき、
 あやなくもこころぞ渴く。

浄妙華

161
 夜も日もわかず一室はげに怖ろしき電働機の
 聲の唸りの噴泉よ越歴幾の森の奥深く
 奇しき獸や潜むらむ青き炎を牙に噛めば、
 ここに不思議の色身は夢幻の衣を擲ちぬ。

かの底知れぬわたづみも、この威力ある人生の
 現実にしも比べなば、眠れる自然、暗き胸、
 ただ寝おびれて、悪相の魚に戦くすがたのみ、
 これは調和の核心に萬法の根をかがやかす。

舊きはすでに廢れゆき、更に新しく榮ゆべき
 都の街の片成りに成りも果てざる土の塊、
 塵に塗るる草原の、その真中に怖ろしき
 大電働機ぞひびきける、夜も日もわかず、絶間なく。

船より揚げし花崗石、かなたの河岸に堆く、
 また眼を遣れば断え續く煉瓦の穹窿、黒鐵の
 軌條の廻手——人はこの紛雜の中に埋れて、
 願ひはあれど名はあらず、力と技に勵みたり。

ああ、想界に新なる命を享くる人も、また、
 胸に轟く心王の烈しき聲にむちうたれ、
 築き上ぐべき柱には世の實相を深く刻り、
 ほまれ求めぬ汗にしも汝が額はうるほはむ。

げにも車の鐵の輪軸に黄金のさし油
 注げば空を疾く截りて、大音震ふ電働機や、
 その勢ひの渦卷の奥所に聽けよ「静寂」を——
 活ける響の瑠璃の石、これや「眞」の金剛座。

奇しくもあるかな、蠟石の壁に這ひゆく導線は
 越歴幾の脈の幾螺旋、新なる代に新なる
 いのち傳ふる原動の、その力こそ淨妙華、

法音ほふん開ひらく光明くわうみやうのほひぞ人に逼せまり來くる。

信 樂

靜かに眠りて、寢魂ねたまの夜よるの宮にも事あらず、
いと爽らかに青みたる晨あしたに寤めめ見かへれば、
偃く偃くに似たる「昨きのう」の日は過すぎゆく「時とき」の杖つゑに縋すがり、
何方いづ去いにけむ思おもひ屈くして惱うれめる我われも心解こころとけぬ。

零こぼれし種子たねのくすしくも荒あれる我身わがみの確たにだに、
惠めぐみもたらす「信樂しんらく」の朝あのひとつやうたたへに
ただへまつらむ「慈悲じ」の御手みては秘ひむれど銀ぎんの衡はかり
金の秤目はかり、その極たぎの星ほしにかかれる身の鐘かね。

げに靜まれる日の朝あけ會あて覺さえぬよろこびに、
瘦こ屈まみ冷ひえしわが胸むねは雪消ゆきけにしめり冬ふゆすぎで、
地ちの照斑てうはんと蒲公英ぼんぎやうの花はな芽こぐむ外の面おもてのつつましき
春はるさながらに萌もえたちてきざす祈誓いのちかざぞほのかなる。

何とはなしに、おのづから耳みみをすませば、遠方とほかたに
浪なみどよみ、風かぜのよそめける音ねをし尋たづむる心地こころちして、
憧あこがれわたる窓まど近く、小鳥こどり囀さえずじてまぎれむと
惧おそるる隙ひまに聞きわきぬ過去こくわ遠々とほとほの代よをここに。

かくて浮ぶるわが「宿世しゆくせ」を譬たとふれば、手弱女たをやめの
頸うでをめぐる珠飾たまかざりうるめる音ねのかそけくも、
瑠璃るりはささやく紅玉こうぎよくに、(さあれ苦くの緒いとのひとつらね。)

緑にはたや紫に愛の欣求の信の願。

げに、この朝の不思議さよ、翌のゆふべはいかならむ。
無明に惑ふ疑ひの風吹き起り、業の火を
誘ひて行手塞ぐ時、いかかはすべき、弛まるる
腕は、渴く唇に水をし、掬ぶちからなくば。

あるは曲れるその角に鈍さあらはす「愚痴」の牛、
牧場に足らふ安穩の命に倦みて、すすろかに、
埒のくづれを踏えゆかば、星も照らさぬ夜の道、
後世の善所を誰かまた、鞭うち揮ひ指し示す。

あるは木強の本性に潜む夷の幾群の
巢ふやとばかり、われとわが、拒かぬ森の下蔭に

怯ちてはあれど、襲ひ來る彼の殘逆の矛槍を、
血ぬらぬ前に、淨めなむ心しらひのありや、否。

悲願の尊者諸菩薩よ、ただ三界に流轉する
魂を憐み、御心にかげさせたまへ、煩惱の
かけ薄らげる朝に遇ひて、今日を捨身の首途や、
遍路の旅に覺玉の利生をわれに垂れたまへ。

皐月の歌

雲は今なよらにわたる
ああ皐月——雲の麝香よ、
麥の香もあたりに薫ず、

いく波をり、ゆたにたゆたに。

日は酔ひぬ、緑は蒸しぬ、

ゆほびかに野はうるみたり、

あげ雲雀はしきみ魂よ、

なよ風や軽き舞ひぎぬ。

見よ、瑞枝わか葉さゆらぎ、

青空の透きてうごくは、

さながらに孔雀の尾羽――

数の珠、瑠璃のつらなみ。

皐月野の胸のときめき、

節ゆるるきにほひの歌ぞ、

日に蒸して緑に酔ひて、
たよたよと傳ひゆきぬる。

晩 秋

ささやきて去にける影や、
盞にしたしみ酒は、

(飲みさしぬ) あはれ、懶し、
澁りたる愁ひに濁る。

ささやきて去にける影や、

おとづれも、今は、とだえて、

わが膚しじみ、粟だち、

ひえびえとこころおびゆる。

うらがれの園にしとりて、

石づくゑ琢けるおもの

うすにばみくもるわびしさ、――

「よろこび」は待てどかへらず。

雲は、見よ、空にわづらひ、

晝の月惱み黙しぬ、

「かなしみ」のいのちのかたみ、

吹き棄てし笙のふえかと。

日のひそみ、風のおとろへ、
ものなべて弱りうすらぎ、

黄にかこつ公孫樹のはたや、
灰ばめる楊の落葉。

ひと叢の薔薇は、かしこ、

しほみゆく花の褪せいろ、

くづをるる埋れどころぞ

土の香のさびれに咽ぶ。

空だのめ、何をかは待つ、――

いつしかに日和かはりて

雨もよひ、やや蒸しぬれば、

秋は、いま、ふとき呼吸しぬ。

わりなくも聲になやめる

さかづきの玻璃の嘆きと、
うつろへる薔薇の歌と、
かかる日を名残のしらべ。

かかる日を冬もこそゆけ

ゆほびぬる日向のかをり、
かかる日を冬もこそゆけ、
やはらげる物かげの雪、
枝ゆらく垣のいちじゆく。

かかる日を、ああ、かかる日を
待ちわびてめぐりあふ日を、

ゆほびぬる胸のくまわに、
とけいづる思ひぞかをる。

かすかにも水沼のあたり
みづ鳥の羽おとのしらべ。

ひとときほひ嵐は、またも、
あを空の淵にすさべば、
そのおもは氷の泡だちて、
しろがねの色にきらめく。

冬は、いま終のいぶきか、
常盤木は深くをめきぬ、

いちじゆくの枝は、たゆらに、

音無しの夢のさゆらぎ。

かくて後時のしづけさ

かかる日を冬もこそゆけ、

春の酵母——雪のしたみに

かぐはしの思ひは沸きぬ。

しかすがに水溜のあなた、

みづ鳥の羽おとのわかれ。

序の曲

華やかに夕日は、かしこ

矛杉を檜のつらなみを、
はなやかに映しいでたる。

(あはれはれはれはなやかに。)

夢なりや、木々のいただき、

あふぐ眼に腫ぞうたふ、

夢なりや、夢のかがやき。

(あはれはれはれ、うましゆめ。)

わが脚は冷たき地に

うゑられぬをぐらき悩み、

わが脚は重したゆたし。

(あはれはれはれ、たゆたしや。)

かぐよへるめぐみのかげに
 冥みやうをぬく「おもひ」の上はつえ枝、
 かぐよへる天あまのみすがたや。
 (あはれはれ、このおもひ。)

よろこびの、これや、序じよの曲きよく、
 煩惱ぼんぷにまつはれつつも、
 よろこびの朝あしたをまため。

(あはれはれ、そのあした)

しかすがに闇やみは逼せまり來、
 われも世も、ただひとつらに、
 あぢきなき闇やみの夜よすがら。
 (あはれはれ、明けぬ夜を。)

水のおも

いと小ちさき窓まど、
 晝ひるも夜よも絶たえずひらきて
 割わられし水の面おもの
 たゆたひをのみ、
 倦うじたるころにしめす。

淀よどめる沼ぬまか、
 大河おほがはか、はたや入江いりえか、
 水の面おものひと片ひらを、
 何は知らねど、

絶間なくながめ入りぬる。

蒼白く照る

波の文、文は撓みて、

流れ去り、また疊む

數のすがたは

一々に秘密のころ。

しかはあなれど

何事もわれは解し得ず、

晝は見て、夜想ふ、

その限りなさ、

いつまでか、かくてあるべき。

わが魂を

解き放て、見るはうつつの

天ならず、地ならず、

ただたゆたへる

水のおも、昨日も今日も。

世をば照らさむ

不思議はも耀きいでねと

待ちければ、こはいかに、

わが魂か、

白鵝は水に映りぬ。

哀しき鳥よ、

性よ、知らずや、波は、

今、溶けし燄なり、
白き翅も
たちまちに焼け失せなむす。

聞け、高らかに
聲顔へ、「父子、み靈に、
み榮のあれよ」とぞ
讃めし聖詠
いまはなる鳥の惱みに。

わが身は、かかる
ありさまに、眼をし閉づれば、
また響く、「みさかえ」と。——
窓の外を、そと、

見やる時、こは天ならめ、

夕の空か、

水のおも、こは天ならめ、
浮べたる榮光に
星やかがやく、
しかすがにうら寂びしさよ。

われと嘲みて

何ものかわれに叛きぬ、

暗き空、小さき窓、

倦みて夢みし

信のゆめ、——それもあだなり。

おもひで

(妻をさきだてし人のもとに)

「おもひで」よ、淨き油を汝が手なる
 火盞に注ぎ捧げもち、淨き焰の
 あがる時、噫亡き人のおもかけを、
 夫の君のため、母を呼ぶ愛し兒のため、
 ありし世のにほひをひきて照らしいで、
 かへらぬ魂をいとどしく、悼める窓の
 をぐらさに慰めびとと添へかした、
 慈眼の主はこれをこそ稱へもすらぬ。
 「おもひで」よ、なほ隈もなく、汝が胸の

碑銘

その一

こころの奥所ひらくべき黄金の鍵を、
 悲みに、とこしへ朽ちぬしるしありと、
 音も爽かにかがやかに、捧げまつりぬ。

よろこびぬ、倦みぬ、
 争ひぬ厭きぬ。

いのちの根しるみ、
 死の實こそにほへ。

眠なり、熟えぬ、
落ちぬまを吸ひぬ。

その二

ここよりは路もなし、
やすしはた路の岐も、

蒼白き啜泣き、

聲だみて、ひびらくゑまひ。

魂と魂あひ寄るや、
寂寞の、あはれ、晶玉。

死はなべて償のきはみ、
得がたしや、されど終には。

その三

人々よ、奥津城の冷たき石を、
われをいざ踏みて立て、烏許の輩、
目も盲ひて躓かめ、かの行末に
高まれる段階の、われもひとときだ。

その四

肉は、靈は、
ひとつのいのち。

生は、死はよ、
真砥の堅石、

研きいづれ、
摩尼の金剛。

あされし肉

「神」のいけにへ。

むなしき靈

「蝮」のさとり。

肉の肉を

われは今おぼゆ。

覺めよ、「人」は

靈の靈。

鐘は鳴り出づ

「火はいづこそ」と、女の童——

「見よ、伽藍ぞ」と子の母は、——

父は「いぶかしこの夜に」と。

「鐘は鳴り出づ梵音に、——

紅蓮のひびき。

「伽藍の屋根に火ぞあそぶ、

ああ鳩の火か、焰か」と、

つくづく見入る女のわらは。

（鐘は叫びぬ、梵音に、――

無明のあらし。）

「火は火を呼びぬ、今垂木、

今また棟木、――末世の火、

見よ」と、父いふ、皆火なり。」

（鐘はとどろく、梵音に、――

苦熱のいたみ。）

「火はいかにして莊嚴の

伽藍を焼く」と、子の母は、――

父は「いぶかし、誰が業」と。

（鐘は嘆きぬ、梵音に、――

癡毒のといき。）

「焰は流れ、火は湧きぬ、

ああ鳩の巢」と、女のわらは、――

父は「焼くるか、人の巢」と。

（鐘はふるへぬ、梵音に、――

壞劫のなやみ。）

「焰の獅子座、火に宣らす

如來の金口をわれ聞く」と、

走りすがひて叫ぶ人。

（鐘はわななく、梵音に、――

虚妄のもだえ。

「火は内よりぞ、佛燈は、
末法の世か、佛殿を
焼く」と、罵り、誘る人。

(鐘はすさみぬ梵音に、——
毗嵐のいぶき。)

「鐘樓に火こそ移りたれ、
今か、今か」と、狂ふ人、——

「鐘の音燃ゆ」と、女のわらはは。

(鐘は絶え入る梵音に、——
無間におそれ。)

「母よ、明日よりいづこにて
あそばむ」と、また女のわらはは、——
母は「猛火も沈みぬ」と。

(鐘は残りぬ梵音に、——
欲流のしめり。)

「父よ、わが鳩焼け、失せぬ、
火こそ嫉め」と、女のわらはは、——
父は「遁れぬ、後追へ」と。

(鐘はにほひぬ梵音に、——
出離のもだし。)

不安

人自今服之とて丸下す

...

...

...

...

...

...

...

...

人は今地にうつ伏して

人は今地にうつ伏してためらひゆけり、
うとましや、そよと吹く風のひと吹き、
それにだに怯えたる蠶のごとく、
人は皆ひとつらに頭もたげぬ。

何處より風は落つ、身もおののかれ、
我しらす、面かへし空を仰げば、
常に飢ゑ飽きがたきころの惱み、
物の慾重だげにひきまといぬる。

地は荒れて見よ、ここに「饑饉」の足穂、
うつ伏せる「人」を誰が利鎌の富と、
世の秋に刈り入るる、噫、さもあれや、
畏るるはそれならで天のおとづれ。

たまさかに仰ぎ見る空の日のかけ、
かぎりなきみ光にあひまつれども、
おののける身は、かくて、まごころもなく、
まばゆさに眼もくらみ、癡れてぞ惑ふ。

何處へか吹きわたり去にける風ぞ、
人はまたいぶせくも面を伏せて、
盲ひたる魚かとも喘げる中を、
安からぬわが思ひぞ思ひを食める。

いつよりか自在なる通も失はれ、
 あくがるる甲斐もなきこの世のさだめ、
 わが靈は痛ましき夢になぐさむ
 わが靈は、あな、朽つる肉村の香に。

絶望

現こそ白けたれ、艶も失せたれ、
 物なべてにほひなく呆けてあれば、
 わがこころ——夢うつす蟲のかがみも、
 性しなえ癒けたるうつろに病みぬ。

在るがまま、便きなさを忍びて、
 文もなし、曲もなし、唯あらはなり、
 臥處なき人の生や裸形の痛み、
 悩みなき悩みには涙も涸れて。

おもひでよ、——今は、ただ、あだなる名のみ、
 燈火の滅えにたる煤びし火蓋、
 おもひでよ、そのかみの物のあはれを、
 よろこびをいつよりか忘れはてたる。

眼のあたり、佗しげの小徑の壊れ、
 悲しみの雨ぞそき洗ひさらして、
 土の膚荒めるを、まひろき空は、
 さりげなきつれなさに晴れわたりぬる。

妄執の狼尾草根を張る中に、
たのみなき貝の殻朽ちだにえせず、
陶もののおくだけあまた散らばふ見れば、
丹に、藍に、あぢきなき戀の色どり。

夢もはたおもひでも戀のうたげも、
皆ここにほひ失せ望も絶えぬ、
この現ひしと今われを囚へて、
日は空の上よりぞ酷くも臨む。

草
び
ら

法悦のゑひにひねもす、
ひぐるまはあてにほへど
このゆふべ、ただわびしらに、
くちはつる草びらもあり。

ゆふばえの雲くろすめば、
なにごともなかりしがごと、
ひぐるまを、はた草びらを、
あやめなき間はおほひぬ。

孤
獨

たゆげなる夏のゆふぐれ、

棕櫚の葉ぞひとりゆらめく、——
 その葉すゑ垂れ裂けて、うち顔ふさまは
 絶入のもだえにささげたるもろ手のごとも。

さもあらめ、淨信のひと、

孤獨なる祈念にあえぎ、

まどはしき幻を胸に痛みて、

大地のほめき、煩惱に咽びてあるも。

いぶせげに物の香こめて

この世はも闇におちゆけば、

高天のまどかなる呼吸ざしとだえ、

巖のみ苑をめぐりゆく星もくもるか

あはれ、あはれ、ゆふ潮くらみて

苦の波のゆらめくきさみ、

棕櫚の樹のあぢきなき花の涙は、

幹を傳ひて、ぼろぼろと根にぞこぼるる。

坂路

喘ぎて上るなだら坂——わが世の坂の中路や、

並樹の落葉熱き日に焼けて乾きて、時ならず、
 痛み衰へ、たゆらかに梢離れて散り敷きぬ。

落葉を見れば、片焦げて鏽び赤らめるその面、
 端に残れる緑にも、蟲づき病める瘡の痕、

黒斑歪みて慘ましく鮮やかにこそ捺されたれ。

また折々は風の呼吸い吹くともなく辻巻きて、
 焼け爛れたる路はしも、惱みの骸の葉と共に、
 燃ゆる死滅の灰を揚ぐ、噫理なげの悲苦の遊戯。

一群毎に埃がち愁ふに堪へぬ悪草は、

渴を止めぬ鹽海の水にも似たり、ひとむきに
 心焦られて上りゆく路はなだらに盡きもせず。

夢の萎えの逸樂は、今貴人の車にぞ

揺られながらに眠りゆく、その車なる紋章よ、
 倦じ眩めくわが眼にも由緒ありげなる謎の花。

身も魂も類をれぬ、いでこのままに常闇の
 餌食とならばなかなかに心安かるこの日かな、
 悩み盡きせぬなだら坂路こそあらめ涯もなし。

苦 惱

傳へ聞く彼の切支丹、外宗徒の苦惱もかくや、――

影深き胸の黄昏に密室の戸はさしもせめ、
 戦ける想ひの奥に「我」ありて伏して沈めば、
 魂は光うすれて、塵と灰「ところ」を塞ぐ。

懼しき「疑」は、噫、自の身にこそ宿れ、
 他し人責めも來なくに空しかる影の戯わざ。

こは何ぞ「畏怖」の黨群れ寄せて我を圍むか、
脅かす假装ひに松明の焰つづきぬ。

聖麻利亞かくも弱かる罪人をあはれみそなはし、
信心の力賜はらば「肉」の渚にあざれ、
俯伏に干潟をわぶる貝の葉の空虚の我も、
敷浪の法喜傳へて御恵をただへまつらむ。

しかはあれわが「性慾」の里正は窺ひ寄りて、
禁制の外法の者と執ねくも罵り通り、

ひた強いに踏繪の型を踏めよとぞあな浅ましや、
我ならで叫びぬ「神よ此身をば磔にも架けね」と。

硫黄沸く煙に咽びわれとわが座より轉びて、

火の山の地獄の谷をさながらの苦惱に疲れ、
死せてまた生くと思ひぬ——夢なりき夜の神壇
蠟の火を點して念す假名文の御經の秘密。

待たるるは高きを洩るる啓示の聲の耀き——
信のみぞその證人罪深き内心ながら、
なほも待つ天主の姫が讃頌の節朗らかに、
事果て「汝を恕す」と宣はむその一言を。

陰濕の嘆き

陰濕の「嘆」の窓をしもかく、
うち塞ぎ眞白に、ひたと塗り籠め、

そが上に垂れぬる氈の紋織——
朱碧まじらひにほふ朧ゆさ。

これを見る見惚けにこころ惑ひて、
誰をああ請するひと室なるらむ、
われとわが願を望を、さては
客人を思ひも出でず、この宵。

ただ念す、静かに、はた圓やかに、
白蠟を黄金の臺に點して、

その焰いく重の輪をしめぐらし、
燃えすわる夜すがら、われは寝ねじと。

つれづれの慰さに愛のひとふし

寒でむと、ためらふ思ひのひまを、
忍び寄る影あり、誰そや、——あやにく、
わが血しほ、この時怖れにくだつ。

長き夜を盲の「嘆」おとなひ、

なほもまた花文の氈をゆすりて、
呼吸づかひ、喘げば盛りし燭の
火かけさへ、益なや、しめり靡きぬ。

癡れにたる夢なり、こころづくしの
ひと室には、誘はぬまらうと黙し、
氣躑げには、ためく悔の蝙蝠——
さもあらばあれ、など、おびゆる魂ぞ。

滅の香

おもひでの御堂のうちら、
 寂びに倦むその壁の面、
 そのかみの榮にあかしし
 箔おきもしみらに褪せて、
 金粉の塵も音なく、
 いつよりや、執のほひに、
 滅の香はうちまじらへる。
 幾代々はうつろにうすれ、
 去にし日の吐息かそけく、
 すずろかに薫ゆるいのちの

夢のみぞひまなく往き來ひ、
 ささやきぬ、はた嘆かひぬ。
 あやしうも光に沈む
 わが胸の、この壁のおも、
 惱ましく鈍びては見ゆれ、
 まどはしき影のふかみを
 幻は浮びただよふ、――
 まのあたり、今、緑青の
 牧の氈そが上にしも、
 紺瑠璃の花は重げに、
 彩も濃く、甘寝にひたる。
 しばらくは何事もなし、
 ただあるは酔のこちぞ。
 しかすがに足らはぬおもひは

われとわが宿世呼び出づ、
 こはいかに、牲の仔羊、
 牽かれゆくそのさま見れば、
 朱の血の痛み斑に、
 愛慾のあまき疲れは
 むらさきの汚染と流れぬ。
 あなあはれ、かくと見惑ふ
 束の間に世界は轉ず。
 業のかげ、輪廻の千歳、
 幾度かあくがれかはる
 肉むらの妄執の夢に、
 朽ち入るは涅槃の教、
 懺悔はも黙し埋れて、
 わづらへる胸のうつろを、

煩惱の色こそ通へ。

おもひでの御堂のうちら、

偈頌の聲この時起り、

梵音に宣らすを聞けば、――

物なべて化現のしるし、

黙の華寂の妙香、

さながらに痕もとどめぬ

空相の摩尼のまぼろし。

橡の雨

わが道は雨の中なり、
 汗ばめる額を吹きてなよ風は

蒸しぬ——こころの惱ましき。
雨にぬれたる礫みち、色も鈍ばみて。

わが道は溝に沿ひたり、
その溝を水は濁りぬ、をりをりは
泥にまみれし素足して、
賤しきものの過がひゆく酔ひしれさまや。

わが道は坂を下る、
長坂のそのゆくさきもおもほえず、
しばしと呼吸づきわれあるに、
橡のひろ葉の雨ぞそぎ、たたとしたたる。

底の底

底の底、夢のふかみを
あざれたる泥の香孕み、
わが思ひ、浮びぞ來ぬる。

浮漚のおもひは、夢の
おほ淀のおもてにむすび、
ゆららかにゑがく渦の輪。

とどこほる、緑の錆びに
濃き夢はとろろぎわたり、

呼吸いそづまるあたりのけはひ。

さるからに、限りもしらぬ

静けさや、聲さへ朽ちて

ものうかるおそれに黙もす。

うきなわはめぐりめぐりぬ、

おほ淀のおもてに鈍かびて、

たゆまるる渦の輪のかけ。

ものうげの夢のふかみに

魂たまの失うせゆくひまを、

うきなわのおもひは破やれぬ。

朽くちにたる聲張こゑりあげて、
わがおもひ叫こゑぶとすれど、
空あし、ただ、あざれしにほひ。

かぎりなきこの静けさや、

めくるめくおそはれごち、

はて知しらぬ夢のころろぎ。

死の林

なべてのうへにはいろいろの

雷かみかみこそもだせ、日のをはり、

そのはいいろに彩あざといふ

あやはあえぎぬ、いきづきて。

つめたく、おもき冬のもや、
 あな、わびしらや、戀も、世も、
 うたげも、人も、ひといろに、
 信も、まどひも、身も、魂も。

死のはやしかとあらはなる
 木立の枝のふしぶしは、
 今日、こがらしにまかれつつ、
 悔のおとたてて痛みぬる。

すぎ去りし日のなづさはれ、
 わすれがてなるわがおもひ、

ねびたるかげのゆきかひに
 おののかれぬる冬のもや。

われ迷ふ

たゆげの夜を「煩惱」は
 狎れてむつびぬ「にるばな」に、
 たわやく髪に身をまかれ、
 いよよまよひぬ「にるばな」に。

壁にゑがける執の花は
 聞のひとまの濃きにほひ、
 奇しき花びら、花しべに、

火影も、ねたし、たはむるる。

瑪瑙のうま寝にうちひたり、

たわやぎまさる「にるばな」よ、

艶も貴なる敷皮に

翳びしなゆるあえかさや。

愛慾の蔓まつはれる

窓の夜あけをいましめて、

鸚鵡のこゑは陀羅尼めき、

呼びさますらわ、智慧の日を。

聞のひとまの呼吸ごもり、
くもれる鏡は、やうやうに、

晴れてはゆけど、かげとかげ、
さむる素肌にもまた迷ふ。

穎割葉

日は嘆きわぶ、人しれず、

日は荒れはてし花園に、――

花の幻陽炎や、

あをじろみたる昨のかげ。

日はひた泣きぬ、穎割葉、
種子のみだれを花ぞのに、――

日はいとほしむ、かひわれ葉

もつれ、よれたるその性を。

廢れすさめる園ぬちに

めぐむいのちのはしけやし、

生ひたつさきのかねてより

ものぐるほしくも見ゆるかな。

斑葉の蔓に罌粟の花、

かたほに咲くを、酔ひしびれ、

われと愛づらむ忍冬——

種子のみだれを日は嘆く。

海 蛆

ひき潮ゆるやかに、

見よ、ひきゆくけはひ、

堀江に船もなし、

船人船うたも。

濁れる水脈は、いま、

くろずむひき潮に、

堀江のわびしらや、

そこれる水脈のかけ。

さびしき河岸のうへ、
うごめく海蛆の、
あな身もはかなげに
怖ぢつつ夢みぬる。

まひろき海の香を
戀ひつつあり通へ、
けふしも息づみて
腐れぬ海の香は。

ひき潮いやそこり、
くろ泥のただよへる
堀江に船も来ず、
ましてや水手のうた。

沙は焼けぬ

沙は焼けぬ足裏のやや痛きかな
渚べの慣れし巖かげに身を避けて
磯草の斑に數皮の黄金をおもひ、
いざここに限りなき世の夢を見む。

藍や海原、白銀や風のかがやき、——
眼路のはて、絶えてがけらふものもなく、
ひろき潮に浮びくる遠の帆船は、
さながらに、幸のさかづきと照りわたる。

望みもあざれ身も疲れ心もたゆく、
 人の世の渚に倦める癡れまどひ、
 どよもし返すわたづみの言葉に怯ぢて、
 きのふこそ暗き思ひに溺れしか。

今日や夢みむ幽玄の象をしばし、
 うらやすし鬱憂はひそに這ひいでて、
 狭霧くゆれる荒山のかなたの森に、
 人住まぬ眞洞覚めて行きぬらむ。

さもあらばあれ無益なるまうけごころや、
 薰習はわれとわが身をあざけりぬ、
 げにも劫初の森の香はなほも残りて、
 素肌なるわが肉村にかなしめる。

ああその朝けその森は無智のみあらか、
 あらだまは密かに祈り苔薫じ、
 木の葉うたへるそが中に和毛のめぐみ、
 われやまた深き日かげに臥しけめ——

わが身にひそみうち黙す鹿の子よあはれ、
 なかなか人にすがたの憂くつらく、
 人と生れて住み馴れし森をばさかり、
 しほからき海のほとりをたもとほる。

大和田の原天の原二重の帷

おそろしき謎はうつろの世をつつみ、
 風の光の白銀に潮の藍に、

永劫は經緯にこそ織られたれ。

幽玄の夢さもあらめ、身はうち疲れ、
踏みしだく砂もくらむこちして、
わたりの船を待ちあぐみ、喘ぎてあれば、
浪がしら、ただここもとに崩れよる。

またも、この時、鬱憂は足音しのび、
いと重き罪を負ひぬる人のごと、
(うつろの靈は涯しらぬ淵にやはむ。)
ゆき通ひ、還りてぞ來る、あはれ、わが侶。

大 鋸

大鋸を挽くゆるきひびきは、
ひとすぢにつぶやくがごと、
かぎりなき呻きのごとも。

蒸しに蒸す夏のゆふぐれ、
たゆげなる暑さのよどを
ねりかへし、風はいぶきぬ。

河岸にたつ材小屋のうちら、
大鋸をひく鈍きひびきは

疲れぬる惱みの齒がみ。

材小屋をばかこむは、あはれ、
なまあをき水の香とはた
あからめる埃のほひ。

幅びろの大鋸はうごきぬ、
鈍き音——あやし獸の
しかばねを沙に摩るか。

はらはらと血のしたたりの
おがの屑あたりに散れば、
材の香こそ深くもかをれ。

大鋸はまたゆるくうごきぬ、
夕雲の照りかへしにぞ
小屋ぬちは、しばし燃えたる。

大鋸ひきや、こむら、ひかがみ、
肩の肉かひなの筋と、
まへうしろのびふくだみて、

素肌みな汗にひたれる
このをりよ、材の香のかけに、
われは聞く、蝮のほひを。

夜の闇這ひ寄るがままに、
大鋸ひきは大鋸をたたきて、

たはけたる歌の濁みごゑ。

悪の秘所

汗あゆる日も夕なり、
 空に焼けたる榮映も
 沙にまみるる波のかけ、
 それかとばかり、褪せゆけど、
 なほもほのめく西の湫を、
 黄なる牛か、雲の群、
 角にかけたる金環の
 くづるる音のたゆげなる。

ここには森のこぶけさに
 くらくなびたる紫の
 たそがれの塵ふりかかり、
 塵はにはかに生を得て、
 こは九萬疋の闇の羽、
 かすかにふめき、蔭に蒸し、
 葉うらをめぐり、枝々を
 流れてぞゆく夜の巢に。

いぶせき夏のゆふまぐれ、
 不浄のほめき、濕熱に
 醸す瘟疫、瘧病の、
 ああ、こは森か、ほのぐらく、
 はた音もなきさまながら、

闇にこもれる幹と枝
 尖り葉ひろ葉しほたれ葉
 ああこは森か悪の秘所

火照の天のいやはての
 ひかり咀ひて斑猫は
 世をば惑はす妖法の
 尼にも似たるそのけはひ
 黙し浮びて消え去りぬ
 かなた道なき道の奥
 生あるものの胤を食む
 くちなは纏ふ肉の廳

黄泉路にかよふ悪の秘所

蔓草からむただなかに
 なべては腐れ朽ちゆけど
 樹の幹を沸く脂の臍
 薰陸としもこの時よ
 けがれし身より淨念の
 沁みいづるごとしたたりて
 香にこそほへさながらに

物みなさあれ文もなく
 暮れなむとする夜の門
 黒白の斑の翅うち
 はためきめぐる蛾の蝶よ
 見る眼も迫かれやすからぬ
 思ひもともにはためけば

かくて不定の世も、ここに、
闇の境にくるめきぬ。

どくだみ

堰かれし溝の穢れ水
かぐろみ蒸して沸きそふや、
小家あばら家のかたかけに
どくだみ草の花咲ける、――
くらきにほひにしたしめる
その花のうへに、このゆふべ、
朽木をいでて飛び障る
羽鱗の骸はふりそそぐ。

いかなる罪の凶會日か
なれを咀ひて墜したる。
花どくだみや、氏文の
系をたださば、こは刹利
須陀羅にあらぬさまかたち、
花は小さくもふんだりげ、
葉はまろらかに見ゆれども、
色のおもてぞにごりたる。

けがれて臭き醜草の、
その類葉のひとつには
誰が數へけむ去りあへぬ
怨嫉はなほ根に纏ひ、

生ひかはる芽をくゆすにか——
 これは曼陀羅に織り入れて、
 浄土をしめす實相の
 花ともなさむ本の性。

ああ、眇目の陰陽師、

古りし「鳥」にまかせなむ、

過去に受けにしどくだみの

占に知らるる業の象。

まさ眼に見れば、道を得て

ひとり罪負ふ法類や、

花には薬ぞかがやける、

暗きを照らす火のにほひ。

曇れる空に、鐘のおと

減えなづみつつ、こもらひて、

濃わく溝のけがれ水

かぐるみにほふ日のゆふべ、

飛び障りつつ、呼吸絶ゆる

羽蟻の骸は、刻々の

死と降りそそぎ、降りそそぎ、

掩ひかかりぬ、どくだみに。

やまうど

やまうどは微かに呻く、わなわなと
 胸にはむすぶ雙の手や、

をみなよ、その手を……
やまうどは寝がへるけはひ。

やまうどの枕を暗く、寂しげに、
燈火くもる夜の室、

をみなよ、照らしね……
やまうどは汗す、額に。

やまうどは何をかもとむ、呼吸づかひ
いと苦しげに呟やける、

をみなよ、聞け、問へ……
やまうどの唇褪せぬ。

やまうどの眼は轉び、沈み入り、

きしめくらしき惱ましき、

をみなよ、しづかに……

やまうどに夜の氣熟みぬ。

やまうどは落居ぬ眠り、こめかみの
脈ひよめきて、また弛ぶ、

をみなよ、あな、あな……

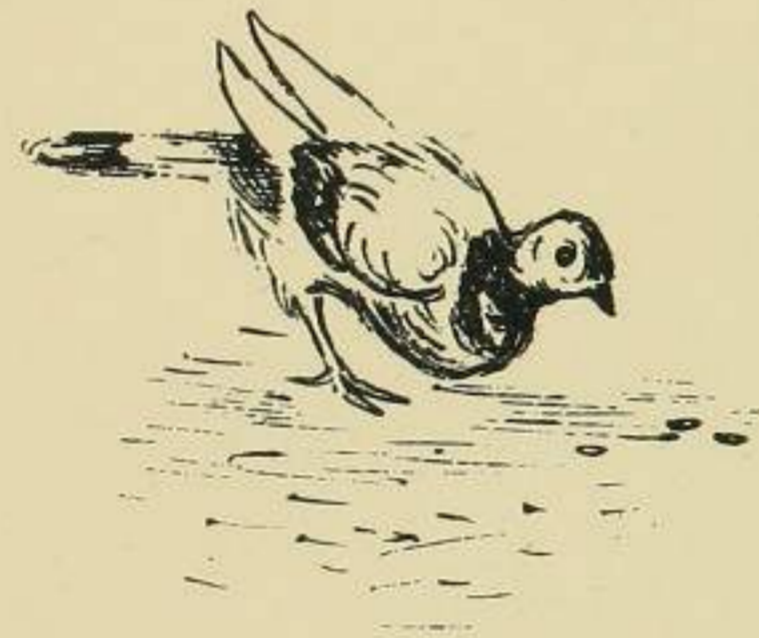
やまうどの面ほほをむ。

やまうどの命ぞうたふ、いやはての
わかれの歌を、ひそやかに、

をみなよ、怖れな……

やまうどの夢はひびらぐ。

春鳥集



210

やまうどの枕を代へよ、時は今、
古りず、汚れぬ布をもて、
をみなよ、いづくに……
やまうどに燈火ともしびきえぬ。

瑞香

艶なる夜の黒髪は
月にきえぎえうつろひぬ、
いづこともなく、瑞香の
花のをぶえのたゆげにも。

朧のかけはゆらめきぬ、
膚に物の音ぞしづく、
にほひの海を春はいま、
すずろに夢の權やうつ。

かがよひ融くるあめつちの、
宴は、さても、まどやかに、
新妻の、あはれ、新室と、
月にはうかぶ月の暈。

風は絞羅の浮織に、
陰と色との舞のあや、
ほのめき映る花すがた、
弱肩、それとさだめなく。

燭の火にほふ聖殿に
いつく女天をさながらの
春に、こよひは、をみなごの
よき名をささげまつらむよ。

戀のみぞ知る深き夜の
 いのりは、とはに金泥の
 紺紙にきえぬ世のまこと、
 あだしごころに、えこそわかたね。

あまりりす

おほどかに、
 にほひほほゑめる、
 わが戀の
 花や、あまりりす。

あやしうも、
 あてに、すゐれんの
 夜をかをす
 こびに似もやらず、

おもひ屈し、
 すこしたゆげも
 うつむける、
 あはれ、あまりりす。

わがおもひ

屈し惱み焦つ「おもひ」は

垢づけるかたゐらが群。――
 早して、ひたもの乾き、
 土の灰舞ひたつ路を、
 喉粘り、くろぶし焼けて、
 めくるめき、よろほひ出でぬる
 時しもや、ふと、めぐまるる
 湧き水にこころうるほひ、
 かがまれる筋もまた伸び、
 よみがへり、その身ささふれ。
 しかすがに、いとどこたへて
 おぼゆるは呵責のちから、――
 背に、肩に、いやがうへにも、
 日輪のつばさ羽ぶきぬ。
 その羽根は石絨なして、

その骨に刻む燧石、
 かがやかに腫をかへし、
 おもむろに天路わたれば、
 降りかかる光の千條、
 かくやくと受くる筈に、
 ししむらは痛み、淨まり、
 かくてわが命は増しぬ。
 くろすみし「ねたみ」の壁を
 したしめる蝸も失せて、
 一念の信のあぶらに、
 燈明をささげまつれば、
 嘆きわぶ胸ぬちながら、
 智慧の火の照らしもぞする。
 まさめにはあまりに眩ゆし、

かぎりなきそのみ光はや、
 眼をとぢて、わが身の分を、
 光明を、母の甘乳と、
 はつはつに吸ひつつあれば、
 同讃の偈頌のもろごゑ
 耳に満ち、起るけはひす。
 酔ひごこち、聲しだらなく、
 われもまたこれに合しぬ。
 あはれ、あはれ、淨きみ光よ、
 煩惱にふかくまつはれ、
 あつしれて、こひまるぶとき、
 憶念の一片をだにも、
 ただたまへ、そをかざしもち、
 現實の苦惱につづく

長路をば、たどりてあらむを。

公孫樹

なべての樹にまさる
 公孫樹よ、くるほしき
 風こそ葉を拂へ、
 梢は天ぞそり、あたり鎮めて。
 なよびは花むろに、
 弱きは盡きて、ここ
 小きぞひしめける
 さやぎを、汝はしも嘲みやすらむ。

公孫樹よ、(ときめきぬ、
わが胸。)あぶら火の
くゆるる、そをにくみ、
ひとりか蠟の火の焰かかぐる。

愛しきや、わだつみの
浪わく深淵に
まかるる貝の殻と、
うづまきみだれ飛ぶ落葉のゆくへ。

厳しく、しづもりて、
たたせるその幹に、
われはも思ひ出づ、

埋れし先の代の象のねぶりを。

朽ちせぬあららぎよ、
そはまた、おくつきか、
いのちの不思議さを、
みづからあやしみて、さては黙すか。

みなと いり

浪喘ぐ入海にして、
萎ゆる帆のふかきはためき、
ものうかるさまや、大船
楫のおともたゆみがちなる。

常夏とこの小島こじまを離かれて、
 いく波折なをり、いく日ひぞ、船路ふねぢ、—
 水手かこは、いま、眼まなこをあげぬ、
 さがあしきこの港みなといり。

うるはしき積つみじろや、あな、
 彩鳥あやどりの尾羽おしほに、真まだまに、
 香かに高き果實こくみびやくだん、—
 いやさらに、かくてもものうげ。

まのあたり、天人てんじんの食じき、
 はた暗くらき世よをば照てらさむ、
 その料りょうをもたらせし船、—

真帆まほぞ、ああ、喘あせぎはためく。

底そこにござる江えの波暮なみれて、
 滯ひそびきのこゑあをじろし、
 黒曜くわいの石いしをみかける
 あだ矢やこそ飛とばめ、この時。

もたらせし光ひかりけおされ、
 わきがたし、真帆まほと水手かことを、
 いづこにか泊はつてつる船ふねぞ、
 まばゆかる真闇まやみの奥所おくところ。

朝
な
り

朝なり、やがて濁川にごりがは
ぬるくにほへど、夜の胞えを
たゆらに運さぶおほめきに、
なほも市場いちばの並なみ藏くらの
壁かべにまつはる川の霧も。

朝なり、——やがて、ほのじろく、
水面すゐめんに映うつる壁かべのかけ、——
明ありぬ、くらきみなぞこも、——
大川おほがはづたひ、さす潮うしほの

ちから逆押さかおすにこりみつ。

流ながるるよ、ああ、瓜うりの皮かわ、
核子いんご、塵ちりわら、——さかみづき、
いきふき蒸ひすか、霧きりは、また、
をりをり、あをき香かをくゆし、
滅うえなづみつつ朽くちゆきぬ。

水際みづぎはほそりつらなみて、
泥ひばみたてる橋はしばしら、
さては、なよべるたはれ女めの
ひとめはばかる足あしどりに、
きしきし嘆なげく橋はしの板いた。

いまはのいぶきいとせめて、
 鐘かねえてなよめくどろ川の
 露つゆはなごりの夢かとも、
 褪あせせゆくひまを鷗かももどり
 あげじほ趁おひて飛とびあさる。

にけれど水はくちばみの
 あやにうごめき緑みどり練ねり、
 瑠璃るりの端はひかり碧あざよどみ、
 揚場あはばの杭くいにまつはりて、
 いろめきたちぬやうやうに。

青ものぐるまいくつ——はた、
 かせぎの人ら——ものごひの

空手あかて——荷足かきのおもき脚あし——
 船ふねに竿さき押し、舵かきとりて、
 舳へに歌を曳ひく船ふねをとこ。

朝あさなり——影は色めきて、
 かくて日もさせにこり川——
 朝あさなり——なべてかがやきぬ、
 市場あきばの河岸がしの並なみ藏くらの、
 そのしら壁かべも——わが胸むねも。

家根のくさ

家根やねの草くさひでりに乾かわき、

頭垂れもだし、萎えて、
 焼けさかる蕨の波に、
 つゆもなき葉をしゆるがす。

家根の草、かくて、乾くか、
 夏は、これ、なかばのみやこ、
 かの瓦照りてたはぶれ、
 この蕨燃えてほほゑむ。

人は、今、倦じ疲れて、
 うちたゆみ蒸され、汗ばみ、
 日ざかりに飽えてまどろむ、
 鬱憂の都の町よ。

あな、あはれ、家根の小草の、
 かぎろへる光の中に、
 熔けとろみ、いのちきはるや、
 それとだに知るひともし。

魂の夜

暮れゆく冬の日
 にばみて、怯ちおびえ、
 顔へぬ、——銀行の
 戸は、いまとさしごろ、
 あふれし人ほとと、
 去り、このちかつ代の

さかえの宮はいま、
掟がきてやとざしごろ。

かくてぞ、いやはてに、
商まきびとおひめある
身の足あしたづたづと、
出でゆくそびらより、
黄金こがねの音ね走り、
傳つたへぬこは虚なし、
あだなる嘲あざわら笑わらひ、
きらめく富とみのうた。

見よ、帳簿ちやうぼの背せなる
金字きんじのおびやかし、

いかしき巻まき々々は、
をぐらくとざされぬ。
いちぢやう、おひめある
ともがら、いつとてか、
償つぐなふたづきなさ——
げに、そのさだめはや。

まつはる執ととのかげ、
身の業わざの、などや、重おもたさ、
あはれ、あはれ、わが魂たまは
むせび泣なく、闇やみのちまたに。

誰かは心伏せざる

ただ見る、むらむらと、
けふりは空にまろがり、
入目のかげ鈍みて、
うつろふ数の煙突。

ただ見る、煤ばめる
いく棟建ちもつらなみ、
かぐろき窓ごとに、
ひらめきわたる焰よ。

ただ見る、管よりは、
するどに蒸氣を噴きあげ、
機械のとどろめき、
狂ほひ、わめきもだえて。

こは、そも、黒がねの
重たき錠のかが鳴き、
こは、また、青銅の
胸肉えぐるおらび音。

きほへる「工廠」の
日に夜をわかぬ痛苦よ、
まさめに、これを見て、
誰かはこころ伏せざる。

ただ見る、壊え、まるび、
 けぶりは空にうづまき、
 夕日に赤ぐるみで
 すぐ立つ数の煙突。

鬱 憂

時ぞともなく、青き露
 したり凝るわがおもひ、
 胸の閑生のうら寂びで、
 はたおぼろめくそが中に、
 夢にやくもる石獸のむなしき睡。

咲きあぐみたるわづらひの
 花は、みづから、あざわらひ、
 音に咽びいで泣く蟲の
 風にもつれてなげかへど、
 噤み悩める石獸の暗きたましひ。

かかるをりしも埴の星、
 空のおそれにおののきて、
 くるみ、あからみ、沈みゆく、――
 かくても黙す鬱憂の
 蠹魚は朽ち入る、石獸の深き眠に。

隣の蒸れ香に生ぐさき

ほたる火、ひそに、たもとほり、
 胸の園生を暮れまどふ
 そが中にして、あはれ、あはれ、
 痺れ壊えゆく石獸の面のくるしみ。

たそがれどき

貴なるかけや、朧たき
 白衣ほのぼの、――
 今しも、萎えし眼よぎり、
 にほふは、姫かびやくえの
 花のうつり香。

玉の器に、いきづく
 燭はその手に、
 つきせぬ執のあぶら火
 もゆるや、焰むせびて、
 ひそに、ほのかに。

夢のゆきかひ、ひまなく、
 かけはゆらめき、
 悔と恨の怨言に
 樂欲くゆすみどりの
 星もなやみて。

朧たき姫よ、その手の
 蟲のともしび、

吹き滅ちてあれ、ああ世に、
むしろこひのむ、わが身は
闇の甘寝を。

陰色、光、まぼろし、

よよと嘆きて、

きえまどひつつ、むなしき
わがおもひでのなづさふ
たそがれ時よ。

五月 霨

ひとつびとつに、君も見よ、

菖蒲の葉ごと、葉のさきに
露ありて、すがり、ゆらめきぬ。

その露のたま、ひとつびとつ、
きらめきぬ、はた、つぶだちて、
浮藻には添ふ水の泡。

水は淀みて、五月霨
かをれる朝を、魂や、身や、
身や我、魂や君か、そも。

水をわすれし水草の
花かも君は、げに、しばし、
戀をはなれし戀の花。

菖蒲の露は、あなや、君、
 ゆらめきおちぬ、五月露
 あせゆく水際を、あぢきなく。

菖蒲の葉ごと、葉のさきの
 ひとつびとつ、その露も、
 みながらおちて、いまはなし。

花がめ

古代なる花がめ、
 花のつゆしづきて、

つやめける古銅の
 みどりなすさびいろ。

たとふれば、しじまの
 谿のおく、垂れてぞ
 さきぬべき夕月、
 その青き一瓣や。

人の世は、さながら、
 宿命の花がめ、
 ここにして、しをるる
 にほひ、日に、また夜に。

よろこびの、愁ひの

雫したたりそひ、
そのおもをはだらに、
汚染のいろむせびぬ。

いと古き花がめ、
花の魂やどりで、
まらうどと誰をし
招ぐや、ああ、今宵は。

夢のむすめ

その一

夢のむすめ、

とこをとめの、
眞白手もて
ともなひゆけ、
とはに問はじ
いまして名は、
いづくはあれ、
ともなひゆけ。

夢のむすめ、
とはに遠く、
いまして手の
左にわれ、
右には花、
ひかる瑠璃の

花のかけに
つつみて往ね。

十歳は虹、

千歳はこれ、

月日の瀬に

めぐるほのほ——

夢のむすめ、

古りにし代の、

ああ、なにゆゑ、

舞ひかがやく。

その二

夢のむすめ、

にほひのかけ、

きえぎえなる

そのくろがみ、

まなざしは、また、

まどはしくも、

おぼろの鳥

あそぶけはひ。

夢のむすめ、

さもこそあれ、

おくつきなす

いましが胸——

そのうつろに

呼吸ふたがり、
われは悩む、
いさやうつつに。

夢のむすめ、
うつつに、いさ、
いましも、また、
まことの日に、
ただむき纏き、
嫁ぎてあれ、—
いのちの香ぞ
われをさそふ。

それゆゑに

日は照りぬ、
そしらぬけはひ、—
日は、今雲に、舞ひ浮ぶ、
よし、さもあれや、
そしらぬけはひ、—
それゆゑに、君を戀ふ。

著我さきぬ、

そしらぬけはひ、—
また花さきぬ、花あやめ、

わりなくも君、
そしらぬけはひ、――
君やかく君やなぞ。

著我^{しやが}すでに、

また花あやめ、

すでに凋^{しよ}れきみなづきの

百合こそさかめ、

そしらぬけはひ、――

君は、ただひとりゆく。

百合さきぬ、

そしらぬけはひ、――

百合はにほひて、弱^{よわ}肩^{かた}の

君が丈^{たけ}なる、

おもかげも似つ、

わがうゑし園^{まど}の百合。

君は、なぞ、

そしらぬけはひ、――

百合はくづれぬ、みなづきの

戀や、みながら、

あだなるねがひ、

あだなる目、われひとり。

渴望
小曲

これに満てむ

素焼のあはれ、喪と幾代かけて、
誰がそも、轉がしおけるわが身ならむ、
そのかみ、埴安姫が夏の一日、
倦みてや製り棄てたる、それか、あらぬ。

さればか、たまさぐりぬる小指の痕
華やぎにほふ渦なし、浮びも出で、
あらたに受けし戀かと、時としては、
鈍びたるその面さへに照りかがやく。

ああ、今、ことならば、われ、命の香の
沸きたつよるこびの酒を、これに満てむ。
あだなる歳の八千歳去にて過がひ、
なじかはうまし、宴にめぐりあはぬ、
醜のうすきにだにも、渴きおぼえ、
かくてぞ、わが身むなしく、缺けもやせむ。

渴　　愛

根づよき執にまつはる「あだしねがひ」
ひまなき吐息にこもる「怨言」も、いま、
はじめを尋めて訊さば、さりげもなき
「おもひ」のかけに、翻れしかなしき種子。

その種子ぞきのふ描きし夢をゆめみ、
 はやくも胸を塞ぎてしじに絡む、
 さもこそあらめ、幾代の業に牽かれ、
 責められはた催ふされ生ひたちぬる。

いぶせき胸の草藪その隈回到
 淫けし「樂欲」はしも這ひもとほり、
 あだなる戀の幸をば貪り逐ふ。

もとより穢れし罪のたはぶれには、
 悔なきあしたゆふべに、求むるもの、
 ただ「渴愛」の火と熾ゆるくちづけのみ。

ほだし

ほだしぞ人を縛しむしかはあれど、
 こがねのくさりとひと目かがやかさば、
 天路をつながれわたる星のごとも、
 にほひてらさむこよなき音のしらべに。

わが身のこの肉村よ罪を解す
 癩れたる埴の土となさはないひそ、
 わかきをひたもの熱きころばへを、
 盛りなす時しもやげに淨まりぬる。

かかる世、かかる身をこそ、われら二人、
 ふたたびたもちがたしと、樂しむなれ。
 君はも天人の衣、かなぐり棄て、
 うつしきこのくちづけに、代ふるゆふべ、
 岩根にさびて埋みし、あらがねだに、
 光にいつしか融けて、流れ出でむ。

末法讚

この世に佛縁つきぬる晶玉はや、
 日の照る賢豆の山を出でて來つれ、
 あだなる樂欲の手、にうちわたされ、
 なまめきにほふや、聲なき歌のごとも。

色なる小函に、巢くひ、麝香に倦み、
 むせびて眠る比翼のつばくらめよ、
 いかなる夢をか、瞬す、細きをゆび、
 艶だつうなじ、黒がみ、——媚のてだれ？

ああ、汝れ、晶玉よ、さときその眼放ち、
 黄金のつばさ、輕げに飛びかふ間を、
 熟えたる戀の落ちゆくは、てを恨み、

おとろへ示すを、みなのはかなさ見て、
 末法、澆季の世とぞ、知りつくさむ、——
 その時、汝が巢も、あはれ、暗き泥に。

君にささぐ

消えゆく影あり、しばし日の高琴、
 まだきに魂をし送る音になたちそ、
 花やぐ野べに、渚の清き濱に、
 わが世に、ふたたび姿さそはまほし。

さはあれ臯月さかりの装ひ棄て、
 天ゆく影の手弱女けふよりこそ
 まことの戀の宮居の新園守、
 見かへすそのまなざしぞかがよひぬる。

はだらに染みし思ひ出の色に薫ゆる
 「こころ」を、これや花瓶君にささぐ、――
 そは幾しほの涙にぬれてにほへ、

人見て、なほよろこびの器ものと、
 貶さば、あはれ、「いのち」を香の爐とし、
 わが身を投げて、さながら炷きてあらなむ。

秋

この夕「秋」はしばしがほどいと優しき
 眉をあげ、ほほ笑み浮べてやすらふとき、
 鳩ありて、めぐしや、かたへの水盤より

あふれ散る玉水を羽うち戯れぬる。

姫はその飛沫厭ひて、にほひ衣の
まつはれる裾ふみしだきつ、惶て翳び、
あなた手を解くに隙洩るる琵琶のおもて、
螺鈿して象どりし花のこぼれいづる。

おぼえぬるかかると思ひをば言の葉もて、
いかがして説きも盡すべき。黄金の雲、
榮映の光に嘆かふ花柏木立。

たゆたへる姫が歌のこゑ。——かかる時しも、
葉の雫しみにらに落つるや苔に黙す。
庭の面もさゆらぎて虹の環をば染めぬ。

楽しや、さあれ、

今日こそはいとも楽しけれ、君を得ては、
水無月の石のつぶとと焼けてありし
心さへ、うるほひに、いまは、尤ち足らひぬ、
胸と胸、いさや、うちほがひ寄せてあらむ。

うまし夢つばさたたみて、たはやぎつつ、
浪の花ちりにほふ磯にたたずむとき、
よるこびの大渡津海に、うつらうつら、
のぞみの帆かかけて、船出す、君と我と。

樂しきや、あはれしかすがに、わが思ひの
奥所には、何ぞもうれたみて、葬のわざ
とりしらへ、火を點し、供へ、香を燻す。

君も知れ、亡せつる「ねたみ」を、柩におき、
「愛」こそは、ふかき友どちと、黒衣まとひ、
ひざまづき、み経誦し、嘆く僧のつとめ。

沙門不淨

惱ましき「おもひ」は、一日、荆棘みち、
悪の深野を、目も盲ひて、遠くさまよひ、
耳ざとに、ひたもの聞きぬ、凶の水

かぐるみわたる、隠沼の沸きたつ音を、

また聞きぬ、淫けの族みだらなる

加持の禱に、護摩木焚く森の祭壇、

火の陀羅尼うちあぐる聲を、はたやまた、

その空を飛ぶ、煩惱の鳥のおらびを。

そのごとくも、汚れはてたるわが「おもひ」、

無明の闇に、執ふかく、癡れてむせば、

この日まで、いつける智慧の金堂も、

今、樂欲の阿蘭若と、丹のまるばしら

焰なすくちなは、纏ひ、奥所より

青き「まどはし」ぞ、我を呼ぶ、沙門不淨と。

技藝のうたげ

美酒ほほゑみ、ともに匂ひかはし、
 瓶よりはた面より、あふれいでぬ。
 舉ぐるは玻璃の蓋、そのみかは、
 技藝の燈火あかく照しさそひ、

かがやく素膚清げに、神々しき
 みすがたこそは、正眼に見もわかたぬ、
 かたみに、想ひ浮ぶる夜のうたげ、――
 さてしもすするに、人を酔はしめたる。

手弱女しぬべは花の巴里の園生、
 桂の香にたつ雲の旗手、趁へば、
 きようある以太利の旅路、精舎の壁、――

言の葉小舟、いつしか、われを乗せて、
 あかつきゆふべと移る物がたりの
 舵とり、帆あげてくださるせいぬ、あるの。

海 の 幸

ただ見る、青とはた金の深き調和、――
 きほへるちからは、ここに潮と湧き、
 不壊なるものの、梵音は天に傳へ、

互みに、しらべ、あやなし響きはす。

すなどり人よ、いましら、頸直ぐに、

勝鬨高くも空にうちあげつつ、

胸肉張れるすがたのゆゆしきかな、

「自然」の鞆に吹ける褐の素膚。

海はや瑠璃の常宮、嚴にかざり、

大綿津見ぞ領したるげにや、この日、

いかしき幸の獲ものにこころ足らふ

いましら見れば、今なほ、神のうから、

浪うつ荒磯の濱を生にあふれ、

手に手に、くはし銚とり、い行きすすむ。

「天平の面影」

徂きしは千歳か、塵か、わが手弱女、

まなざし深くにほふは夢か、あはれ、

そのかみ、榮ありし日の世はさながら、

けふしも、君が姿にあくがれよる。

み空をいなつるび飛ぶその刹那に、

千萬さにはある物ほろぶといふ、

傷まじ、さらば招ぎても、そのおもかけ

ことほぎ傳へむ君が常住のいのち。

いざ君奏でよ笙篳を——草高野べ、

青さび沼もたちまち都大路、

奏でよ——あら鑑もまた妙莊嚴、

供養や禮讚や戀や媚や歌や、

みながら君が手にこそ桐の花の

ゆかりの小笛音にたつ園生にして。

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

日のおちぼ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

ひとしづく

日のおちぼ、月のしたたり、
 うるほせる、誰かあぢはひ、
 こぼれたる、誰かひろへる、――
 あだし世はかくてすぎゆく。
 あな、あはれ、日のきざはしを、
 月しろのにほふおくがを、
 つつしみのあしどり倦まず、
 誰か、世に、とめてゆくらむ。
 過ぎ去りて、かへらぬ利那。

あたらしきそのひまびまは、
 光をば闇にきざみて、
 音もなく減えてはゆけど、
 やしなひの、これや、その露、
 美稻のたねにこそあれ、――
 そを棄てて「命」めぐまず、
 幸御魂くもりてやあらむ。

えしれざる利那のゆくへ、
 いづこぞと誰かさだむる、
 牲の身を淵にしづめて、
 いかばかりたづねわぶとも、
 底ふかく黒暗とさし、
 ひとつ火のかけにもあはじ。

あだなりや、夢の痕あと、
 いまさらに何とかはせむ、
 永劫よ、汝が現實の
 羽ぶきもて、われをばさませ、
 きはみなき「命」のほとり、
 ひとしづくせめて、むすばむ。

静かにさめしたましひの

静かにさめしたましひの、
 ひと日は花とにほひさく、
 ゆふべをまたぬ花なれば
 贈らむすべはなけれども、

わが戀ふる人、君をこそ、
 君が眼をこそ慕ひさけ。

いかにひらきて、たましひの
 花となりけむ、知らねども、
 この曉の水を出で、
 みじかきすがたゆるされて、
 はかなく滅ゆるこの花の
 さだめも、すでに、つたなしや。

高き臺のあらばあれ、
 光みかけるおぼしまに
 垂れてかからむすべもなく、
 底ひもわかぬ青淵の

浪にまかれて流れつつ、
君にむかひてさけるのみ。

静かにひらく花なれど、
花の頸はかたぶきぬ、
夕ばえ匂ふ島かけに
彩帆あげゆく鳥船の
すがたはあらで、さびしくも、
ゆらぎただよふ花の性。

いにしへ一代大地の
いまだ焰と燃えしとき、
火の海原の母の貝、
殻のもろ葉に晶玉を

いつか産みしと人知らぬ、
それにも似たるたましひの花。

夢の花

女のうたへる

緒琴とは、これ名のみにて、
弾くは培ふこの小指、
つちかひ弾けば、あやしくも
琴柱にかかる夢の花。

弾けども音なく、しらべなき、
ああ、それさへもことわりや、

百歳の桐琴となり、
琴は今宵の土と朽つ。

土か緒琴かはたとせの
愁ひをこめていたはれば、
あはれわが眼のうるほひを
たづきに咲くか夢の花。

そのかみの日のよるこびは
あだなる浪とながれ去り、
緒琴に生ふる花草の、
こよひ短かき香に堪へず。

夢のみだれかまぼろしの

まよひかうつつちかふと
見しはをゆびのすががきか、
ああ百歳かはたとせか。

「君がこよひの物のねの、
なにゆゑかくはせまりぬ。」と、
問ふ人ありて、肩おさへ、
問ふ人ありて、手をとるも、

「こよひわが弾く物のねは
朽ちゆく琴のにほひにて、
あやしき花のおもかげを
見き。」と、さながらいかで答へむ。

誘惑

みづぐさ青み夏川の

(まよはしの、これ影か夢。)

水のとばりの奥ふかく、

ゆららに洩るる姫が髪。

眞晝青岸ひたぶるに、

(まよはしの、これ眞鏡か。)

こころひかれてまじろがず、

伏してながむる水の面。

いかなる姫か、ひもすがら、

(まよはしの、これまよはしか。)

いかなる姫かくしけづる、

水のそこなるくはし髪。

川浪のこゑ、水のこゑ、

(まよはしの、これはかなさか。)

こゑを溢れあざわらふ、

「花のおもては見がたし」と。

みづぐさ磨く夏川の

(まよはしの、これその望み。)

底なる姫がかほばせの、

ただひたむきに、見まほしき。

姫がくる髪ただよひて、

(まよはしの、これ、そのちから。)

夢かと流るるそのかげに、

ひややかに笑むまなざしよ。

そのほほゑみにさそはれて、

(まよはしの、これ、そのをはり。)

すずろに落ちゆく身のしづく、

痛みもあらず悔もなく。

人は人として

わが身を怯ちて、遠のきて、

わが手の外をめぐれども、

(星は星なる空の道)。

鳩は鳩なる環をあゆむ。

鳩は頸をかたぶけて、

頸をさらに、あぐるとき、

誘ひ引く手をつと拂ふ

白きつばさの羽根ぢから。

かくても媚びて家鳩の

はやくも馴るるそのけはひ、

片羽あげても移れかし、

わがたなごころ、いざここに。

燃ゆるおもひの火のつばさ、
 それにはあらね、眞白羽の、――
 ああ、わが君よ、―― 飛びうつる
 その眞白羽の君が鳩。

ささげておもふ、水盤に、
 これや溢れむ神の水、――
 鳥は鳥とて羽づくろひ、
 人は人とてものおもふ。

遺 曲

小引――

こはむかし、春のさかりの
 すたれゆくあはれをこめて
 由利姫の夏のみかどに
 つたへたる歌のひとふし。

厳くしや若草野邊を
 稚國としろしめす君、
 御冠に黄金を鑄りて、
 御座をばみどりに装ふ、
 そを見れば、壽も虧けず、
 日も朽ちぬ、驕樂の宮。
 后ひめ、―― 名は加須美姫。
 花姫の中にも、わけて、

うるはしく、朧たきすがた、
 しかはあれ、この世のさだめ、
 移りゆく夢の青淵、
 その底に、さかりのかけは
 あともなく滅え失せにけり。

倒れにき、春の若國、

大王の重き冠も

しらみゆく星とあらけぬ、

姫が身も、いつ荒土と、

いづくにか埋もれはてし。

残りたる瑠璃の礎、

瑯玕の柱のほとり、
 今は、はや、荆棘まつはり、

日のひかり蒸してくゆせば、
 「あな、暗し、ものう」と、いひて、
 焰なき燭を手に執り、
 うらぶれて迷ふ阿加羅子、
 かなたには唇あせて
 にほひなき姿はづるや、
 衰へてたどる加袁里子、
 そのかみは袂をつらね、
 よるこびに飽くこと知らず、
 歌うたひ、琴弾き、舞ひて、
 大宮の春を頌へき

「しなだるる柳のかけに、
 おもひでもくづをれはてぬ。

ほのかには聞けど、南に、
 由利姫の朝廷はありと、――
 ああ、されど、身の疲らしさ、
 行く路のなどしも遠き。
 ちからなきを指は、いかで、
 さはやかに奏でいづべき、
 あだならむ夏のしらべを。――
 悲しみに堪へぬものから、
 伏しまるび、胸乳おさへて、
 すすり泣く、あはれ加袁里子。

阿加羅子よ、いかにと見れば、
 愁ひある眼ざししめり、
 「天津日も盲ひたるらし、

往にし世のすがたを、花の
 欄干を、などやさながら、
 まのあたり映しいださぬ。
 濃紫ゆかりのふしを、
 いとせめて闇路ながらに、
 歌はまし、いざと思へど、
 あやなくに玉の緒みだる。
 しかすがに眞夏の臺、
 夢に入り、身をば誘ふ。と、
 われとわがこころあやしみ、
 たそがるる狭霧のみちを、
 頸垂れ、まどひ、かなしみ、
 またさらに、小夜をおどろき、
 「あかつきをいづこの野べに

むかへむ。」と、阿加羅子いへば、
 加袁里子は「この世の空に
 しのめをふたたび見じ。」と、
 聲あはせ、手を執りゆきぬ。

たちまちに夜みちおちいり、
 窈冥門のとざしに遇へり。
 おののけるころしづめて、
 聳えたつ扉たさぐり、

「由利姫の音に聞きつる

夏城はここか。」といひて、

もろごゑにあやしみあへど、
 闇は今、四方をふたぎで、
 こだまさへ應へざりけり。

時しもあれぐらきしじまは、
 うらぶれの二人が目見に、
 おぼろげの象うかべぬ、
 たとふれば、影もあをみて、
 絶え入りし月のむくろを、
 かき載せし柩ぐるまの、
 水のごとめぐり、たゆたひ、
 浮ぶとも、沈むともなく、
 消えてゆくそれにも似たり。

ややあれば、黒鐵の戸の
 隙すきて、物こそ見ゆれ、
 たちつくす女子ふたり、
 細腕あけて、この時、

すずろかに誘はれよれば、
 こはあはれ、宴のはてに
 失せにたる瑪瑙の香爐。

ややあれば、影はあかるみ、
 あふぎ見るそのまじろぎの
 束の間を、にほひ浮べる
 ししおきの清げなる姫や、
 華乳ぶさ胸にやすらひ、
 弱肩の膚眞白く、
 日の光ここにあつまり、
 香をふくむ唇ふるへ、
 まなざしはをぐらき森に
 豹の斑の射るにも似たる、

神々し、その立姿。

「由利姫か、夏のみかどの
 君か。」とぞ二人よりそひ、
 姫が踏む土にくちづけ、
 つかれたる身をもわすれぬ。

海ちかき山あひの風
 吹き起るおとなひおぼえ、
 歌のこゑ、それかと聞ゆ、――
 「ますらをよ、疾く漕ぎかへれ、
 海の外、蠱の小島へ、
 あやかしの白ただむきに、
 君はしも纏かれやすらむ。」

潮うつ權のひまびま、

益荒夫は聲うちあげて、

「をとめ子よ、しのびて待て。」と、

答ふらむ遠音を聞きて、

阿加羅子は魂もあくがれ、

加袁里子は夢かともどひ、

眼も眩れて僵れ寄る身の

闇の戸に觸るる時しも、

ああ、ここに幻たえて、

寂寞の關の戸ざしは

雷の音に開きぬ。

「黄泉國、奈落の大城

領しめし、うしはきたまふ

夏まつり

その一

金の屏風をめぐらして、

祭物見のしつらひや。

黄泉王はいまさら召す。」と、

門守は責めとどろかす。

かくてこそうらぶれまどひ、

うち悩む二つのかげは、

とこしへに、沈みゆきけれ、

歌もなく、嘆きもあらず、

春もなく、夏もなき世に。

金の屏風の繪もやうは、
光琳もやう花もやう。

花は紫、かきつばた、
水もあやなる雙鴛鴦。

祭物見の大店の
塵だにすゑぬしめやかさ。

縁者のさきの美しき
顔もそろひし女客――

見れば、とりどり、水草の、

まつりの浪に誘はれし

それとはかはる身だしなみ、
清らや、ここの中むすめ。

ことし十五の初夏と、
うちそやささるる眼のにほひ。

かひな、肩つき、たをやかに、
をどりのふりの裾さばき。

をりもをりとて、町内の
屋臺ちかよる絃のねや、

足どり浮かれゆく人の、
表どほりの賑ひに、

眉根すこしくうちひそめ、
そむけがほなるそのけはひ。

十五初夏、くろがみの
艶に厭ふか町の塵。

さなそむけそよ花の顔、
慕ひよる眼のなからずや、

しばしの興にことよせて、
手をとるひまのなからずや。

君を慕ふがわかさにて、
七人きそふ夏まつり、

君を慕ひて、隣町、
われや数にも入らざらむ。

派手なるそろひ、肩ぬぎで、
聲張りあぐるこころ意氣、

そのすがた見て、くらぶれば、
けおされがちのわが戀や。

君を慕ひて、よろこびの

花笠はながさいつかかさむと、

夏の日ざかり、人ごみの
なかにまぎれて立てるとき、

生憎あまにくさわぐ胸のさき、
警固けいこの杖つゑの鳴りてとどろく。

その二

君がすがたをたとふれば、
艶あやだちにほふ花あやめ、

むかしおぼゆる大江戸おほえどの

水の香かながく君に添そふ。

ともに氏子うじこの君と我、
ゆかりもふかき氏神うじがみや、

神のまつりの日に遇あひて、
ふたり、手をとるこのえにし。

情なさけは君が花と咲き、
戀こひにやはらぐわが思ひ。

晝ひるは人目ひとめもうるさけれ、
夜街よまちを君はいとはじな。

かけつらねたる挑燈の
柄繪づくしの華やかさ。

こころ浮きたつ宵の口、
うれしき仲のみちすから、

うたひつれたるひと節の
ことばのはしの身にぞ染む。

いざいざ、神もゆるすべき
戀の灯かけを、君とたどらむ。

傳奇的構想

姫が曲

「何處へ汝しのびて——」と、

南の宮の勝日王、

「なぞ」と、ころもうちまどひ、
多麻姫の手を手に執らす。

(ああ、うたかたや、

惜しむとき消ゆるとき。)

「いづこへ汝いでゆく。」と、

檳榔そびやぐ國の王、

南の國の王なれど、

今はまどひの國の草、

(ああ、うたかたや、

たじろぎて、あやしみて。)

姫は、この時、みがきたる

石のきざはし降りなづみ、

大王あふぎ、ためらへば、

日は香木の戸を刻む。

(ああ、うたかたや、

ためらへど、とどむれど。)

姫が棄てたる沓にこそ

晶玉あそべ、彩羽蝶、

姫が素足のすすしさは

璃瑠座りるざにほふ白蓮華びやくれんげ。

(ああ、うたかたや、

匂ふとも、棄つるとも。)

「應答いひこたへせずや。」と、勝日王、

姫をひかへて問とひよれば、

かがやきいでし生華いぢはなの

垂たれなす姫が柔頸やうなぢ。

(ああ、うたかたや、

問とひよれば、垂たれなせば。)

「ことに身ごもる姫が身の、

いづこへ、ひとり出でゆく。」と、

責せむれば暗くらきまなざしや、
ふかき瞳ひとみに火ぞ燃ゆる。

(ああ、うたかたや、

燃ゆるとや、責せむるとや。)

「濃こやかかなりし一歳ひととせの

ふかきちぎりを、いかがせむ、

姫よ。」と、王わうのかく云へば、

姫は「今こそ語かたらめ」と。

(ああ、うたかたや、

いまこそは、さてこそは。)

黄金こがねを刻きむ龍王りゆうわうの

獨ひとり銛せんの鈴すずを手握たりて、

王は「いざ」とぞうながせる。
 姫は「いまこそ語らめ」と。

(ああ、うたかたや、

いまといひ、いざといひ。)

おもひに姫の沈むとき、

鈴はおとなき海の色、

燈火あぐる龍宮の

少女の像のほの見ゆる。

(ああ、うたかたや、

いろもなく、おともなく。)

あるひは鈴の音にたたば、
 宮のうちこそさわだため、――

姫は身を伏せ、うち咽び、

みたび「いまこそ語らめ」と。

(ああ、うたかたや、

咽ふなり、三たびなり。)

獅子のはしらにまろび寄り、

姫はうちいづ、「君が手に

わが手を添へつ、かのゆふべ、

このきざはしのうへにて」と。

(ああ、うたかたや、

手に手とか、君とわれ。)

姫はまたいふ、「大宮の

榮をば誰かいとはむ。」と、

姫が聲ねは睡蓮の
水にさゆらぐ夜のこゑ。

(ああ、うたかたや、

夜のこゑ、花のこゑ。)

またいふ、「悔いて、うちわびて、
さびしく、ひとり歸らむ。」と、
そのふしぶしをあやしみて、
王は、「いづこへ歸るとか。」

(ああ、うたかたや、

うちわびて、あやしみて。)

「水より湧ける水の泡、
泉の底に生ひたちぬ、

君は南の國の王、

わが身もとより水の精。」

(ああ、うたかたや、

水の精、水の泡。)

姫はまたいふ、「一歳や、――

さきの夜と、このけふの日や、

かの夜に君はわかしくして

王座に即きし夜の宴。」

(ああ、うたかたや、

さきの夜と、けふの日と。)

王はかこちぬ、げに、さなり、
かの日に榮えし日の王座。」

姫はまたいふ、「燈油燃え、
黄臘照りし夜のうたけ。」

(ああ、うたかたや、

夜のうたげ、日のわりさ。)

さてしも、王が前にして、

「ああ、愛慾と驕樂と、

かの夜、この身をさそひき。」と、

ひさまづきてぞ姫のいふ。

(ああ、うたかたや、

愛慾と驕樂と。)

姫はまたいふ、「大宮の

ひかりこめたるかの夜半に

泉をいでし少女、われ、

歡喜女天を祈りき」と。

(ああ、うたかたや、

祈より、泉より。)

見よ、今、姫がひさまづく

衣の紋に影を添へ、

檳榔樹下りぬ、紫金羽の、

胸毛さ青の垂尾鳥。

(ああ、うたかたや、

影のさが、鳥のあや。)

姫はまたいふ、「かの夜すぎ、
七日すぎにしその朝

御狩にたたす國王の
われを泉に見たまへり。」

(ああ、うたかたや、

かの夜すぎ七日すぎ。)

「そのとき汝、しろがねの

わが弓とりて随へり。」

「ああ、その日より宮のうち、――

この身もとより水の精。」

(ああ、うたかたや、

いざなへり、したがへり。)

姫はまたいふ、「夜の空に

かかりて、月の満つること、

きさはし高き一歳や、

みごもりみちぬ胎の月。」

(ああ、うたかたや、

満つるにか虧くるにか。)

にはかに姫はおののきて、

「満ちてもゆくか胎の月、――

泉のそこの咒咀のこゑ、

日として聞かぬ日ぞなき」と。

(ああ、うたかたや、

かの咒ひこの愁ひ。)

「水の國なるおきてとて、

人の世に出で、人の子を

一人産むときうまれ兒の
千人は死なむ水底に。」

(ああ、うたかたや、
千人とや、一人とや。)

姫はひそめく、「千人子の

泉のくへの血に泣けば、

夜は星の輪きしりおち、

晝は日の軸折れ朽つ」と。

(ああ、うたかたや、

折れくだち、きしりおち。)

またいふ、「かくて、水底に
かへりて、罪を重ねじ。」と、

その言の葉のあと趁ひて、

王は「われこそともなはめ。」

(ああ、うたかたや、

重ねじと、離れじと。)

南の國の勝日王、

多麻姫の手を手にとらし、

しのびやかにも、ふたりして、

石のきざはし降りたたす。

(ああ、うたかたや、

手をとらし、降りたたし。)

なかつ神棲む梅檀の

森のおくがの泉尋め、

二人はつひにたどりつき、
ともにかがふ水の底。

(ああ、うたかたや、

水のそこ、戀のはて。)

王は湧きわく水を嘗め、

「いざ、この水をとことはに、

かつぎてゆかむ、水のそこ——

今こそ棄つれ日の王座。」

(ああ、うたかたや、

つかのまに、とことはに。)

弱肩しろき戀の魚、

姫は衣をかい遣りぬ——

衣のあやのきらめきは

瑪瑙の海ゆく孔雀船。

(ああ、うたかたや、

孔雀ぶね、美しうを。)

たちまち青き水の空、

王が身もまた沈みゆく、

王はとちたる眼をひらき、

ひとたび姫がすがた見つ。

(ああ、うたかたや、

姫か、そも、泡か、そも。)

その手を王はとりたれど、

泉ゆらゆら湧き上り、

姫が胸乳はさながらに
ながれちり敷く雲母雲。

(ああ、うたかたや、

わきのぼり、くだけちり。)

王は、この時、眼も眩れて、
まろび去ぬとぞおぼえたる。
今また、ふかき水を出で、
耳には姫の聲を判く。

(ああ、うたかたや、

姫のこゑ、水のこゑ。)

泉のくちにうかびいで、
めざめし王が頸まき。

姫はうちいづ、「かなしくも、
水には慣れぬ君がさま。」

(ああ、うたかたや、

うかびいで、うなじまき。)

姫はまたいふ、「みなぞこは
水のをとめの星月夜、
日の驕樂は君にあれ、
いざ」といひさし、ほほゑみぬ。

(ああ、うたかたや、

そのゑまひ、このねがひ。)

姫は、ほほゑみ、くだりゆく、
ひとりうかがふ王が眼に、

象牙かたどる絃月の
ただよひ沈む水の空。

(ああ、うたかたや、

うかがへど、ただよへど。)

さび斧

「夫の伊佐奈翁よ。」それや、
しわみたる曲嘴の妻の

止利よ、など、さやは囀づる、

夫の伊佐奈翁と、——措きね。」

「さもあらば、汝、古伊佐奈、

たかまさる沖のなごろに

喘ぎつつ、潮しば吹く

老くじら翁よ、それか。」

夫の伊佐奈さび斧ひさげ、

妻の止利は珠數を手に纏き、

橘の樹をさしばさみ、

むかひゐて、ののじりかはす。

「今日も、また宵やみならで、

祥なくも怪鳥さけびぬ、

あきはてぬ、この深山はや、

嘴太の妻よ、死鳥。」

「死鯨。」やよ、老がらす。」

「ああ、わが夫、口ぎたなくも、
のめきてあればさぶしも、
わかき日のことを思へな。」

「わかき日を汝も戀ふるや、
ただ戀し、われは古里、
親の國、母の渚べ、——」

「戀の舟、そがうへに、また——」

「なほ嫉め、——舵の枕か、
は、は。」と、夫の伊佐奈のいへば、
妻の止利は「年ごろ、汝が
海がたり、また磯がたり。」

「黒水の晝は淀みて、
隠沼の夜の怪火、
なびかへる山の小管は
荒磯べの香をし知らじな。」

「夫の伊佐奈、汝とあひ見て、
はや四十の歲月かさね、
海がたり、また磯がたり、
海を見ぬおのれも飽きぬ。」

「倦みつるか、はや、わが胸の
底をしも尋めざるひまに。」
「汝はいふ、かしこには舟、」

眞帆あげてゑみつつゆくと。」

「げに、さなり、」汝はまたいふ、

かしこには潮と潮、

干てはまた満つる朝夕、

男の浪は女の浪趁ふと。」

「げに、さなり、されどまた、」「ああ、

けふこそはわが海がたり、

はや聞きて、はや飽きてあれ、

その海を。かしこには、また——」

夫の伊佐奈いまは黙しぬ。

「かしこには、鷗てふ鳥——」

青浪に翅ひたして、

千重の浪、百千の鷗。」

夫の伊佐奈うちほほゑめば、

妻の止利はいと誇らしげ、

「金色の如來阿彌陀の

御經をも誦んずるわが身、

「さればまた弛くはあれど、

夫の淨土——海としいへば、

夜がたりの片帆片羽の

ふしぶしも知りぬ、つばらに。」

「それこそは、止利曲嘴の

えうもなき空轉よ、
 ごくらくの妙音鳥も
 汝が聲にひるみやすらむ。」

「さないひそ、わが夫の伊佐奈、
 海の人、海の伊佐奈は、
 うまし魚鮪つく銚を、
 若うして、いしくもうちき。」

「その銚を、星のごとくに
 射てもゆく、その銚を、止利、」
 夫の伊佐奈、妻の止利見すゑ、
 「その銚を、何とかは知る。」

「鮪つくくと汝はいふ、——さあれ、
 わすれるつ、二人は今日を、
 みのらざる門の桶
 咀はむと、いひにしものを。」

夫の伊佐奈、右手にさび斧、
 からびたる腕たゆげに、
 ためらひつ、「あはれ、たちばな、
 わかき日の、これも、かたみか。」

「實らざる、何のかたみぞ、
 むなしかる夢や。」「さな、さな、
 妻の止利よ、さな、啄みそ、
 汝が口は老いてすすどし。」

「實らざるいな、咀はむと

橘を——むかしのかたみ——

汝こそは云ひもいでつれ。」

「げにかたみ、——古里の種子。」

「汝こそは、いくばくもなき

この命つきぬその間に、

橘の花さく見むと、——

花にほひ、實るを見むと、——」

「橘はにほはざりきな、

海の里とほく離れて、

山あひのとかけわびつつ、

わがごとくも年を経しのみ。」

夫の伊佐奈また言ひつぎぬ、

「汝を見しその日のはじめ、

迷ひ來し谷村の夜、

霹靂は峰をふるひき。」

「亡き母はつねに語らく、——

雷電のやしらの神は

えうなくば人をあやめず、

その聲に蹇者も起つと。」

「火は走り、焔は飛びき、

かの夜に」と、伊佐奈のいへば、

妻の止利は「神もゆるして、その夜より結べるえにし。」

「そのをりに、わが秘めし玉、

三つぞ、ああ、白きは眞珠——

海の月、赤きは珊瑚——

これ星か、海のうづたから。」

妻の止利は「その二つをば、

汝が手よりわが手に傳へ、

げに、かくも珠数のつしだま、

山の實を照らしにほはす。」

「そのひとつ、汝には秘めて、

ここにしも埋めおきたる、

橘の、これや、生たま、——

芽ざしし日、はじめて、告げぬ。」

「夫の伊佐奈、などや惜しみて、

さは秘めし。」あはれ、妻の止利、

埋めしは胸のひめごと、

生ひたちし木にも花なし。」

「花もなく、また實もなきや、

夫の伊佐奈。」いで、咀はなむ、

來む歳ぞ繁葉の海を、

くだけちる浪のしぶきと、

「しじに花にほひいでなむ、
わが夢のうつのごとも。」
夫の伊佐奈くごもりぬるに、
妻の止利は、ただ聞きに聞く。

「妻の止利よ、いざ咀はかむ、
さび斧をわが手にあげて、
橘の根をうたむとき、
しばし待て、やよと、汝は言へ。

「何ゆゑと、わが問はむとき、
來む年ぞ花はさきなむ、
あやまたず實りはせむに、
橘と、なだめて言ひぬ。」

妻の止利は老の眼ほそめ、
老の口ゆがめてあれど、
夫の伊佐奈さび斧とりて、
ほほゑます、はたまじろがず。

橘をうたむと、あげし
さび斧は「やよ、待て」と、妻の
止利の、まだ言ひもあへぬに、
ちからなく、夫の手すべりぬ。

夫のまへに白き影ゆき、
手をおくと、妻の止利は見て、
妻のまへに、ゆたに、まひろき

海を、夫の伊佐奈は戀へり。

夫の聲は潮の遠鳴り、

「汝と見し一年の後、

なつかしみ、われは持て來ぬ、

咒女の蠱の鏡を。」

夫の聲は波瀲のどよみ、

「咒女は麓の村に、—

古鏡映すは何ぞ、

海戀し、母の渚へ。」

夫の聲は雄の血、雌の血の
浪のあや、「ああ、父のかけ、

母のさま、—さてはたゆたふ
海の夢、磯のまぼろし。」

夫の聲は狂ひ高鳴る

うづしほか、「はしきわが妻よ、

偷み見て、汝は嫉みき、

まぼろしの蠱の鏡を。」

「われは、げに、われは嫉みき、

をりよくも峰のみ寺の

尼君の來まさざりせば、

さながらに呼息も絶えけむ。」

「妻の止利よ、何をか見たる、

その面に。「あな夫の伊佐奈、
涯もなき海と空とを
われは見つ、海は少女の——」

「海はげに、少女の胸か。」

「やがて、また、青き樹陰の

籬みち。」ああ、妻の止利よ、

青葉こそもとの橘。」

「そのかげに夢ぞ花さく、——

黒髪のわかき手弱女、

あらはなる素足も嫉し。」

「妻の止利よ、そはわがもとの——」

「そは知らじ、——その手弱女の

手をとりにて、汝は泣けり、

ねたきかな、——ああ、そのをりよ、

尼君はここに來ましき。」

妻の止利は言葉よどみて、

「尼君は鏡見すかし、

み光の徳に淨まり、

海も、はや、なごみぬといふ。」

「み光とや。」「その古鏡、

尼寺におさめおきつる

その日より、映すみかざりや、

花鳥も淨土のすがた。」

「古鏡——さもあらばあれ、
この老の胸をばいかに。
わが銚は友を斃しき、
戀がたき——眞鮪や、あはれ。」

「その銚を、星のごとくに
射てもゆくその銚を、止利。」
夫の伊佐奈、妻の止利見する、
「その銚を何とかは知る。」

妻の止利を、夫は見するつつ、

「たをやめは、彼が後逐ひ、
深海の底に沈みき、

われは、ああ、いかに、汝がいふ

「老鯨、山に乾びぬ、
さあれ、戀し、戀の古里、
たちばなの青き樹かけの
籬みち、母の渚へ。」

妻の止利は、ひとりおどろき、
あやしみぬ、さらに嫉みぬ、
その海を、手弱女を。——夫の
伊佐奈いふ、「すべてたはごと。」

夫の伊佐奈さび斧とりて、

「橘を、いざ、咀はなむ、

さきに、わが契りおきつる
言の葉を、妻の止利言ひね。」

夫のまへに、白き影ゆき、

ささやくと、妻の止利は見て、

黙すとき、斧はくだりぬ、

桶は根より倒れぬ。

あなや斧、あなや桶、

花もなく、つひに實もなし。――

「あなや、妻の止利よ。」と言ひて、

夫の伊佐奈、呼吸ぞ絶えたる。

人魚の海

「怪魚をば見き」と、奥の浦、

奥の舟人、――「怪魚をか」と、

武邊の君はほほゑみぬ、

「怪魚をばかつて霧がくれ、

見き」と、寂びしく、ものうげに、

舵の柄を執る老の水手。

武邊の君はほほゑみぬ、

水手はまたいふ、「そのおもて、

美女の眉目濃く薰りぬ」と。

水手はまたいふ、「人魚とは、
げに、それならめまさまにて
見しは、はじめてその目に」と。

船はゆらぎて、奥の浦、

霧はまよひて、ひかりなき
いり日に憫む秋の海。

「げに、かかりき」と、老の水手、

「その目もかくは蒼白く、
海はものさび、呼吸づきぬ。」

「舩ふるへわななきて、
波のうねうね、霜じみの
色に鈍みき、そのをりに——」

武邊の君はほほゑみぬ、
水手の翁は舵とりて、
また呟ける、「そのをりに——」

武邊の君は眼を放ち、
海を見やれば、老が手に
馴れたる舵の軋む音。

船は、この時、脚おもく、
波間に沈み、落ちいりて

ゆくかのさまに、たちろぎぬ。

水手の翁もほほゑみぬ、

凶の時なり、奥の浦、

ああ、人も人船も船。

昔の夢ぞほほゑめる。――

「そのをりなりき、たちまちに、

波は燃えぬ」と、老の水手。

つぎで、またいふ、「海にほひ、

波は華さき、まどやかに

夕日の臺かがやきぬ。

「波はあひ寄り、あひ歌ふ、
焰のきぬにつつみたる
珠かさゆらく、歌のこゑ。

「そのをりなりき、眼のあたり、

人魚うかびぬ、波は燃え、

波は華さき、波うたふ。

「黄金の鱗、藍ぞめの

うしほに浸るそのおもて、

人魚は美女の眉目かをる。」

昔の夢ぞかへりくる。――

凶の時なり、奥の浦、

ああ時も時海も海。

「瞳は瑠璃」と老の水手、

「胸乳眞白に、濡髪を

かきあぐる手のしなやかさ。――

「武邊の君よ、かかりき」と、

言へば諾き、「見しは、そも、――」

殿はほほゑみ「いづこそ」と。

「殿よ、ここぞ」と老の水手、

眼をみひらけば、霧の墓、

ただ灰色の海の面。

昔の夢は嘲笑ふ、――

「いづこ」と問へば「ここ」と指す
手こそわななけ、老の水手。

今しも船の帆は怯え、

音をひそめぬ、霧の海、

ただ灰いろの惟のみ。

「げに、かかりき」と老の水手、

「船も、狭霧も、海原も、

胸のどよみも。今日やまた――」

眩く、「あなや、渦まきて、

霧は狭霧を呑み去りぬ。

殿よ、いり日は波を焚く。」

武邊の君は身じろがず、

帆は——「あな」と、ただ老の水手、

帆は紅に染りたり。

「あな、あな」と、また老の水手、——

人魚うかびぬ、たちまちに、

武邊の君が眼のあたり。

ふたつに波はわかり散り、

人魚うかびぬ、身にこむる

薫もふかし、波がくれ。

人魚の聲は雲雀ぶえ、——

波も戯れ歌ひ寄る

黒髪ながき魚の肩。

人魚の笑はえしれざる

海の青淵、その淵の

蟲の眞珠の透影か。

人魚は深くほほゑみぬ、

戀の深淵人をひき、

人をほろぼすほほゑまひ。

武邊の君は怪魚を、きと、

睨まへ立ちぬ、——笑の勝、

入日は赤く帆を染めぬ。

武邊の君は船の舳に、——
 さながら氷るその血しほ、
 海には燃ゆる波と波。

武邊の君は半弓に
 矢をば番ひつ放つ矢に
 手ごたへありき怪魚のこゑ。

ああ海の面波は皆
 おののき氷り船の舳に、
 武邊の君が血は燃えぬ。

痛手に細る聲の牙え、
 人魚は沈みゆくひまも、
 なほほほゑみぬ戀の魚。

むくい強し眼に見えぬ
 影の返し矢われならで、
 武邊の君は「あ」と叫ぶ。

人魚のゑめるその面に、
 武邊の君は亡妻の
 ほほゑみをまた眼のあたり。

亡妻のゑみ怪魚の眼と
 怪魚の唇——悔ゆるとも

332 今はおよばじ波の下。

昔の夢はひらめきて
闇に滅え去り、日も沈み、
波は荒れたち、狂ひたつ。

暴風はしまく夜の海、
水手の翁はさびしげに、
「船には泊つる港あり。」

泊つる港に船は泊つ、
さあれ、すさめる夢のあと、
人のこのころの巢やいづこ。

武邊の君はその日より、
こころ漂ひ、二日経て、
また、たどり來ぬ、奥の浦。

領主の館の大刀試合、
はた夜の宴名のほまれ、
皆棄て去りて、癡れ惑ひ、

二日を過ぎしそのゆふべ、
武邊の君は、そそりたつ
巖のうへに、ただひとり、

383 巖のもとに荒波は
渦まきどよみながめ入る

おもひも狂ふ瑠璃の夢。

帆かげも見えず、このゆふべ、
霧はあつまり、光なき
いり日たゆたふ奥の浦。

武邊の君に幻の

すがた浮ひぬ、亡妻の

おもわのゑみと、怪魚のこゑ。

「幻の界ぞ真なる。」――

武邊の君はかく聞きぬ、
痛手にほそる聲の牙え。

眼も、くるめきぬ、あな、あはれ、

心もあはれ、青淵に

まきかへさるる渦の波。

武邊の君は身を棄てて

淵に躍らす束の間を、

「父よ」と、風に呼ぶ聲す。

武邊の君の身は、あはれ、

ゑまひの渦に、まぼろしの

波にくるめく夢の泡。

「父よ」と呼びぬ、奥の浦、

水手の翁はその聲を

眠らで聞きぬ、夜もすがら。

水手の翁は曉に

奥の浦べを「父」と呼ぶ

姫のすがたにおののきぬ。

「姫よ、怪魚かと魂消えぬ、
は、は」と、悲しう老の水手、

「姫よ、さいつ日、わが船に——」

「父は人魚のあやかしに——」

姫は嘆きぬ、「父はその

面わのゑみにひかれき」と。

「姫よ、武邊の君が矢に

人魚は沈み、夜の海、

あらしの船」と、老の水手。

姫は嘆きぬ、「名のほまれ、

領主の館の大刀試合、

父は辭みてあくがれき。」

「姫よ、甲斐なき人の世」と、

老はつぶやく、姫はまた

「父は怪魚棲む海の底。」

ああ幾十度「父」と呼ぶ

姫が聲ねにちからなく、

海はどよもす荒磯べ、

姫は「母よ」と、聲ほそく、

「母よ」と呼べば、時も時、

日はさしいづる奥の浦。

黄金の鱗きらめきて、

高波白くたち騒ぎ、

姫を渚に慕ひ寄る。

三度人魚を眼のあたり、

水手の翁は「三たびぞ」と、

姫をまもりて、たじろげば、

渚かがやく引波の

跡に、人魚は身を伏せて、

悲み悩む聲の冴え。

姫は人魚を、そと見やる、

人魚は父の亡骸を

雙の腕にかき擁き、

胸乳を染むる血の痛手――

武邊の君が射むけたる

矢鏃のあとの血は朱に。

人魚は、やをらかなしげに、

面をあげぬ、かなしめど、

なほ、ほほえめる戀の魚。

人魚は遂に絶え入りぬ、
 姫は、すすろに亡父の
 むくろに縋り泣き沈む。

渚どよもす高波は、

ふたたび寄せ來老の水手、

「あなや」と叫ぶひまもなく、

武邊の君が亡骸も、

姫も、人魚も、まぼろしの

波にくるめく海の底。

水手の翁は、その日より、
 海には出でず、「まさめにて、
 三度、人魚を見き」とのみ。



獨絃哀歌



さまよひのうた

をぐらき森の常陰にうそぶき入る
 汝がさまよひの歌こそこだましぬれ
 うたふは胸の火なほも燐ゆるがため
 迷ふは世の途を倦みて行くによるか。

天なる宿に星はかがやけども、
 時劫のおほ浪刻む柱見えす、
 人にも知られで果つる魂と身との
 悶えと、その寂しさの況して、あはれ。

さはあれ、まぎれ入りぬる懈怠のかけ、
 いぶせき鬱憂の夜に命極り、
 短かき生涯の途かへりみなむ

その時夢のうつろと知らむもうし、
 浄まる信のめぐみを仰がざらば、
 胸の火歌ごとく、ともに空ならまし。

苦惱の畑のつとめ

「こころ」の糧をわが取る菜園をば、
 はえなき「おもひ」ぞ、日毎に、培ひぬる。
 さてしも、萌ゆる歡喜の蒿首の芽さへ、

愁ひの狡霧にしめり、わづらひ伏し、――

はたまた怖れに沈む悲しき界の
無明の大風つよく吹きすすみて
生ひとし生ふる「いのち」の葉莖は破れ、
「ねがひ」も「のぞみ」も空に滅え去る日を、――

ひともと立てる花草奇しくあれや、
誰が手に播けるともなく、おのづからに、
この如、ひとり凋まで、いよいよ匂ふ。

さればよ、そが豊なる色と香とに、
つきせぬ慈悲の「めぐみ」を讃めただへて、
苦惱の細のつとめに、なほも、行かむ。

薔薇のおもへる

黄金の朝明こそはおもしろけれ、
さ霧に匂ひて、さらば咲きぬべきか、――
嘆かじ、ひとり立てども、わが爲め、今、
おもふに、光ぞ照らす、さにあらずや。

嘆かじ、秋にのこりて立ちたれども、
小路を、(さなり薔薇のこの通ひ路)
手を組みかはし、ささやく二人のかけ、――
ああ、今、静かに、さらば咲きぬべきか。

少女は熱きなみだに、こゑも顔へ、
をのこは遠きわかれを惜しみかこつ、
あまりに痛きささやき霜のごとも。

かたみの、これよ花かと摘まれむとき、
音なく色に映るもわりなきかな、――
二人は知らで過ぎゆく、――將た嘆かじ。

さらばよ君

さらばといふに、ことなき君がゑまひ、
にほへる面わの罪か、さにはあらじ、
望みも、よるこびも、はたわが身さへに、

さながら君にささけて、情の香の

くゆせるその眼のふかき淵をさぐり
はなやぐ聲ねのあやにまつはりつつ、
幸はふ戀の好き日もさはにありき、――
ああ、など君がゑまひに罪あるべき。

艶だちかをる薔薇の花のうへに
日のかげ蒸しぬれば、媚びなまめきたる
いるこそ君が面わに照り映ゆらめ、

うましきゑまひや、あはれ、嫉き花の
あだなるたはぶれとしも、思ひ消ちて、
さらばよ戀の花園、――さらばよ君。

萬法流轉

靜かにこれを觀ぜよ、壁のおもに
 映れるやなぎの枝の起き伏すかけ。――
 そのかけ、忽ち消えぬ日をば障へて、
 ただよふ雲しおほへば夢のごとも、

そはまた、ややに明りて、さすひかりの
 うつつに白くまとふをながめいれば、
 かつ墮ち、かつ浮び來るかけに牽かれ、
 こころも共にゆらめき満て干ぞする。

ああ、その影の答のことともなく、
 うつろに見えはすなれど、鞭うつごと、
 無常のおきてを、切に諭し示す。

いかなる物か、苦の界に起滅せざる、
 萬法流轉のさまを味はひ知り、
 隨がひまかせて、さても、われはあらむ。

よきしほ

好き機流れて去にて、返り來ねば、
 空しきゆくへ見やるも、甲斐なからむ、――
 二人が胸をあかさむ日は、ふたたび、――

この世の隈にはあらしよしやあだに、

手に手を、その後組ますゆふべ來とも、
忍べるいのち寂しき香のみたちで、
言はむのおもひも、強ち洩らしにくく、
聞かむの切なる當を、はや忌ままし。

失せゆくそのたまゆらの「時」とともに、
互に秘めてをばらむころのはし、――
はかなき戀の小壺は、どこしなへに

生きてふ珍の薬を、あはれ籠めて、

「黙し」の海に、さながら沈みゆかば、
色なき「悔い」のうたかたの立ちもやせむ。

蓮華幻境

わが、この胸の池水、一日にほひ、

「おもひ」は凝りて蓮華と生ひたち咲く、

しぬびに、君よ、この岸かの水際に、

幻ふかき「いのち」の香をば尋めよ。

その時、蕾の夢さめ、鉢特摩華の

ほのかに、歌ひいでぬる願を聞け、

「かなたへ、いでや、みんなみへ、緑のくに、

情の日の彩おほき空のもとへ、

君よ。」と、うちいで、誘ひなせば、
せめても君は辭まじな。「さらば、かして、
ほのほの戀のこころの古里へぞ。」

つづいて、また、うちあぐる言の葉には、
「常樂涅槃の土のかをるところ、
よろこび盡きぬ種子こそ深く宿れ。」

草やま

草の葉しじに靡かふ草やまにぞ
かがやく光にほひて、うつらうつら、
しづかに夢見うかるる甘しこの目、

わが身も魂も、さながら、ただよふ影。

さもあれ、温み、和める、巢ごもりより、
いつしか、覺めて、見返すまのあたりに、
くゆりて、生れもいづなる、珍の花よ、
こは、そも、何の、徴ぞ、媚の、ゑまひ。

天津日高羽も、彩によるこび搏て、
草やま、稚きみどりの、ただよひより、
見よ、今、きざし、割れし、幸の、すがた。――

めぐしく、はたいつくしき花よ、あはれ、
揺めく胸に、いだけば、この世ならぬ
いかなる戀か、ふたたたび、われは夢む。

優曇華

遽かにわが身かはりぬ、まことや、今、
 聲なき「よろこび」は手を高く舉げて、
 わが肩つきしろひつつ、示すがまま、
 遷轉無窮の夢ぞ巻きて披く。

先づ見る、——町をながるる石だたみに、
 酒の香衣のみだれの泡だち添ふ、
 つづきて、なほも見てあれば、生に黙す
 「自然」の嚴のちからのわが身に染む。

どよめく巷も、いつしか樂のしらべ、
 雲なす人のことごと、色もふかき
 光の輪をし背に負ひ、舞ひて浮ぶ。

藤たき人よ、この時、かしこを君、
 極熱豊満の土しばし抽きて、
 優曇華にほふがごとく、君も過ぎぬ。

頼るは愛よ——その一

争ひ絶間なき世の海のほとり、
 をぐらき戸張はおちぬ、いかにかせむ、
 潮は寂しく沈み、浪は暮れて、

機はたの音ねいまこそ軋きめ。ああ、わが日の

命いのちの榮はえも、惱なやみも、あだに滅ほろび、

残のこれるわが身の魂たまや、罪つみの重おもく、

思おもひ出しげき荆棘げきの廣野ひろのを行いき、

暗くらみやみとさす夜よすがら、さまよふべき。

頼たのむは頼たのむは「愛あい」よ、君きみによりて、

わづかに過すぎ來こし片野路かたのぢ、荒磯あらいそべの

うれたき旅たびに、かくても果はつらむ我わが、

いやさら、遠とほき「望のぞみ」の樹こかけ慕したふ、――

夢ゆめかは現うつし狭霧さぎりのこの世よ去さらば、

かの空そらかがやききそふ君きみが光ひかり。

頼むは愛よ——その二

その時、わが身はここに、ここは星の、

まどかに、週まわりめぐれる幾重いくへの外とほ、

黄金こがねのしらべひびかふ天路あまぢこえて、

いつしか昇のぼりぞ來きつる。(かくも、われは

夕ゆふぐれひとり夢ゆめみぬ。)あやしきかな、

胸むねには衆生しゆじやうの海うみにたちさわげる

波凝なごろのゆらぎ傳たへて、身みにははやも、

眞白ましろき照妙てうたうの衣被きぬぎ纏まとふ。

頼るは頼るは「愛」よ、君によりて、
地なる愁ひを去らむ、かしこにては、
わづかに夢に見えつるその「信」を、

威神の光に、今こそ解きても知れ、
見よ、ここ、生のいのちのけながくして、
時劫のすすみ老いせぬ天の常かけ。

終のゆふべ

酷きや、「凶」の襲ひの通り来る日、
苦惱と畏怖は、まだきに、こころを占め、
はたまた暗きその手の背む夜、

肉むら腐す嫩みに眼曇る。

はかなく短かき現し世、いやがうへに、
痛くもあれよと、身を棘す荒野の草、
ゆくての森に「やすらひ」の棲むといふに、
「ほろび」の牲とも知らで牽かれ惑ふ。

「祈れよ、ただ居れ」と、「死」は嘲み笑ひ、
「懈怠」の砥の上に、やをら斧をおきぬ、
やがてぞ我等に深き闇は落ちむ。

煩惱しじに薫する終のゆふべ、

「いのち」の火むらも遂に滅え去るとき、
衷なる「魂」のあらしの行方いづこ。

紫蘇の葉

紫蘇の葉は、夏に最もよく育ち、その葉は、

紫蘇の葉は、夏に最もよく育ち、その葉は、

紫蘇の葉は、夏に最もよく育ち、その葉は、

憂
愁

すがるる草とみだれあひ、
色あせてゆく紫蘇の葉よ、
こととしもなき野の路の、
なぞも、たたすまれ、うれたきや。

別れて來つるおもかげの
映りなづさふわりなさか、
それとはわかず、しかすがに、
えも言ひがたき憂きおもひ。

すがるる草と紫蘇の葉と、
この日、この野に、伏しみだれ、
しめやぐ秋にまつはりて、
いづこより牽く愁ひなるらむ。

そのねがひ

わが「おもひで」の黄昏に、
鈍びまさりゆく浮雲は、
つらきかたみのみだれ髪、
艶ある色はかはりはて、

「こころ」の海も退きしほの

沈み落ちぬるそのけはひ、
 「戀」も「望」も飛ぶ鳥と
 飛びてや去にし、今は無し。

ただ「かなしみ」は、息長く、
 残りてあれや、夕設けて、
 高き御座に一筋の
 御明添へむそのねがひ。

わがこころ

わがよるこびは新草の
 野べとしおもふその日だに、

いのちの花はうち萎れ、
 夕やみ落つることもあり。

愁ひの影のまどはしく、
 いづれとわかぬさまながら、
 代々のなやみの音なひを
 聞き知りわぶるわがこころ

自然

狂ひたち、また和みぬる、
 ころままなるそのさまや、
 これぞ掬の海なれば。

海は眞珠の母なれど、
母をも棄てて、この園に、
ああ、また何ぞ、

「君を戀ふ」と。

小百合は知るや、慕ひよる
眼ざしは天にふさへども、
胸にはゆらく海の音の
愁ひや、いとど、

「君を戀ふ」と。

あふれて、月は雲に入り、
雲は光にとくるとき、
小百合の園の香に映えて、

夢もふかけに、

「君を戀ふ」と。

眞珠の清き身ならずば、
小百合、なにかは、くちづけの
あまきにほひもまじへじを、
さてもせつなげ、

「君を戀ふ」と。

夜は囚屋の闇ならで、
こよひ、月照る戀の園、
やすらひの戸もかがやけど、
きかずや、あはれ、

「君を戀ふ」と。

ああ沈みしも海の底
戀ふるもふかきころには、
小百合がなさけのくちづけも
あさきや、さらに、

「君を戀ふ」と。

戀の火焚けば、雲もはた、
浪も、ひとつの火のいぶき、――
影の干瀉と、月も、また、
わづらへど、なほ、

「君を戀ふ」と。

「焰ながれて戀にゆき、

おもひは燃ゆる身ぞ、こよひ、――」
眞珠は小百合と、もるとともに、
焼けよと、くちづけ、

「君を戀ふ」と。

歡 樂

埋もれし去歳の木の實の、
その種子の夢にも、あはれ、
いかならむ息ざし通ひて、
觸れやすき「おもひ」に寤むる。

さめよ、種子、とくとくの「いのち」

かすかなる音にやたつらむ、
 したたりの、そのみなもとを、
 かつ出づる生きのすすみよ。

しかすがに、夢みてやあらむ、

ゆくすゑの梢にひびき、

久方の光に匂ふ

琴のねのうまし調を。

埋もれし殻にはあれど、

その胸の底にしも、また、

「よろこび」を慕ひつくすと

あくがるる「おもひ」はきざす。

氷 雨

雪をもよほす暮れがたに、

香もなき枇杷の花を啄み、

しば鳴く鳥のまなざしの、

はしきや、うすき日のかげに。

小鳥よ、あはれおとろへて、

すがれ、うらぶれ鳴く聲に、

よろこびの歌も聞きわかず、

はたまた曲のはなやぎも。

宴うたげの海も時くれば、
 酔よひのうしほの沈しづみ落ち、
 干瀉かんげにわぶるうつせ貝、
 そのさかづきのむなしさを

嘆なげかふゆめのさめぎはに、
 わが庭にはに来て、かなしくも、
 小鳥は枇杷の花を啄つみ、
 氷雨ひりのうつにまかせたる。

まなざし

きのふぞ、緑きぬのかけにして、

ふたたび君と相見あひまつる、
 こはゆくりなさ、そのままに
 めぐりあひつつ別れわかりけり。

魂たまをしりて、わすれじと
 その面影おもかげをすゑつれば、
 別れきてこそ戀ひまされ、
 名をだに知らぬ君なれど。

かの眼まなざしのをやみなさ、
 雲くもにあふるる日の光、
 雲間くもまを洩もれて、映はえ顔へ、
 野に野の草をわたるごと。

かの眼ざしのをやみなさ、
 たまたま射つるそのかげの
 すみやかなるは征矢のごと、
 惱める胸のただなかに。

胸にうけたるその痕の
 痛みをしのび、よろこびぬ、
 しかはあなれど、君はただ、
 ただ面影の熱き夢。

落葉林の冬の日

落葉林の冬の日

さいかし一樹

(さなり、さいかし。)

その實は、梢いと高く、風にかわり。

落葉林に、日も暮れて、

風は吹きまく、

(さなり、こがらし。)

吹かれて、空に、さいかしの葉こそさわげ。

さいかしの實の殻は墜ち、

風にうらみぬ、――

(さなり、わびしや。)

「命は獨りおちゆきて、拾ふすべなし。」

さいかしの實は枝に鳴り、
音もをかしく、

(さなり、きけかし。)

墜ちたる殻の友の身を吊らひ嘆く。

「ああ、世に盡きぬ命なく、
朽ちせぬ身なし。」

(さなり、この世や。)

人に知られで、さいかしの實は鳴りにけり。

風おのづから弾きならず
小琴ならねど

(さなり、ひそかに。)

枝に絶れる殻の實のおもひ悲しや。

わびしく實る殻の種子、
この日みだれて、

(さなり、すべなく。)

音には泣けども、調なき愁ひを、いかに。

かくて世に、また、新なる
光はあらめ、

(さなり、ひかりや。)

われは嘆きぬ、さいかしの古き愁ひを。

幻影

渚なみにひとりたたずみて、
 かのささやきを聞きまどふ――
 そは白き日の洩もらすなる
 天あめのささやき遠海とほうみに。

かすかなれどもかがやかに、
 静しづかなれどもきらめきて、
 にほへる天あめのささやきの
 解わかきがたきかな遠海とほうみに。

ああ高たかき空そら遠とほき海、
 涯はたなきものの世にふたつ、
 かたみに擧あぐるさかづきに、
 光あふるる虹にじのいろ。

酌くめるは何なにのうま酒さけぞ、
 この世ならざるよろこびの、
 (そはまよはしか)眞白ましろ手に、
 秘ひめて醸かみけむ戀こひの酒。

眞晝まひるは満みちてかかやけど、
 誰たれかこの時ときしろがねの
 天あめのひかりのささやきを、
 かの遠海とほうみに慕たひよる。

そのささやきを解きてこそ、
 さてこそ星のいただきに、
 かしこに百合の園ありて、
 薫りいかにと知るべけれ。

さてこそ海は翻へり、
 潮は華とみだれ散り、
 ゆたに浮べる鹽漚に、
 化りしすがたも趁ふべけれ。

幻なれば觸れがたく、
 ただけざやかに身をめぐる、
 解きしは、さても知りつるは、

何ぞいかなる秘めごとぞ。

醒めては、すべて言ひがたし、
 慕ふのみはた思ふのみ、
 まぼろしなれば移ろひぬ、
 眞晝も、やがて、かたぶきぬ。

ただ眼に残り、滅えなづむ
 甕の象のうつろにも、
 まろきおもてはかがやきて、
 火もて描ける火の少女。

まぼろしはげに、いやはての
 燃えたつ謎に、わが魂を

すずろに牽きてうち沈め、
ほのほの浪に咽び入る。

光の歌

光は白き鳥となりて、
かがやく空の朝明けに
めざめても、なほ、まどはしき
夢のつばさや。

あかぼしの華すがしくも、
天なる園にほふとき、
見よ、雲もまたほのかなる

香にこそ染まれ。

世はあたらしき日にかへりぬ、
「なやみ」の車、「わづらひ」の
わだちのあとも、古歳の
塵にかくれよ。

何處を當に人は行く、――
さもあらばあれ、天の戸の
光のみさとしとことばに、
われは頼まむ。

溶けたる琉璃の高き淵に、
雲は流れ、みなぎれば、

焰ほのほうかべし朝あさのいろ、
朝あさのよろこび。

み空そらの宮みやのきさはし踏ふみ、
清きよきとほそに手てを寄よせて、
誰たがちからにかひらきけむ、
樞くわぞひびく。

げに、いま白しろき鳥とりとなりて、
光ひかりは天あまを離はなれけり
天あまをはなれて、わか草くさの
野のにこそ降くだれ。

靈鳥の歌

鑿うの手あらば鑿うを執とり力ちからをこめよ、
絃いづなの音ね知らば絃いづなを弾ひけかし。――

ああ、さは問とはじ、
「何處どこより來きし、かの鳥」と。

夜半よるには走はるいなつるび、今朝けさは行く雲くも
棲すみて幾日いくかぞ嚴いひしいはほに。――

ああ、また説とかし、
「などか飛とばざる、かの鳥」と。

鳥の姿はさやかにて緑の珠の
その種子華とさけるに似たり。――
ああ、あやしまし。

「世にめづらしきかの鳥」と。

鳥の瞳は火に焼けて焰の中ゆ

よみがへり照る神のまなざし。――

ああ、あやぶまし。

「何の徴か、かの鳥」と。

獨り友もなく大峯に鎖まり棲めば、

また尾羽根かへす朝もあらず。――

ああ、ゆびささじ。

「眠るか、かくもかの鳥」と。

鳴く音は聞かず、いつの代に鳴きなむ聲か、

鳥は、ひたもの黙してぞある。――

ああ、嘲けらし。

「命絶ゆるか、かの鳥」と。

鳥の翅は、誰そやいふ黄金のごとも、

一夜い照りて、み空を舞へり。――

ああ、疑はじ。

「夢にやあらむ、かの鳥」と。

揺ぎを胸におぼえなば揺ぎをつつめ、

鳥はふたたび、いつか歸らむ。――

ああ、悲しまじ。

「何處へ滅えしかの鳥」と。

佐太大神

こころ愁ひあれば、枳佐加比比賣、
しじに涙垂れて、惑ひもとほり、
天なる神魂御祖をしぬび、
をぐらき潮うつ海の窟に
嘆かへば、聲あり、――

「暗きかも、暗きかも、

ああ、暗きかも、この窟。」

愁ひに堪へかねて、枳佐加比比賣、

「あはれ、すべなきかな、蒼海原の
神やしるしめさむ、失せつる弓箭、
いづこの浪間にか、いかくろへる」と。
この時、聲はまた、――

「暗きかも、暗きかも、

ああ、暗きかも、この窟。」

いとも醜き魂は浪に動き、
蒼海原まさにとよみわたりて、
疾風はしまき落ち、雲たちさわぎ、
潮は火のごとも、亂れ飛びぬ。
聲はまた、この時、――

「暗きかも、暗きかも、

ああ、暗きかも、この窟。」

「さはあれ、身ごもれる産みの足目に、
光の種子は裂け、神の御裔と、
生まれまさむ吾御子、益荒男ならば、
失せつる生弓箭あらはれ來ね。」と、
請ひ祈めば聲しぬ、――

「暗きかも、暗きかも

ああ、暗きかも、この窟。」

海ややに静まり、浪より浪、
沖邊より磯邊に流るる弓箭、――
禱り臥し、まるぶ枳佐加比比賣の
淨まる身の宿り、この時ひらけ、
いみじき聲高く、――

「暗きかも、暗きかも、

ああ、暗きかも、この窟。」

かくぞ生まれましにける佐太の御神、
厳しく猛き光は海にかがよひ、
浪間よりささぐる角の弓箭の

「こは吾ものならじ、去ねよ。」と詔らす
御聲はくもりなく、――

「暗きかも、暗きかも、

ああ、暗きかも、この窟。」

海は、また、和みて、浪より浪、
沖邊より磯邊に寄せ來る弓箭、――
黄金の装ひ漂ひ光り、

高潮い照らし闇に映ゆれど、
御聲はまたさらに――

「暗きかも暗きかも、

ああ暗きかもこの窟」

ああ天の御裔の御子大神

この時浪間より流れ出でける

黄金生弓たかく手握り持たし、

かがやく黄金御征矢弓筈につがひ、
窟戸にたたして――

「暗きかも暗きかも、

ああ暗きかもこの窟」

こころ歡びぬれば、根佐加比比賣

吾御子讀むる時弓絃ひびきて、
征矢射通しゆけば天香あふれ、
海はも華のごと翻へりけり。
さて御聲さやかに――

「光あれ荒磯邊

佐太の大神われ立てり。」

新鶯曲

わが姉うくひすいかなれば、
野をまた谷を慕ふ身と、
鳥に姿をかへにけむ、
緑はにほふそのつばさ。

われはいぶせき海のひめ、
 きのふのむつび思ひいで。
 岩むらに立つおほ浪の
 みだれに胸をかき擁く。

わが姉、しばしふりかへり、
 寒き北海の磯を見よ、
 ごとりて雲もみじろがず、
 ただ、あぢきなきこの恨。

憂きこと、しじに、つきがたく、
 いさごに倒れ、嘆かへば、
 ふかきおもひも、わだつみの

どよもしにこそかくれけれ。

わが姉、うぐひす、ほのかなる
 ほほゑみほめて、世の人は
 鳴く音はなやぐ汝がこゑに、
 愁ひ、痛みも、忘るべし。

珍のたからの貝の葉に、
 生薬盛りて、きのふしも、
 二人は、ともに、大神の
 前に、ささげてありけるを、

わが姉、うぐひす、なにすとして、
 海のたからに手も觸れず、

うづのくすりもうちすてて、
すてて惜しまぬ歌のこゑ。

われは今なほ、海のみめ、
汝がゆくへをば思ひやり、
巖いははにのぼり、浪にぬれ、
夜もまた晝もかなしまむ。

うぐひす、うぐひす、わが姉よ、
春に遇あひたる木の間より、
しばしは荒あき北きた海の
磯いそをも、しのびいでよかし。

われは朽ちゆく海のみめ。

嘆なげきのこゑの消きゆるまを、
いよいよ春に時めきて、
汝ながしらべこそ清きからめ。

獨語

破船の後——南海の孤島

その一

海ぞわが戀こいかなれば
うらがなしきや、

海ぞいのち——

見よ、浪はあふれ、日こそ照てらせ。

浮び來つれば身も船も、
しぶきのしづく、――

ああ、わだつみ、

しづくと碎けし船を見ずや。

身は、など、土に埋もれむ、
海に就かまし、

ただ、願ふは、

海に生き滅び、土と朽ちじと。

酌みしか、海のさかづきに、
怖れの一ひとよ夜、――

あらしと、浪と、

かけ濃き雲とに醸める酒を。

ひと度は、われ等、くちづけし、
されど、また醒めぬ、

幸さいななの友、

船のみ碎けて、なほながらふ。

酌たくまむか、さらに、浪も熱あつく
燃もゆるほのほを、

夢ふかかれ、

濃こゆかれ、その酒、そのあやしみ。

幸さいななのともよ、陰かげもなき
珊瑚さんごの島ね、――

日こそ燃ゆれ、

井いをもとむれども、潮湧うしほきぬ。

湯は止まずうしほのみ、
ただ海の水、

いかにかせむ、
玳瑁を焚きて潮煮たる。

その二

誰そなげうつや草の實の
くれなるの玉——

ああおそれな、
毒ありと知るもなほぞ賞でむ。

われこそさらばくちづけめ、

くれなるの實や、

知れわが身を、

汝はわが戀ぞわがまぼろし。

情は熱き青海の

しぶき凝りて

化りやいでし、

うましき血しほの、そのくちびる。

死よりもつよき戀とこそ、

はやく聞きつれ、

海のみなみ、

かがやき媚ぶるや、この草の實。

かつては澄みしわが命——
花がめの水、

花も添ひき、

さあれ花は凋みて、水は海に。

世のやすらぎを嘲笑ひ、

ちさきその日と

弱きをみな、

みながら見すてて、苦き海に。

海ぞ奥津城、ここに

何か嘆かむ、

血しほ染むる

戀の實したたり薫するをや。

しかすがに、また寄りそふか、
ありし日の戀よ、——

死をすすむる

さかづき手にとり、ささげ寄り來、

白きその手と、くれなるの

血のくちびると、

にほへ、媚びね、

うましきこの夢このあやしみ。

黎

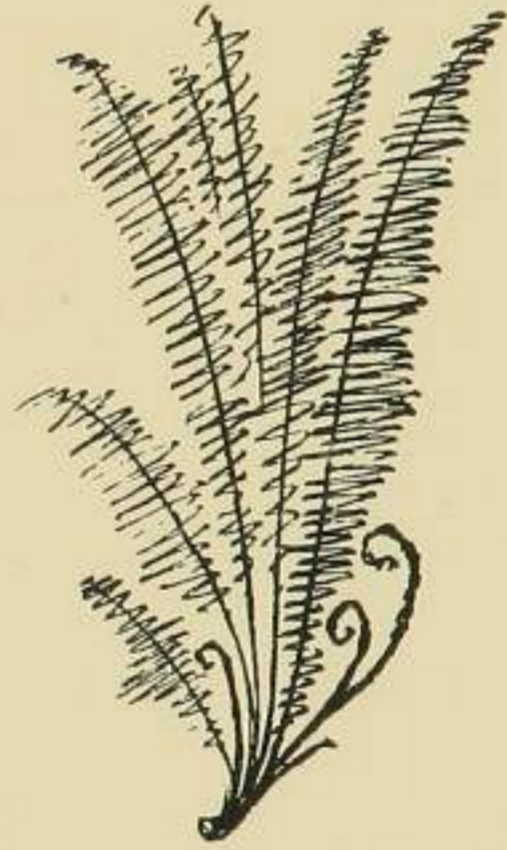
明

序の歌

野にもえいづる草わかば、
よろこびの香にひたれども、
なほ、つつましき葉がくれに、
はぢらひがほの花のいろ。

はぢらひ、かくるるさまながら
花はほがひのよそほひや、
空には、あはれ、さめがての
夢こそにほへ、春がすみ。

ばかわ草



唇を解く歌の君、
春のたくみの眞玉手に、
ゆふべにはまた紋を織る
光ぞ雲に流れぬる。

日神頌歌

いのちの根ざしうるほへば、
ここなる花もかをるべし、
文布織ります羽植雄の
神の高機しののめに、
いろ彩とくも整ふり、
影かすかなり星の校。

雲はいと濃き紫に
 うすくれなるの絲をぬき、
 夢の深野に花罌粟の
 にほひを含むあけぼのや、
 げにわかやぎて限りなく
 艶だてるこそをかしけれ。

物古りにたる冬の夜の
 幽の宮のまゆごもり、
 もぬけいでては天の原
 春の霞のもろつばさ、
 柔らぎ足らひたをやかに、
 おほはぬ空もなかりけり。

さてこそ闇も失せゆかめ
 見よや白鳩の羽を翺ぎて
 にほふ桂の眞鹿兒矢の、
 生矢千箭の靱を負ひ、
 日女の神は春かへる
 かの稚宮にいでましぬ。

御統の玉音たかく
 天路わたればあかつきの
 星の光もゆらめきぬ、
 人よ凝りし身を弛め、
 魂のなやみもなやらひて、
 春の日影をうち仰げ

をりこそよけれと常世なる
うましき木の實の新醸
ほがひの槽にしたたれば、
沸きほとぼしり黄金なし、
泡だつがごと漲りて
光い照らす日の御神。

うるはしきかな日靈貴
まだ天地の稚くして、
ほがらに明くる朝ぼらけ、
天の高市に神集ひ、
言擧げ壽ぎし神々の
み聲を誰かこの日傳ふる。

民ぐさのほぎうた

よろこび、
なれがゆらめく高むね、
大海原にゆきめぐれる
潮なれやさこそ
光にみてもあふるるなれ。

よろこび、
なれがゑまへる唇、
かの曉に燃え淨まる
焰なれやさこそ

かがよふ調の音にたつなれ。

東方

ここに國するよころび、

高日めぐる黄金御座、

ああ誰かはここに、

御座のほひを仰がざらむ。

民ぐさ、

われらささぐる賀歌、

呼吸のかぎりは言あげせむ、

せめてはその聲ね、

狛ぶき照り映えて天がけるまで。

よるこび、

なれがねがひはくまなく、

かがやく幸やそのもろごゑ、

さればさればさこそ、

いといと高きをただふるなれ。

可怜小汀

ただすすろかにいつしかと、

往にしその日のおもはれて、

年月経つる旅の空、

ところはなほもなづさへる。

その日は海のゆふまぐれ、
わが船のへをおほどかに、
ひとり飛びゆく鷗鳥、
潮氣に曇り影滅ちぬ。

歌をおもひて、言葉の
幸に、たまたま遇ふがごと、
鷗よ、はじめ汝を見て、
ひそかに、われはおどろきつ。

塵も染めざるその翅、
いざなひ牽けと、うち慕ひ、
愁ひはさわぐ浪の上、
われとわが身をかき擁き、――

「鷗よ、ゆくては遠からむ、
可憐小汀やいつかた」と、
こころままなる汝を戀ひ、
滅え去る影を惜しみけり。

おもひは盡きず、ある夜、また、
夢に潮のたち返り、
流れあふるる大海の
その涯をしも尋めわびぬ。

「可憐小汀やいづかた」と、
問ひは問へども甲斐ぞなき、
八汐路かたき灘の沖、

うつろの聲のわびしくも。

鷗よ、あはれ、捲きかへす
 往にしその日の浪枕
 夢の翅にさそはれて、
 いつまで揺ぐおもひなるらむ。

牡蠣の殻

牡蠣の殻なる牡蠣の身の、
 かくも涯なき海にして、
 生きのいのちのあぢきなき
 そのおもひこそ悲しけれ。

身はこれ盲目、崖かけに、
 ただすべもなくねむれども、
 ねざむるままに、大海の
 潮の満干をおぼゆめり。

いかに朝あけ朝じほの
 いろ青みきてあふるるも、
 黙し痛める牡蠣の身の
 あまりにせまき牡蠣の殻。

よしやすがしき夕づつの
 光は浪の穂に照りて、
 遠野が鳩のおもかげに

似たりといふも何かせむ。

痛ましきかな、わだつみの

ふかきしらべに聞き惚れて、

夜もまた晝も、わきがたく、

愁ひにとさす鼓のやど。

さもあらばあれ、暴風吹き、

海の怒の猛き日に、

殻も砕けと、牡蠣の身の

請ひ請まぬやは、おもひわびつつ。

君や我や

海に来て、戀を嘆けば、

わが戀はみだるるうしほ、

君にゆき、君にむかへば、

わが身、たださびさしきねがひ。

わが望み、君が情と、

たくらべておもひみるとき、

いかでわが青沼の水、

君が野のいつみに如かむ。

みんなみの花のかをりか、
 遠島の壘のを笛か、
 君は、これにほひの身なり、
 さらにまた、しらべのすがた。

われはしも木の間の小鳥、
 君が眼の空にひかれぬ、
 うるはしき瞳の星や、
 色すめるそのがけを見て。

かくてわが命の流れ、
 にごれどもあふれ漲り、
 戀の目の照りもかがよふ
 海にこそ注ぎいでしか。

君は、また、つきぬよろこび、
 涯しらぬ緑の廣野、
 その廣野、君が狩くら、
 狩くらにわれは迷へり。

わが悩み——君がよろこび、
 わが愁ひ——君がささめき、
 白銀の獵矢を君は、
 小男鹿の痛手ぞ我に。

あはれ、あはれ、貴に酷かる
 戀の君よ、とはのやすみと、
 黄昏のおぼめくかげに、

われを措け、——今は眠らむ。

夕づとめ

「祈禱をあげよ。」と星の界の
少女のひとり、その聲は
愛の泉のしたたりと、

その聲は、また、さながらに
巖の小河に葉を交す
蘆のさやぎのひめごとと、
細々として、つつましく

ありはあれども、澄みわたる
天の隈わに徹りよく、

「いざ、祈禱をぞ榮おほき
勤め。」と言へば、また二人、
影の身ながらひさまづく。

一人は高きよるこびに、
黄金彩なす遠空の
雲の旗手の色を讃め、

一人は残る愁ひより、
紫だちて天ぎらひ
ただよふ雲をなつかしみ、

二人おもはず、「かしここそ、
 ああ、夕まぐれ、故里の
 界」と言ひさして、さてやみぬ。

祈禱は、しばし、うちつづき、
 高榮めぐる御明の
 焰も、今や、點されぬ。

見よ、御明の火は生ひぬ、
 熾りぬ、照りぬ、——誰か知る、
 そのかがよへる歌のくしびを。

かすかに胸に

かすかに胸に、けふは、また、
 むかしの海の響すと、
 ひとり寂しきうたがひに、
 山邊の翁のつぶやける。——

山邊にかくは齡老いて、
 遠きおもひもあらざりき、
 今日しいかなるたはぶれぞ、
 翅は生ひぬ、わが夢に。

雲も色めきただよひて、
 あらき巖をつつむとき、
 樹かげの闇を離れゆく
 夢のつばさぞ匂ひたる。

憂さいぶさせは、谷の隈
 この山里にうづくめよ、
 かなたに、今は、ひたむきに、
 海のひびきを、なつかしむ。

かすかなれども、わかやぎて、
 みなざりわたる大海の
 その音なひよ、よろこびの
 わが目、むかしの歌のこゑ。

觸れてこそ、また、なづさひて、
 戀を重ねれ、しかはあれ、
 つたなきわが世の磯濱に、
 浪は、ひとたび、寄せしのみ。

浪は碎けて過きぬれど、
 今、はた聞けば、後の日の
 すさめる胸のおもひでに、
 海のひびきのしたしさよ。

など、今更に、たゆたひて、
 夢のちからの衰ふる、
 ひとりかくても奥津城に

たどり入りなば、いかがせむ。

眼路めぢをかくして、しほからき

狭霧さぎりは、なほも、たち迷まよひ、

舊もとの渚なみの、いつまでも、

などや見え來こぬ、けさやかに。

ただ、うつたへに、真砂路まごさぢを、

潮うしほの華はなのかがよひて

あふるるさまを、戀こひふれども、

すべなくやならむ、たづきなく。

ああ、堪たへがたし、遠海とほのうみの
音ねなひをのみ聞ききてあれば、

あだなる人のささやきや、

またその媚こゝろに似にたりけり、

すべて忘わすれてありつるを、

夢ゆめよ、いかなるいつはりぞ、

翅はねも、つひに、うち沈しづみ、

をぐらくなりぬ、空そらのはて。

高潮

漲みなぎり、たぎち立つ浪なみよ、

疲つかるる色いろは見えわかず、

おほわだつみの常世とこよ琴こと、

音は高くもどよもしぬ。

深き遠きを問はずして、
腕うでによるづの聲こゑを籠こめ、
痛みいた嘆なげかふ人の世の
岸きしをいた振りぶり警いましむる。

曙あけぼのに、海うみ鳴りわたれ、

鳴りわたれ海、曙あけぼのに、――
磯いそうち湧わきてあがり、
溢あふれて、沙いし嘴くちかめよ。

曉あけの星ほしあふぎ見て、
舒のほびていざよふ雲くもの君、

にほひをい含む唇くちびるに
讃ほむるは朝あさの光ひかりなり。

ああ、その空そらのすがしくも
明けゆくがなかに、うち和なみ、
彩いろなすかげは領布りょうふふりて
たなびく雲くもに照あり映はえぬ。

曙あけぼのに、風かぜ吹きかよへ、

吹きかよへ風、曙あけぼのに、――

高たかきに光ひかり纏まとひ、

さやかに、淨きよく拂はらへ。

愁うれひは谷やの狭霧さぎりなし、

思ひは暗き澤のべに、
悲しみの草いと苦き
その葉を採りて嚙める身も、

高潮満ちて繞りゆく
海のほとりによみがへり、
雲は匂へる朝ぼらけ、
生の幸ほふ世をぞ知る。

曙に、海鳴りわたれ、

鳴りわたれ海曙に、
豊かに、遠く湛へ、
寄せては渚洗へ。

海に映りつ、かがやきつ、
雲あひ牽きて影趁へば、
母なる地のよるこびに、
塵も、この時、浄まりぬ。

ああ、かかるをり、つきせざる
物のしらは鳴りひびき、
森の香は、今、高くたち、
野のわか草は花に出づ。

曙に、風吹きかよへ、

吹きかよへ風、曙に、
極より極に過ぎて、
天より地に下りよ。

重なる歳は移れども、
 忘れぬ日は稀なりや、
 書をひもどき世をば識り、
 光のあとを思ひ見よ、
 無憂の樹かけ華儘く、
 馬槽のへに星照らす。
 ああその法のあかつきも、
 塵にひそみて隠れにき、
 さればぞ嘆き痛みつつ、
 疑ひの途を人は馳す。

ほしいままなれ、かかる世に
 熱きころぞ眞なる。

ほしいままなれ、そが中に、
 まことの戀のなからめや。
 空は朗らかに、かくばかり、
 華やぐ雲のかがよひて、
 胸わけ廣きわだつみに、
 潮は高く満ち足らふ、――
 しかこそあれや豊の日の
 明けゆく磯にわが立てば、
 この曙に、白銀の
 獵矢を射ても放つごと
 雄々しき魂の生れいで、
 この曙に、琴の音の
 しらべ清搔くそのごとも
 やさしき魂の聲あげむ

われ、今、清き曙に、
 色とにほひを慕ふとき、
 おのづからなる命こそ
 活きて涯なく流れゆけ。
 響は海にどよみたち、
 光は雲にたなびきぬ、
 ああ、このわかき曙を、
 風も吹きうたへ、
 浪も鳴りほがへ、

新譜

わかき女のうたへる―其一

おもへば夢に誰そやわが
手にはふれたるすするかに
ただまどはしくながむれば
おぼろの春こそをかしけれ。

知らですごしぬわれながら
底のころをよるこびを
さあれけふしもやすからず
わが胸のうちのいつになく。

ああさばかりになにゆゑに
あくがるわがおもひぞや
野べの小草よなれもまた
もゆるは何の夢ごこち。

まだきに春のすががきの
ほそきしらべの傳ふとも
かすかなるべき絃にだに
うらわかみこそ觸れもすれ。

色をし慕ふかさながらに
香をし戀ふるかわりなくも
さればをとめのわがころ
さめてかまたも夢みてか。

わかき女のうたへる——其二

野ぢよりひとりかへりきて、
あやしくなぞやはづかしき、
髪にかざしし草の花、
それさへ秘めて、えも見せじ。

髪にかざしし草の花、
色さへ香さへ、さとらせじ、
見せよと、人のしひていはば、
しづかに胸に秘めてまし。

しづかに、さらば、秘めてとか、
ああ、いつはりぬ、われながら、
春日あまりにたのしくて、
かくこそ胸はさわぐなれ。

浪だつむねにたよりつつ、
花はねむりてあるならむ、
よしや夢みてさめずとも、
つらき人にはえも見せじ。

わかき女のうたへる——其三

手にふれたまふことなかれ

うれしき君とはおもへども、
まだうらわかき野のはなは
あつきなさけの日にたへじ。

ゆめ、ふれたまふことなかれ、
いとともろきわがむねに、
おほ浪たちて、しらたまの
なみだくだかばつらからむ。

ただふれたまふことなかれ
秘めてぞあらむこのおもひ、
ああ、かかる夜を、かかる夜を、
わかきいのちのいとどかなしき。

わかやぐひかり

わかやぐひかり、野べのいろ、
しらべもかすむ春のうた、
うつし世にして、幾千歳、
人はなさけの香を戀ふる。

樂しや、遠きいにしへの
吉き日に瑞の兆を見し
小琴も、けふは、よろこびの
めづらしき音にたちもせむ。

暁がたを消えてゆく
 星よ、雲居の路すてて、
 この人の世の戀もせよ、
 かがひのにはの春の野に。

ここには萌ゆるわか草の
 ゆらめく息にかをるとき、
 あくがれ慕ふ胸にしも
 熱きおもひはやどるなり。

花野は楯の一面

大神の手のたくみぞと、
 人よ、ただへて、わづらひの
 征矢鳴りやめるかけに歌はむ。

彩 雲

幾代の春のおもひでに、
 空のこころも和むとき、

雲はながれて、うらわかき
 よろこびにこそかへるなれ。

艶だつ雲の靡びかへる
 そのかけはしもおぼるめき、
 くはしき妹がくろがみの
 こがねの櫛に匂ふごと。

また、そのかけの静かなる、
たとへば、遠き海原に
浮びいでたる小島かと、
わづらひの浪をよそにして。

野の空あふぎ人々よ、
ほがひてあれないたづらに
屈し嘆かひてあらむより、
色にうるほふ雲を見よ。

かわきにたへぬくちづけの
熱きなさけはさてもあれ、
げに觸れがたきよるこびの
夢かとはかり、春の雲。

あくがれたちてながむれば
乳の江をなづむ船に似て、
また見かへせば玉杯に
甘酒の香のにほふかと。

ああ、春の雲、春の雲、
幸はひ足らふおもひでに、
人のところをやはらげて、
いづくの空に流れゆくらむ。

戀ぐさ

神のころは
ほのかにて、
人知る際に
あらねども
幾代わすれし
おもひさへ、
ただこの花に
しのぼるる。

ゆく春

げに、世は夢よ、
よるこびの
泉は汲むに
かたくとも、
古井のかげの
戀ぐさや、
にほひもふかき
花すみれ。

葉守の神のげさやかに、

瑞枝かざして招ぎぬれば、
 わかるる人も、しばしとて、
 樹蔭をもとめ、なづさひぬ。

さればきのふのわが春よ、
 草ひき結び、やすらひて、
 若葉の香をもかぎてこそ、
 すぎし夜がたり續ぐべけれ。

ただ音無しにひそみぬる
 春よ、ここのなる葉がくれの
 その夢にだに、花の面、
 せめて、淡げにも見えよかし。

野路は戀路にあらねども

野路は戀路にあらねども、
 野草は熱きあくがれに、
 緑の夢の、その呼息の
 たゆらに深き夏の野べ。

都の町にきほひ立つ
 さやぎも、ここにおさまりて、
 青野が面は白銀の
 豊の照日にしづもりぬ。

高き光の洪水に、
 この時ひとり漂へば、
 聲も傳へぬ江に浮び、
 權うつ舟のわが身かな。

涯なきおもひも今はとて、
 ここを港と青葉かけ、
 人に知られぬ白珠を
 さぐるもよしや野のいづみ。

戀路は野路にあらねども、
 おもひの草のしげりあふ
 あたりにも、などや、静けさの
 よろこびふかき蔭のなからむ。

枳
 殻

雨みどり野に
 鳴りやみて、
 阜月風なく、
 日は蒸しぬ。

標結ひ、へだつ
 枳殻の
 垣にも、花は
 咲くものを。

一重ひとへに白しろき

その花はなよ、

一瓣ひとはなにこもる

その夢ゆめよ。

われや佇たふむ

垣かきの外ほか、

嘆なげくと知しれる

君きみならず。

もとより門かどの

枳かき殻かに

花はなさきぬとも

思おもはむや。

標しるし結むすふ戀こひの

そのへだて、

君きみがこころの

つらさゆゑ。

問とふをやめよ

かがやきわたれる星ほしのかの界ま、

いづれのひかりもいと慕こほはし。

さはあれ、ひとへに、わけてめづる

かなしきかげこそ胸むねは照あらせ。

いろ彩いろとなふ虹にじのごとく、
 そのかけ天あまより地つちにわたり、

すぎにしよるこびいにしうれひ、
 なべての夢をばさとしなだむ。

かたらひちぎりしをとめの名に、
 夜よごと呼よびさます星は照らす。

さればよをとめはいかにかせし、
 わが星いづれと問ふをやめよ。

菱の實採るは誰が子ぞや

菱ひしの實う採とるは誰たが子こぞや、
 ひとり浮うびて古池ふるいけに。

菱の實採るは誰が子ぞや、
 風にみだるる束ね髪たづねかみ。

鄙歌ひびうたのふしおもしろく、
 ただなほざりにうたふめり。

聲こゑ細りゆき消きゆるかと、

聞きまどふこそをかしけれ。

籠は満たすや、秋閑けて、
實は、さばかりに、おほからじ。

菱の葉のみは朽つれども、
げに、菱の實はおほからじ。

籠は満たすや、いつしかと
日は沈みゆくわびしさよ。

なほ嘆かじな、うらわかみ、
なさけに燃ゆる汝ならば。

汝や菱賣るそのすがた、
通ふ市路のゆふまぐれ、――

そのすがたをば憐みて、
ああ、など誰かつらからむ。

汝がゑまひの花かけに、
ふれなばおちむ實こそあれ。

うるはしと思ふ實のひとつ、
いつかこの身におちにけむ。

旅ゆき迷ふわづらひも、
しばしぞ今は忘らるる。

譯翻と詩文散



秋はわびしく、しめやかに、
日はいつしかと沈みゆけ、

なほも歌へよ、嘆かじな、
うらわかみこそ人も問ひ寄れ、

暗示の森
散文詩

山の修多羅

彼は旅に出て、そして直ぐ還つて来た。

——等高線が燃えてゐた。燃ゆる箆篋の火の妙音が發熱の惡寒に顛へる吠瑠璃びるりの空気を粉微塵に翻弄してゐた。

——それは何だ。

——山が燃えてゐるのだ。山の全部が、毛髪も齒牙も腦も脊髄も四肢もみんな燃えてゐるのだ。だから山の等高線がくるくと極めて疾速に回轉して、迷眩の曲を奏してゐるのである。

山が破船した。(それはいつか知ることが出来ない。)山の推進機がはたと止まつてしまつた。法界は土塊つちかたの大濤を揚げて難破した山の船體を葬つてしまつた。

——何も知ることが出来ない。

彼は心底から悶え苦しんだ。

大濤が山の破船を呑み盡したのか、土塊の大濤が果して山か——何も知ることが出来ない。ただ真正直な等高線がくるくと燃えてゐる。整然たる裾野の緩傾斜と土塊の圓錐體とを舞ひ上つて、一千米突、一千五百米突、二千米突、二千五百米突……『不知』の蜘蛛が『不可得』の蜘蛛のゐを張つてゐる。

彼は旅から還つて来て、また地圖を披けて見た。彼が戀ひこがれた山のあたりには殊に綺麗な蜘蛛のゐが渦を巻いてゐる。その蜘蛛のゐの間から海のやうな山嶺がきらめいて見える。玉簪花や百合や鐘草がのぞいてゐる。

真正直な等高線が矢張りつまでも舞ひ上つて、一千米突、二千米突、三千米突——高度を標すその數字が碧い魚のやうに彼の目に戯れる。

すべてが沈黙である。

山の修多羅しゅたろは静まりかへつて、獅子座と菩提樹とを鐫り鏤めた寶篋の中に納まつて

ゐる。

彼は思はず戦慄した。昨日の印象が再び彼に還り來つたからである。

彼は今、彼を戀ひこがれた山の方に引張つて行つた不可抗な力を咄つた。

恐ろしい音をたてて、山地の上り勾配を汽車が悶えてゆく。

彼は不圖右の窓から谿を見おろした。山羊の乳と渥丹の汁を雜ぜた谷川の水が流れてゐる。その水に半身を埋めたり、岸壁に這ひ上つたりして戯れ遊ぶ兒童の一群がある。そしてもつれた舌で「不吉」を叫んでゐる。

彼は左の窓を見た。その窓は夏の午後の烈しい日射を避けるために鎖してあつた。

この時彼を否應なしに此處まで引張つて來た不可抗な力——執着と盲動、それが青い電氣の飽滿と熱した水蒸氣の鬱憂にからんでなやましい伽陀だの韻律を繰返した。

彼の肉體に通る脈絡の全系がひくひくと顫へた。そして更にまた恐ろしい無限の弛緩に陥つて行つた。

彼は左の窓を開け放つた。急に其處から押寄せて來た熾烈の光の洪水が彼の肉眼を

溺らした。搔亂された視覺の中では「進化」の戟さきに疲ついた猛獸が飢と渴をうめき苦んだ。

彼が戀ひこがれた山の破船は整然たる緩傾斜の裾野と土塊の圓錐體を貫いて、物凄

い「惡」の相貌を刻み、彩り、燦爛として金光を放つ軸を天空に高く擡げた。

——「不可見」を見たとき、彼はかう思つたのである。

高山の大濤が鑛石と硫黄のしぶきをあげて、ゆらゆらと崩れ落ちる險崖を赤く塗りつぶした。

山の修多羅は猛獸の脊に乗せられて、劫の海に惡の破船と共に溺れてゐる——無限の品數、無限の卷數。

彼にはその一句一偈をも明らかに誦し出す力がない。彼の身も心も亦その無限に溺るのみである。

脚痕

庭の面にはしとくと冷い雨が降つてゐる。それが降るかと思ふと止んで居る。

わたくしは何物にも興味を失つた此時刻に、所在なさに、或夜の夢を夢みてゐる。

それはいつも同じ夢である。

現實に醒めても、夢幻に沈んでも、其處には日光の一筋も照らしてはゐない。然しながら尙ほ雨中の庭園には銀灰と暗緑の調和がある。芙蓉の淡紅は秋海棠によつて繰りかへされてゐる。それにも拘はらず、わたくしは大濤に押される小舟のやうに、矢張、夢幻の魔力に誘はれて了ふ。

わたくしは寧ろリアリストだ。『黒いダイヤ』に憧憬の眼をあなたがち向けるでもない。ただ陰鬱な夢幻に浸つて、倦怠の念を麻痺させたいばかりなのだ。わたくしはこんな

時、強い酒を嘗めやうとは思はない。酒の香が思ひもかけぬ珍らしい感覚を呼起すことでもあつたなら、わたくしは戦慄するからである。

わたくしはすべての感覚を衰頹の夢の中にこつそり埋めたいのだ。そして埋められた感覚の澱んだ眼をぼんやり眺てゐたいのだ。

その衰頹の夢はロマンチックの夢のやうな轉變の興味を保つてゐない。いつも単一な形式に依つて開展せられるのだ。幕が下りる時に現れる一つのサインだ。

その場面上には、雨も降ることがない、雪も降ることがない。勿論日光の映射を期待することは出来ない。折々、鈍い時間を鈍く刻んで、生ぬるい風が白茶けた砂埃を逐ひたてて行く。その埃は實際幾万人の朽ちた骨の粉かも知れぬ、これよりも平凡な埃が何處にあらうか。

『たまらない程、平凡な埃だ。』とわたくしは思はず獨語を言つた。わたくしはかう言つてから不圖氣がついて四邊を顧みだが、逐ひ立てられて來る埃の中から蒼白い幽霊がほく笑んでゐる外には、これを聞き咎めやうとするらしい人影も見えなかつた。

わたくしが今歩いてゐるところは、一方は浚んだ水をただへた濠のやうで、一方が古びた町家續きでもあるやうに思はれる。古びた町家は一列に暗灰色の平たい調子を示してゐるに過ぎない。わたくしは夢にあつて一々の店を細かく観察する程の愚を敢てしなかつた。そしてそこには死せる町を活かすべき光線の効果を缺いてゐたから、記憶すべき何等の光景にも出會はなかつた。

わたくしは思はず、

『たまらぬほど平凡だ』と繰りかへして例の蒼白い幽霊の微笑を買はうとして、側を振り向いて見た時、眼の前に一個の寂びれた店が暗いあくびをしてゐた。

益にたちそうもない書物が店ざらしになつてゐる。

嗚呼、平凡の平凡。

わたくしはいよく埋められて感覺の眼を見たと思はずにはゐられなかつた。

わたくしはゆつたりと氣を鎮めて店先に立つた。棚の上の本はただ一塊の黒い墓に過ぎない。いぢらしく光つてゐる金字の殘缺が碑銘らしくも思はれる。手近に列べられた本の上には砂埃が厚く被さつてゐる。最初にわたくしが手に取つた本は細い字の

聖書らしい本だつたので、直にもとの處に擲げやつた。次に手にした本には無意味な象形文字の單調な行列が續てゐる。わたくしの眼は文字を逐はずに、ただ紙を綺麗に通した蠶魚の跡の唐草模様を見てゐたのだ。わたくしは何の意味もなく、その次の本に手をかけやうとしたが、この本の表紙には積つた埃の上に小さな獸の脚痕が印刷したやうに、はつきり附いてゐたので、ぎよつとした。

わたくしは衰頹の夢の中に意外なものを發見した驚きに驅られて殆ど夢から醒めようとするのだ。

わたくしは店の奥をのぞいて見た。すると黒い陰の中に老婆の顔の輪廓がかすかに浮いて見える。老婆は居ねむりをしてゐる。そしてその膝の上には二つの金の星がまたたきもせず輝いてゐる。

『平凡なことだ』と、わたくしは三度つぶやかうとしたが、何うしても聲が出ない。わたくしの氣分は此時、平凡の圈内を出ようとしてゐる。

その二つの金の星は何だ、或は黒猫の眼——さうとも思つてみたが、その金の星の眼はわたくしを夢から追ひ遣ると共に、わたくしの魂を永遠に支配した。

夢はさめた。

庭には矢張細かい雨が降つてゐる。

しかし夢の中で、いつも開けずに了ふ獣の脚痕の附いた本が、怪しい歡樂を暗示する。その本は珍しい韻律で書かれた歌の本ではあるまいか、わたくしはかう思つてしみぐくと嘆息する。

雨の中で鋭く長く蟲が鳴く。

狐の剃刀

『一體そのキツネノカミソリと言ふのは何かね。』

『まあ普通の意味で言へば雑草さ。』

『それで……』

『それでね、そのキツネノカミソリと言ふのはヒガンバナによく似た植物なのだ。夏になつて葉が枯れてから、朱の色をした花が高い莖の上に簇つて咲く……』

『あの曼珠沙華とか、シビトバナとか言つたね、その種類なら大抵知つてゐる。また例の好奇の癖が始まつたね。』

『ところが、僕の心にはその世間にある多くのキツネノカミソリの中から、たつた一本のキツネノカミソリが映じてゐるのだ。何うしてそんな花が僕の心の中に纏つた氣分を惹起したのか分らない。兎にも角にも朱の色をした色が、その後僕の心の壁龕に夏の日の熱した銀の光を帯びて輝いてゐる。そしてやや濃くなつた幻惑的な氣分が香煙のやうにその前に發散する。僕は折々その偶像をながめて「麻醉」の樂さを味つてゐる——と、かう言つたら、君は定めしつまらぬまねをしてると言ふだらう、暢氣だと言ふだらう。』

『さうさ、そんな偶像はひと思ひに破壊して了つた方が好みに違ひない。第一狂氣じみてゐる。君はまた妙な詩でも書かうと思つてゐるのぢやないか。』

「詩はいつでも書かうとおもつてゐる。それだけの氣分をいつでも保つてゐる。だが強ち詩は書かなくても好い。詩はそれを何等かの形式に依つて表現する時、僕は僕自身の夢想に反抗しなければならぬから。苦しい、……苦しいばかりではなくて、實際惜しいから。天の火を盗んだプロメテウスには野性があつた。ところが僕にはそれが無い。渾然たる氣分の中から詩を盗んで来るには、僕は餘りデリケートに訓練されてゐると言はうか、だから僕は矢張僕の偶像の前に無言の歌を捧げてゐたいのだ。」

「それは君の勝手さ、けれどもそんなつまらぬ、内容もない空虚な幻影を君の胸から逐ひ出してはぬ以上、君の本來の生命が流出して来ない筈だと言ふ事は、君だつて或は了解してゐやう。それなのに單に興味の爲に……」

「話が少し逸れて来た。僕は今僕のキツネノカミソリのことを言つてゐたのだ。話の調子から、「偶像」といふ言葉を使つて来たが、その偶像は一の觀念でもなく、また映像でもない。ただの幻感だ。色があつて色の形がなく、影があつて影の姿がないのだ。僕はその中から印度大麻の煮汁よりも苦いエッセンスを得やうとするのだ。それは一寸想像的な考へ方かも知れない。然しその幻感には、さう容易く破壊する譯には行かないのだ。火中の蓮華だ。それはさうとして、僕のキツネノカミソリの現實の運命から言つて見れば、君をも待たずに、どしどし踏みつけられて来たのだ。これは一つには人間の經驗からだ。教育からだ。そしてそれが今日では人里ちかくにさう澤山は見られぬ植物となつて了つた。」

「だが君は何處でその花を見たと言ふのだね。」

『下諏訪』

『ふう、君があそこへ行つたのは去年だつたかね。』

『さうさ、然し僕はそんな事實的證明なんぞしてゐたくないのだ。だけれども話の序だから言ふがね。町中の——町中といつてもあそこは知れたものだがね、とある家の側に咲いてゐたのだ。勿論僕はその花の爲めに僅かの間足をとめたに過ぎない。そしてその家は古本を賣る店だつた。』

「相變らず下手な象徴的な言ひかたをするね。」

「象徴的ではない。これこそ事實だ。その古本屋の頗る貧しい藏書の中から、僕にはたつた一冊の本が眼についた。」

『その本は何だ。』

『詩集さ、事實的に言ふために、君を満足させるために、その詩集の著者と表題を言はうなら、それは島崎藤村君の「夏草」だ。僕の眼についたのはその詩集の表紙の繪だけだ。月草が描いてある。瑠璃色の花が黄い埃を被つてゐた。おなじ夏草のうちでも、月草のやうなものは古來から觀賞されて來たが、その古本屋の灰色に朽ちかかつた家の側に珍らしく咲いてゐたキツネノカミソリは未だ曾て畫家の筆に上つたことがない——と、僕はふとかう思つたのだよ。』

『もうわかつた。いつまでたつてもキツネノカミソリか、お蔭に僕の頭も變になつて來そうだ。』

『僕はまたその花の蜜を吸はなかつたことを時としては悔んでゐる。然し實際吸はなかつた方が好かつたかも知れないよ。妖女の唇は吸はない方が好い、吸つて了へば妖女は滅して了ふからね。』

『どうともするが好いさ。君は一體が卑怯だ。』

『卑怯ではないのだ。前にも言つた通り野性がないのだらう。然し僕の心の奥にも矢

張ブリミチイワな人間がひそんでゐる。だから僕は時として悔むのだ。もう一遍あそこに行つて見たいやうな氣もする。然したとへ再び行つて見たとしてからが、その花が古本屋の側に咲いてゐるか、どうか、それさへ分らない。もうとつづくに經驗があり、教育がある人が堀つて棄てた後かも知れない。よしんばもとのまゝに咲てゐたところで、それはもう僕のキツネノカミソリではないからね。』

『だから君は卑怯なのだ、實行が足りないのだ。』

『もし其花の露を思ふ存分吸つたなら、僕の生命は端的になくなるかも知れないよ。』

『ふう、毒草だと言ふのだね。』

『さうさ、キツネノカミソリが毒草だといふことは人間の經驗と教育が證明してゐるのだ。その爲に人間は純なる鑑賞の態度をもつて、その花に臨むことすら出來なくなつて了つた。實行といふのは多分その花の根を覆へすことか、さもなければその花の露を吸ふことなのだらう。一は道義的、一は犠牲的。』

『智的に、皮相的に言へばさうかも知れない。』

『いや僕だつて純なる鑑賞の態度に出ることは出來ない。前にも言つた通り、僕の靈

性は、それが爲に麻痺されつゝあるのだ。』

『それは單に想像的にだらう。』

『さうとは限らない。どうしても消し難い幻感が残つてゐる以上、單に想像的とは言へまいよ。』

『矢張おなじことだ。』

『僕は實行して贖罪したくないのだ、忘却したくないのだ。少くとも僕の生活に不快なるシヨツクを與へたくないのだ。』

夢

彼は不思議な夢をよく見る男である。狭くらしい寢室に薄ぼんやりと射し込む明方の光線が、疲れ切つた彼を慰めるためか、手を代へ品を代へて、夢の世界の雰圍氣と映像の中に、彼のもつれ類れた頭と神経とを浸すのである。時としては無法な夢が忽

然と彼を襲つて來ることがある。神となるべき『我』の殘虐な崇高な發現である。元素的な四大よつの生なまな繪具の配列が恐ろしい不調和の調和を見せて、彼を驚かしたこともある。

『何だつてこんな夢を見たのだらう。己おれは何うしたつて、何うもがいたつて、それを己の藝術に翻譯することが出来ないぢやないか。』彼は忌々しさうに、後方を振向いて見ても、もう駄目だと諦めたやうな、強て抑制した表情を現すのである。

さうかと思ふと、彼は一度見た夢を再三再四繰返し調べ返すことがある。さうしてゐるうちに一の物語めいた組立が出来上る。

彼はさつきからさういつた夢の象徴を一つ一つ靜かにまた叮嚀に味つてゐたのである。潮氣にしとつた砂濱に待宵草の薄黄な花が傾いてゐるやうに、彼の眞珠色に曇つた頭腦の中では、神経の盃がひりひりと顫へてゐる。どうかすると性根もなく覆つてしまひさうに見えたが、その盃からたらたらと重い液の小さな玉が滴り落ちるのである。彼はその濃い液體を靜かに目を瞑つぶつて味つてゐる。

『どんな味がするか』と、傍からませつ返しをする俗物でもあるかのやうに彼は不機

嫌な腫を放つて、折々あたりを見廻すのである。彼の顔は一層蒼ざめて見え、彼の唇は少しく引歪んで来る。

『さうさ、君達の知つてゐるやうな味ではないのだ。酸でもなければ鹽でもない。彼は皮肉な眼つきをして、『言つて見れば夢の巢に醸された蜂蜜だ。無上な甘露だ、然しその甘露がどんな物から吸ひ取られて来たかは分らない。或は妖魔の花の露もあらうし、恐らくはまた艶女の屍の水もあらう。己は舍密家でないから、今それ等を一々に分析してゐる暇はない。己は己の夢の物語の組立を趁うて行かなくちやならないのだ。——そら、己の掌に柔かい、温かい物が觸て来た。』

彼はまた目を閉ぢた。彼の手には女のしなやかな手が觸れてゐながら、この時その女の顔はどうしても彼の所謂夢の組立の中に入つて来なかつた。強て求むれば、其處には淡い虹の色をした變幻不測な陽炎の感じのみがあつた。さてまたその女の手である。歌麿の華奢な淫蕩な女の手と、ロセチの情熱と神秘を合せた女の手とを、更に合せたやうな手である。それは音楽の眞の精神を彼の不調和な指さきに吹込む女の手である。

彼はその柔らかな女の手に觸てから、ある薄暗い戸口をこつそりと入つて行つたやうに覺えてゐる。ひつそりとしたと言ふよりも、陰氣な、微臭い、澱んだ空氣の中で、女の手の私語が思ひもかけぬ秘戯を暗示して、彼の戀情と好奇心を一度に刺戟する。さうかと思へばその私語はふと甲高な恍惚たる歌の美聲となつて彼の指さきから消え失せてしまふ。彼の魂は胡散くさい裏町をぬけてゆく時の不安と逸樂とを感ずるのである。

多少明るいところに出た。何處から明りが射して来るのだから分らないが、すべて物の面に妙に落ついた、物凄光澤を與へてゐる。何だか奥まつた座敷である。彼の脚は人氣に飢ゑて、青白い粉を吹いてゐる疊ざはりを氣味悪く感じた。そこにはまた華麗な金屏が引廻されてゐる。室内の黒い陰影と屏風の金色との調和が譬へやうのない恐怖に顛へてゐる、この貴族的な金屏には胡粉と群青とを厚く盛つた雌雄の孔雀が描いてあつて、それがぼつかり深い陰影の中に浮出してゐる。見つめて居ると、二羽の孔雀が啄んだり、歌つたりするやうに思はれて来る。彼はこの默劇の深意を探らうとする度に非常な困惑に陥つた。同時に彼の手に觸れてゐる女の手は音楽に種々な色合

の現はれて来るのを感じずにはゐられなかつた。彼はそれを感じる度に苦しい呼吸をついた。

彼は最早この上荘麗な恐懼と無言の凄慘とを綯交ぜにした夢を、續けて味ふに堪へぬかのやうに、慌て、現實に歸つて來た。そして彼はしきりに眼をしばだたいてゐる。彼の夢を味ふ室は外からの光線を暗緑色の帷で掩つてゐる。棚の上には古い南蠻の壺が無造作に載せてあり、机の上の本は伏せたまゝである。彼は古い陶器の壺と名人の書いた現代の歌の本とを一緒にする性質の人間である。彼はそつと煙草を取つて青い煙を靜かに吹いてゐた。そしてあの名高いビイコツク・ルウムが彼の頭の中に浮んで來たが、それが爲に彼の凝念に或る動搖を示すことを恐れて彼は又自箇の夢の中に沈んで行つた。

彼の見た孔雀の間は唯一つではなくて、幾つも連續してゐた。何處にも人影はなかつた。たゞ金屏の前では相變らず胡粉と群青の運命劇が演じられてゐた。それを黙つて見て居らねばならぬ彼の頭はいつとはなしに狂氣の渦の波動を受けるのである。しかし間もなく彼は戸外に立つことを得た。彼の手は矢張女の手を感じてゐるので

ある。その手の感じがまだ以前とは違つて來た。それは恰度日に蒸された青苔と汗ばんだ小猫の産毛うぶげの觸覺である。彼の心はこの時不氣味な豫感をおぼえて畜生のやうに顫へたのである。

戸外の景色は捕へどころのない、そして遠近の差のない一面の草原である。褐色と淺緑の上に蛋白石の潤みと光澤をもつた柔かい光の反射がある。彼はその異様な色彩の効果に惑はされながら、女の手の導くまゝに、はてしもない野原を横ぎつて行くのである。彼の脚の下からは踏みだしかる、草が啜泣く。それが軽く踏めば踏むほど彌が上に聲高になつて、褐色と淺緑の野の上に蛋白石の涙が瀕死の羊の心の臓の様に波立つて來る。彼の身も心も、夢から夢へ埋められて、この不思議な野の犠牲となつてしまひさうである。

彼は體からだをもんだ。そして最早女の手の觸覺を味ふ餘裕さへなくなつたのである。遠く空からやくたいもない鐘の音が傳つて來る。彼の耳はこの鈍い鐘の音の中に、黄ばんで萎びた二三の套語を聴くに過ぎなかつた。『愛は死よりも強し。——こんな言葉である。彼は癩れゆく宗教の斷末魔を耳にして稍憐愍の快感を覺えたけれども、彼は

この時から瞬一瞬に「死」に近づく恐怖の念に襲はれたのである。

何處を何うして此處までたどつて来たかは、勿論彼には分らなかつたが、ふと氣が附いて見れば、彼はたつた一人で川の畔に立つてゐるのである。濁つた水を澁々運んでゐるこの川はだゞつ廣い野をおほまかにうねつてこの岸、かの岸にひよる／＼した柳の樹がばらばらに立つてゐて、垂れた枝には疲れた葉が灰白色の葉裏をかへしてゐる。彼はどうしてもこの川を渡らねばならぬやうな苦痛を感じて、漸く一艘の渡舟がやゝ下流の向岸にもやつてゐるのを發見したが渡守の姿は何處にも見えなかつた。思ふに因業な渡守は皮肉な白髪の夢に溺れてゐるのであらう。

空漠な野原とあてもなくのたくる川と惱む柳と癡痺した小舟と、そうして向岸の奥の方に退いて眞黒く見える秘密の森と——これ等はすべて彼の目に「生氣」を除外した裝飾として或る面白味を暗示してゐる。然しその「否定」の面白味もながくは續かなかつた。その整調はやがてかの眞黒な森の前から颯々蒼く黄色な煙のために破られて、全く別の凄慘な光景を現はして來た。「無生」が暴露する殘忍な意味は深く重く切に彼の心身に食ひ込んで來るのである。

煙は蛇のやうに鱗こらう局を巻いたり、ほぐれたりしてゐる。煙は苦しみ、嫉み、惱み、もがいてゐるのである。その煙の底から赤い熔けた火の舌が痙攣的に燃え上つてゐる。

彼は身を顛はして、頼るべき何物かを求めて、われとわが手を握つたが、握りつめた掌からはたゞ冷たい手肉てにくの油が滲み出たのみである。

「やあれ——やあれ——」といふ哀切を極めた聲が火光の閃めく方角から聞えて來る。彼は彼の手に觸れてゐた女の手の感覺を引戻さうとして、無意識に手を赤い火にかざすやうな様子をした。そして彼は遠くに燃えてゐる火の中で、焼かれ崩さるゝ女の體を、不思議にも明らかに認め得たのである。その上その女の顔を初めて知ることを得たのである。半面は火に甜められた女の青い顔に淫蕩の象徴ともいふべき唇の表情を見たのである。

彼は思はず眼をそむけてしまつた。

「やあれ——やあれ——」といふ聲がとぎれとぎれに傳はつて來る。……

彼の夢はとうとう結末に達したのである。しかしその結末は、彼にとつて、また新たななる發足點である。彼は夢にあつて眼をそむけたものにまた眼を移す好奇心をもつ

てゐる。彼は渴いた口に盃をあてがふ時のやうに舌打をした。そして徐ろに起ち上つて、暗緑色の帷を引きあけて、恐る／＼外光の狂亂する庭園を眺めるのである。

驟 雨

驟雨の來さうな濁つた日である。

わたくしは阿蘭陀西鶴の浮世双紙を読むともなくたどり、また味ふともなく觸れてゐた。

けだるくなつたわたくしの手からは、何時の間にか、その書物がすべり落ちた。この刹那に、わたくしは指尖の感覚が灰白の靄となつて、うつとりと融けてゆくのを聞いた。

ふと氣がついて見ると、紫檀の卓つくえの面おもてが、硝酸銀を容れた罎かみから發散する煙のやうに咽んでゐる。

夏の日の午後の蒸しあつさは草木を萎えさせる青くさい呼吸を淀ましてゐて、その濃いきれの匂ひが太く流れて、をりをり室の中に音もなく這ひ込んで來る。

麻醉にかかつた夏の午後の天地は埋もれた古井をおもはしめる。古井の冷たい陰惨な氣のかはりに、蒸して饅えた、そして矢張底氣味のわるい溜息がこもつてゐる。

西鶴の双紙に描かれた美女の映像が、わたくしの疲れた腦裏を色めいて往つたり來たりする。彼等は皆蜂蟬の生を嘆いてゐる。そしてほほ笑んでゐる。

紅縞の着物の裏がひる返る。わたくしはその美女の行くへを見極めやうとしたが、どうしても臉が重い。

するとまた遊女のために永代髪えいだいかみの油の寄進をするといふ男のことが想起される。それと同時に、唐銅の大きな油壺が眼の前に現はれる。それが油びかりにとろとろとしてゐる。そのところへ陶器の平たい鬚油ひげあぶらの小壺を携へて來たとおもはれるしなやかな手が、いつしかわたくしの手に纏りつく。眞白な誘惑の手は蛇のやうに冷たい。それでゐながら情炎は隙なく全身に傳はつて來る。

わたくしは無意識に、實際卓の傍に置いてあつた古い鬚油の壺に手を差し伸べた。

それはわたくしの好奇の心が過去の埃の中から救ひあげた品のひとつである。その小壺の表には青と紅との鮮やかな色彩模様がある。わたくしはいつも無聊のをりにするやうに壺の口を嗅いで見た。矢張ながい歲月陶器の膚に馴染んだ油のほひが幽かに残つてゐて、執着の無言の歌をささやいてゐる。

わたくしは熱い夢から次第に醒めかけて來た。芭蕉の廣葉が軒端に迫つて大きく揺いでゐる。孟宗の枯葉が一つ、葉の軸を垂直にしてきりきり舞ひながら落ちて來る。西鶴の浮世の夢から醒めてゆくところに、廂をたたきはじめて大粒の雨の音が沁み込んで行く。

土瀝青ビチコウムのほひを聯想せしめる遠雷の響が聞える。それが乾いた土の雨に濕つてゆくにほひとよく調和する。

やがて楓のすぢ細い枝を吹き捲く風と共に、雨は狂氣のやうに降つて來た。重かつた唳が力を得て弾き返つた。

今や銀灰と淡緑の雨のしぶきが濛々としてこの世界を領してゐる。そして驟雨は過ぎる。

わたくしは雨の上つた後、青磁の鉢に養つた茉莉の花の夕暮を待つて咲き出さうとする白い蕾のふくらみを賞でて、西鶴も、油壺も、すべて忘れてしまつた。

一疋の蠅はまだすくんだまま障子の棧の一番上にとまつてゐたが、外方あちからは蜩の聲が聞えて來た。

地獄の如き實在

ぐつたりと疲れきつた砂原すなはらの中でぢりぢりと石が焼けてゐる。代赭色の粗い膚と硫酸銅の藍碧の斑のまじつた、形の壞れた大きな石である。その石が重量のある日光の焦點となつて焼けに焼けてゐる。

熱した一面の砂原——文學も科學も哲學も、この死滅の墓地にあつては遂に何物でもあり得ない。

——ここではすべてが死滅に過ぎない。彼はかう思つて、言ひしれぬ空漠な寂しさ

をおぼえた。然しながらそれと同時に、不思議にも心の底から抑へ難い情慾が湧き上つて來た。

——すべては大法界の渣、死の灰の砂原である。けれどもそれは人間の情慾とおなじく熱し爛れてゐるではないか。

眞にさうだ、死滅と思はれる砂の一粒一粒にも常恒の生の韻律の芽が附與せられてある筈だ。其處から蒸し昇る陽炎——無盡の幻相を彼は追つて行かうとするのだ。その砂の一粒にも眞青な原始の海が展けて、海豚や人魚の歌を聞くことが出来る。またその一粒の中に、公孫樹も繁れば人鳥も飛ぶ。發電機が叫び、絞殺臺が呻き、賣春婦が媚びる。そしてとろとろの悪酒が清淨潔白な肉の盞に注がれる。彼は今飽くことを知らぬ刺戟に驅られながら、無量無邊の陀羅尼を強ひて解かうとした。

彼の情慾は彌が上にも昂奮して、遂には血に渴する苦惱に魅せられたのである。

ぢりぢりと石が焼ける。代赭の膚に硫酸銅の斑紋をまみらした焼石の蛇が執着のとろろを巻いてゐる。そして眞赤な生血の泉がその膚の下に沸き立つてゐる。

——實在の生血。彼は噉れた聲で熱い呼吸を吹いた。

その時、彼の心の眼に廢れた宗教が柔和な誘惑を示現した。紫いろの袈裟を著けた若年の僧が人間の失はれた記憶の古い石塔の前に立つてゐる。見ると、眞白な衣を搔合せて軽く挟んだ經本の朱の表紙の端が、如何にも殊勝らしい色調の調和を示してゐる。(この美男の僧と稽古本を抱へて臙脂に匂ふ世俗の町娘との間に恐しい一致がある。これは頰れてゆく八瓣の肉蓮に宿る美の最後の相の一つであらうも知れぬ。)そして靜かに經を誦してゆくその間、この若年の僧の蒼白い顔には唇と長い睫毛のみが微かに動いてゐる……

彼は不圖脚もとを見た。そこには無數の蟻の群が漚しもない死滅の葬列を作つて動いてゐた。そしてまた注意すると、これはどうであらう、美男の僧の讀經の音聲に聞き惚れる彼の體から、無數の昆蟲が生血を吸ひ取つてゐた。彼は今それをどうすることも出来なかつた。

彼の心はかかる藝瀆の思想と忍辱の持戒とに媚びてゐたが、再びぢりぢりと焼ける石の硫酸銅の斑紋が彼の眼に慘ましく映じて來た。

——地獄の如き實在、そして記憶と血液と失はれたるすべての物と、彼はかう叫ん

だが、その唇はしきりに渴いて、頭腦は涯もなく焼け爛れた。
望むところは唯無上の法雨である、——生血の雨、狂氣の雨である。

海の思想と誘惑

漁師の家の脊戸につらなる棕櫚の葉かけから、または椿やとべらや濱もつこくの繁茂した暗緑色の木立の隙から、濃碧な海の一部を窺ひ見る時ほど、海に對する渴仰の念に襲はるゝことはない。海そのものゝ有する思想の斷片が我等の劃られたる感覺に媚るからであらう。人間といふ立場を失はずに、自然の奧秘と交通する靈性のさゝやきと顔へとを感じ得るからであらう。

藝術は要するに「斷片」の捕捉に過ぎぬが、捕へんとして捕へ了せぬところに千載の秘密がある。既に捕へ得たりと盲信し、即斷した藝術家は、あはれ、その藝術を屠つたものである。

わたくしは今大洋のたゞ中に浮んでゐる。船は絶えず南の島を指して航走を續けてゐる。同乗の船客は幾らあつても、わたくしの眼には唯一様に灰色にぼやけた輪廓をもつてゐる個々の黒い塊として映じた。そしてその一人は船長の按ずる羅針盤を讃頌した。また他の一人は蒸氣機械を讃頌した。更にまた南の島の生活を慕ふ聲が起ると共に、流浪の悲運をかこつ聲もする。その中であつて誰一人海を懼れぬものはない。わたくしもまた海を懼れた。「斷片」といふ「斷片」を見るに由なき大洋のまつたゞ中であつて、わたくしもまた海を懼れた一人であるが、そのむかし海を航するものが悪龍の難をのがれんとて、觀音の秘經を誦んじたやうに、藝術の「斷片」を無言に讃頌することを得て、わたくしはわずかに四周より通り來る海洋の威壓からまぬがれようとした。瞬時に看るところのものはすべて斷片である——紺青の海の色、斷片、絶間なく起き伏す波のうねり、渦まく線の斷片、銀青色に輝く空の斷片、白く細く捲き上げる雲の斷片——然しながら、かゝる大洋のまつたゞ中であつては、われらが視野はその限度を超えて、同じ瞬間に前後左右を看得るが如く感ずるものである。千眼を以て同時に視野の全圓周に臨むものである。かゝる際に自然は直にまた容易に人間を溺

らして了ふ。溺るゝ際の恐怖と苦惱は藝術の安靜境を隔つるものである。藝の翡翠、藝の紅寶玉、藝の蛋白石を失はねばならぬ。藝術は全き生の魔術である。不可能の可能である。合金を以て純金を得るすべである。ハアモニイであり、シンフォニーである。色聲香味觸を調じ按配するアルケミストに取つては、自然に征服さるゝ人間を見るに堪へないと共に、自然は遂に藝術に操られる妖艶なる一個のサイレンとして、生の魔術の中にあつて死の魔術を豫想せしむるものでなくてはならぬ。……わたくしの思索の絲はこの時断えんとしたが、わたくしの眼の前に不圖ジョコンダの繪姿が現れた。レオナルド・ダ・VINチが心血を濺いだ繪である。何故此時ジョコンダが現はれたかは分らない。その繪のイリウジオンが稍色褪せてゆくと共に、ジョコンダの怪しき微笑が、パアン・ジョンズの『海の底』の人魚の蒼白い微笑に移つて、しばし凄婉な相を呈したが、その微笑も更にモネが『地中海』の岩と海と陽光と陰影の戯れの中に潜んで行つた。わたくしの心はひたすらに藝術の滋味と幻想に酔ふばかりであつた。

わたくしは夢を見てゐるのではないか。——やゝ西に傾いた日はこの平穩なる航海を照らしてゐる。わたくしは甲板の欄干にもたれて大海の呼吸を數へ、香の煙よりも

濃やかな空氣の中に、われとわが身の麻酔を樂んでゐた。すると忽ち空が赤く燃えた。日輪の座は切目のない一瓣の花につゝまれた葉のやうに見えたが、それがまた緩く渦を巻いて廻轉してゐる。わたくしは船室に籠つて、黒くうごめいて、絶えず海洋を懼れ、果敢ない望を懐いてゐる一群の人のことが氣にかゝらぬでもないが、わたくしの眼はいつも前面を眺めてゐた。舳に當つてそゝり立つた一つの島山が見え出した。険しい巖の壁が殆ど垂直をなしてゐるから、濃紫に燻つた陰が豎に深く刻まれて、巖の角々が金光を放つてゐる。空の色彩はその島山の上に殊に深く停滞し、彎曲して、恰も稀代な毛皮を見るやうな斑紋と線條との物凄き連結をしめしてゐた。文化に誇る人里から遠く追はれた古代宗教にかしづく僧侶の面影がその島山の姿の中にあつた。燭臺を捧げて無言の勤行を續くる僧侶の姿である。その宗教は人魚とサイレンと鰐鰯とアルパトロスの宗教であらねばならぬ。わたくしの空想はアラン・ポオの物語を翻へす如く、島山の影と共に限りなく擴大された時、すべてが急に虚無に没し去つた。わたくしの心を牽引し、誘惑した不可思議な對象が、かくばかり突如として視野を離れて行つた理由は遂に解することが出来なかつた。船が遽に航路を轉じた爲めでもあら

うと思つて見た。それと共に天界の氣象にも變化が起つた。薔薇と青の雰圍氣が虹のやうに船をつゝんでゐて、海は緑の影を帯びた、褪めかゝつた赤紫色である。そして物の半响も過ぎたかと思はるゝころ、平靜な情調を融し込んだ海洋の面に一點二點の帆影が現はれた。白い鳥が淡紅色の帆のかけになつたり、前になつたりして、自在に飛びまはつて居る。今まで船室にばかり閉籠つてゐた船客のうちの四五人が始めて甲板に上つて來た

一人は『陸が見える。』と言つた。

一人は『おれの故郷だ。』と言つた。

一人は呻き聲で、『病み疲れた體をあすこに埋めるのか。』と言つたが、その聲はよくは聞えなかつた。

更にものゝ半响ばかりして、船は寂しい港の前面に停まつた。舢舨は僅少な荷物と疲れた労働者とを積み込んで陸岸に向つたが、わたくしもまたその中であつた。少しの時間を偷んで上陸して見るのが、わたくしの好奇心に満足齎らすだらうと思つたからである。岸に上るや否や後をも振向かず乾いた砂を踏んで歩いた。一本の草を

も見のがすまいと思つたが、ひつそりとしたこの島には草までも疲れ切つてゐた。花ともつかず、果ともつかぬものが壞れた色を着けて、ぐつたりした莖にへばりついてゐる。わたくしは稍驚いて塔のやうにも思はれる型の建物が見える方へ急いで行つた。砂路がざくざくと油のきれた心の臟のやうな音をたてる。沈靜な空氣はその響を傳へて微かに顛へた。わたくしは塔のやうな建物の前に來た。黒く繁つた生垣に圍まれた陰氣な建物である。その様子がこの島の寺院でもあるやうに思はれたので、生垣の隙から窺つて見たら、建物の左手にある廣場には果して灰色の墓石が列をなしてゐて、その墓の一つの上には青い蜥蜴と眞黒な羽蟲とが休んでゐる。ただ珍しいことには、この墓場の中央に名も知れぬ果樹が半圓形に枝をそろへて、極めて強い緑の葉かけから黄金の果實を匂はしてゐる。

『何といふ樹だらう。』と、わたくしは思はず後を向いた。今まで後を見たことはなかつたが、此時始めて振りむいて見ると、若い女が一人立つてほゝゑんでゐた。誘惑から滲み出したやうな媚がそのほゝゑみの中にひらめいてゐた。

『何といふ樹だらう。』と、わたくしは餘計なことだとは意識しながら、この場合外に

適当な言葉を見出すに苦んだから、同じ言葉を再びつぶやいた。女は無言のまゝ、そつとわたくしの手を執つた。わたくしは女の眉根の蒼白く動くのを見成つてゐたが、女はまたわたくしの耳に口を寄せてさゝやいた。わたくしはこの時齒の痛みを刺す劇薬の冷さを感じた。

わたしは慌てゝ引返した。女が後から跟いて來たか、どうか、それを知る暇もなかつたが、女の冷いさゝやきは全くわたくしの心を焼いて了つた。そして女の媚の經卷をわたくしは絶えず巻きかへした。金地に青の文字をしるした經卷である。

本船に還つて間もなく日が暮れて、落つきのない夜が來た。わたくしは平靜を詐り装つて、黄く熟んだ燈火の下に身動きもせず坐してゐた。船はまた航海を續けた。わたくしはこの夜を徹して燈火の光を見つめながら、かの蛋白石と紅寶玉と翡翠とを連ねた藝の珠數を爪操りつゝ、人魚とサイレンの宗教の秘義に參じようとつとめたけれども、この怪しい女の手の壓迫が今もなほわたくしの掌に残つてゐて、頻りに悔恨の情をそゝつたので、わたくしの凝念は絶えず亂されてゐた。

海上の夜が明けた。汽笛は鈍い聲で吼えた。その聲に混つて、けたたましい鋭い赤

兒の叫聲が聞えた。灰色の輪廓をもつた一群の船客は總立そうたつとなつて甲板に現はれた。船はこの朝最後の目的地に到着するのである。踏み躪らるゝやうな赤兒の泣聲がまた聞えて來た。

氣味の悪い眼をもつた船客の一人が、

『あの赤兒は誰が世話するのだ。』と言つた。

他の一人はわたくしの顔をじろく見つめて、

『昨日の晩方あなたはある女の方と一緒にこの前の港で上陸されたことがあるでせう。』と、言つた。

『それが何だ。』と、言はうとする間もあらせず、他の一人が、

『それからあなたはその女の手を握つたでせう。』と、せせら笑つた。

『その女は何處にゐる。』わたくしはかう問ひかへさうと思つたか、赤兒の聲が急に微かになつたので、その方に耳を傾けると、泣聲は波の底から聞えてゐた。

紺青の海の底から沸々と赤兒の泣聲が浮んで來る。そしてわたくしはその聲を聞いて、擦らるゝやうな感の快感を覺えた。

魂の法會

理髮店といへば直に幼いをりに伴れられて行くのを厭がつた記憶が浮ぶ。いくつの齡であつたか、今ではおぼえないほど遠いおぼろの影の中から、その日、その時の理髮店に飾つてあつた一鉢の花が心の眼に映る。物の象や人の顔がおぼつかないに淡々と現はれて來ては、いつしか音もなく消えてゆくその中で、急に烈しい夏の日の光が頭へるかと思ふ一瞬に、白く輝いて生れいづる手弱女の面ざしそのままの花——それは百合の花である。

花にも魂があつて、ふとした機會に人の魂と相結ぶ。花はその時から美はしく脆い姿をとこしへの印象に代へて、人の魂の奥に宿るのであらうか。人はそれを憶ひ起す何時でも、いひしらぬ歡びを感ずることが出來よう。花の魂は人間に最も親しい「自然」のちからである。かの日に理髮店に飾つてあつた一鉢の百合の花も、わが魂の中

に移されて、その褐色の斑點が今もなほ鮮かな星のやうに見え、曾て風に轉じた花瓣が或る秘密の天體のやうに緩やかにその上を覆ふてゐる。

この百合の花が憶ひ起されると同時に、その理髮店の内部のさまがほのかな夢かとはかりに浮かんで來る。そこには水銀の海を延べた姿見が碧く曇りを帯びてゐる。魂を取りまきつつ、深くそして感じの鋭さを示してゐる雰囲気を通して、この朧ろげな鏡に對ふ時、——その刹那に恐らくは百年の運命が映つてゐよう。

幼時の面影——それは一生のすがたでなくて何であらう。それに對して懐しさをおぼえると共にひそかに恐怖の念を抱かぬものが果して幾人あらうか。

兎まれ角まれ、昔のみすぼらしい理髮店の姿見が、今しも傳奇的な幾百の燐光を放つ魚の眼をただよはすかと思ふ間に、黄金の霧が一面にかかつて來る。金磨きにした鏡の厚縁が、明るい霧か飛沫のやうに蒸して、その中から深く刻んだ唐草模様が海の藻の葉のやうに流れて見える。

遽かに不快なおもひが何物をか避けようとする。曾ておぼえた本能の衝動が今もなほその名残の警めを叫ぶ。かくて遂に避くべからざるものの手がわが身を捉へるので

ある。身動きもならぬ幼い姿が鏡の中に銀灰色に顛へつつ、その底に抑へつけられた惱ましさを藏してゐる。見ればまたその後方に立つ人のすがた、——片手には研ぎすました剃刀、その刃のほひが稻妻のやうに閃めく。すべてが聲もない泣きどよみを作つて、すべてが掻き亂される。……

百合の花と剃刀と、その間に「我」といふものが介まれてゐる。その間に不可思議な親和力がある。静かな花の匂ひに剃刀を研ぐ鈍い音がまじはる。あなたには切な慕はしい念、こなたには常に不安な念。さてはまたその百合の花は何であらう、剃刀は何であらう、剃刀を研ぐ手は何であらう。しかもその剃刀を研ぐ同じ手が一鉢の百合の花に養ひの水をそそぐのである。この矛盾の極と極とが相結ぶ環の中心に當つて息ざし深く宿るもの——これがわが「魂」である。この環の世界が即ち運命の世界であらう。

自然や人生の表面は餘りに雑駁なので、人はその雑駁に慣れて、むしろ制せられて、そこに矛盾があつても、(嗚呼、世の中の事はすべて矛盾ならぬはない。)それを矛盾と思はなくなつて來た。智識が既にこれを整理した筈に決めてゐる。しかも一見些細な

矛盾でも、えてまたさういふ矛盾が、思ひもかけぬ調和を、即ち物の眞髓を折々人にしめすことがある。

わたくしは今朝からさまざまな書物やさまざまな思想に觸れて、何の興味もなく徒らに感情を麻痺させた結果、しきりに悩む頭をかかへて、近所の理髪店に行くことにした。

寒い暗い夜である。外方の寒さに内側に曇りを吹いた理髪店の玻璃戸は、瓦斯の光を温かに心地よく籠めてゐた。わたくしは無言のまま、いつもの椅子に——折から外に客もなかつたので——就いた。慣れた座は王座のやうである。

不圖前を見るその途端に、鏡の奥から靜に動き動くものが迫つて來るやうに思はれた。それは銀灰色の顛動であつたが、その背後から暗い影が忽ちにこれを掩ひ去つた。幼時の面影はここに閃めいて、また滅えた。わたくしは仰向になつて、頭を椅子に當ててゐると、急に疲れをおぼえて、をのづから眼瞼が閉ぢられた。魂がまるで瓦斯の光に吸ひ取られでもしたやうに、ただ暗く寂しい胸の中をさまざまな遊離された思想

が忍び足で過ぎて行つた。

剃刀を研ぐ音が睡たげにひびく……

わたくしはその間うつらうつらとしてゐると、忽ちわたくしの頬のあたりを、研ぎすました剃刀の切味が、ひと撫で、そよ風のやうに掠め去つた。呼び醒された感みづからが、疲れて飢ゑた感みを饜かさうとして、その危険を忘れた一瞬時——その感の振動の圖がうるはしい模様を描いた。そして最後にそれが百合の花の匂ひを放つた。

そこらの空椅子には二三人の少女が集つて取りとめもないことを話し合つてゐた。その口振から察するにまだ四五歳ぐらゐの少女であらう。わたくしは今その姿を見ることは出来ない。わたくしは仰向になつたまゝ、眼を閉ぢたまゝ、その話しごゑに耳を傾けてゐたが、何時の間にか不思議にも静まりかへつたかと思ふと、その少女の中の唯一人が極めて緩やかな調子で唱ひ出した。

「東郷さん——乃木さん——河村さん——奥さん——野津さん——(すこし途絶えて)——黒木さん——」

少女は思ひ出すままに、この度の戦争に勇しい名を馳せた將軍の名を數へ來り數へ去るのだ。

さしもの戦争もこの少女のこの緩やかな満足な調子の中に激しい活動の夢をとこしへの平和につつんでゐる。——無意識に、遇然に、そして極めて必然に、魂の鏡に映じた過去の事柄を、誰かこのやうに満足に數へ得るであらう。若しまた數へ得るものがあれば、それは我等の魂みづからであらねばなるぬ。魂の法會に魂の鐘樓から鳴りわたる鐘の聲——その聲を耳にして、不注意と邂逅によつて、空しくも逸し去つた過去の些細な、しかも重要な事柄を憶ひ起し得るならば、いかに歲月は意味あるものとならうか、いかに生活は根ざし深いものとならうか。

少女は緩い調子でまた繰りかへした。

「東郷さん——乃木さん——河村さん——野津さん——黒木さん——」

わたくしにはそれが際限もない歌のやうに聞きなされるのである。

わたくしはその少女の無邪氣な顔を一目見て、更に満足を味いたかつた。然しながら、この時、わたくしの體は危険な刃物の下に身動きさへすることは叶はなかつた。

わたくしは實現の出来ぬ欲望に渴しながら、いろいろに考へて見た。その少女はそもそも何處から來て、わたくしの傍に座を占めたのか、座を占めて何の爲に勇將の名を唱へはじめたのか。身動きもならぬわたくしに取つて、その少女は何とはなく不可思議の存在と思はれるのである。そしてその少女は……

氣がつくと、讃歌の聲はいつしか絶えてゐた。少女の存在は果してどうなつたのであらう。わたくしは胸の鼓動の高くなるのをおぼえた。少女は沈黙して、更に近くこの胸の中にその座を移したのではなからうか。少女の胸におぼえる鼓動そのまま、この胸の鼓動となつたのではなからうか。

沈黙の懸錘が幽かに揺れてゐる。——音もなく、影もなく。

この時また水甕に——恐らくは研場のであらう、それはどうであらうと、その水甕に滴り落ちる水の音が間を隔いて聞えはじめた。——さまざまな音色がさまざまな思ひを奏でてゐる。

最後に一雫がいとど澄んで落ちた。

わたくしの魂の海はその活きた眞珠の一雫を貪り吸つた。

世 相

わたくしは何事を思ふともなく、いつものところから、いつもの通り電車に乗つた。

——わたくしの頭には、この時、雑駁な空虚があるのみであつた。

日毎に、また年毎に、都會はその紛雜を加へてゆく。狂奔の吐息と嬌飾の匂ひとが混り合つて、蒸し苦しい人香のいきれが鼻を撲つ。その光景を一々に觀れば極めて不自然な姿であるが、しかもそれを全體として、感觸するがままに、この不自然を自然に觀れば、その紛雜と眼まぐるしさの中に調和がある。さまざまな流行の衣の色や、さまざまな香油のかをりや、さまざまな響が一つになつて神経を刺戟する間にも或る印象が残る、——音の赤い斑点や、香の緑の斑点が疲れた眼の前を浮動する——すべての現象がすべての感觸の綜合なる一の情調の中に没してしまふ——そこに極めて痛切なる人生の哀樂の圖が生れる。

わたくしの空虚な頭はいつしか斯ういふことを想念しつつあつたが、わたくしは矢張その雑駁さに堪へきれなかつた。それでまた考へることを止めてしまつた。

わたくしの乗つた電車は幸ひ勢ひよく走つた。今しも大通りの並木の柳を緑の雲のやうに窓玻璃の外に靡かせつつ、その切目切目から、商店の軒に掲げられた招牌の形や色や意匠のかすかすが閉めき且つ消えてゆくあわただしさを開展しつつ、快く速度を早めてゐた。

わたくしは眼を車内の人に轉じた。互に押し合つて窮屈を忍ぶ平凡な乗客のなかに、緒ら顔に並ぶ色白の女の顔の半面が、ふとわたくしの心を牽いた。その顔は無言の不安そのものであつた。それか習慣になつて残つてゐる媚の中から滲み出てゐるやうに思はれた。わたくしがさう思つて見てゐると、電車が急にすさまじい震動を起した。その途端に、色白の女の眼と緒ら顔の男の眼とが激しく動揺する空間で打重り入れ交るやうに見えた。併しこの不測に起つた感覺の戲謔を、わたくしはそれかと思ふ隙さへなかつた。

電車は、たと停つた。乗客の一人が窓から首を出して、「犬がひかれそとなつたのだ」

と云つた。

他の乗客がこの説明を聞いて安心した如く、わたくしもまた安心した。そして「ひかれそとなつた犬」のことなどはすつかり忘れてしまつた。

わたくしは兎に角安心して、今度は隣席の老婆に眼を向けた。六十路ぐらゐの、頬の皺のすこしたるんだ老婆である。その顔には世帯の苦勞を通り越して、やつと今日の安心を得たおもかげが、現在の平和の夢につつまれながら深く刻みつけられてゐる。細かな年寄によくある少し窪んで衰へた小さな眼が、古風な亀甲縁の眼鏡の下でしばだたいてゐる。そして手垢のついた小形の書物を膝の上に載せて、そのこまかい活字の印刷面を一心に見入つてゐる。

老婆は身じろぎもせぬ。その手にする書物は印刷の體裁からそれとすぐわかる「聖書」であつた。その「聖書」にはまた單に手擦れの痕がしめされてあるばかりでなく、毎篇の標目が細く切つた厚紙にしたためられて、丹念にその小口のところこぐちに上から下へと貼りつけられてある。これだけ見てもこの老婆の平生の心づくしがよく判る。そしてその標目の文字はすべて平假名で、たとへば「るつ」、「えれみあ」——書體がま

た見事である。

老婆がしきりに見入つてゐるところは「馬太傳」中の一章であつた。その熱心さには、さしむかひに腰かけてゐた少女までが誘ひ込まれて、やや好奇のこもちから、伸身のびみになつて、老婆の様子をほほゑみながら窺つてゐた。無作法な車掌が、これもまた何んと思つたか、乗車券を切りに通過する時、ちよつとさし覗かうとすると、銅貨で重くなつた鞆が前にずれたので、あわてて肩を揺り上げた。

老婆は矢張身じろぎもせぬ……

わたくしは雷車を乗り換へた。新らしい顔がわたくしを黙つて迎へた。最後にこの車に乗り込んだものは見苦しい女房に手をひかれた盲目めくらの尺八ふきであつた。

尺八ふきの女房は、だらしなく乳呑兒ちちごを負つてゐたが、その上にも七つ八つになる「餓鬼」まで伴れてゐた。垢ばかりのする裕の胸が、はだけて、汗と膏によごれた乳のあたりがあらはに見える。

盲目の尺八ふきは、唯おどおどとして瘦せぎすな體をすぼめて腰をおろした。頬のこけた、顔のいろの黒ずんで蒼みを帯びた、神経質らしい男である。

その男の濁つた眼が、ぎろりと動く——彼は何を思つてゐるのであらう。そして天鷲絨の袋に入れた尺八を堅く締めた帯に挿して、これは女房のであらう、襪に包んだ三味線を大事さうに抱へて、その棹のところを軽く右の肩に當ててゐた。

折から雲に焼けた夕日が不意に射して、向側の乗客の顔を氣味わるく撫でるやうに染めた。蒼ざめた尺八ふきのこけた頬が忽ち朱をそそいで浮び出で、濁つた眼がまたぎろりと動く、と思ふ間もなく、朱の色は減えて暗くなつた。

彼は恐らく藝に魂をこめる——そのやうな機會が果してあるだらうか——その一瞬に眞の安慰を得ることもあらう。しかしながら安慰は短く、減えて、生計の苦が長くつづく。身は疲れ、魂は削られる。彼は今何を思ひつめてゐるのであらう。

深く籠つた尺八の音が聞えて来る、わたくしには自然に、それは空想でなく、その音色が聞えてくるやうに思はれた。尺八の曲節は始め肉の惱みに顫へたが、いよいよ妙境に入ると共に彼は何物をも忘れ去る。女房の弾く三味線の調子が、この時から、どうしたものか合はなくなる。撥音が、やけに狂ふ……

するとまた小兒のちれて泣く聲がする。

わたしは空想から呼びさまされた。尺八ふきの女房は負つてゐる乳呑兒に泣き出されて、いらいらしてゐる。

泣く兒の兄の「餓鬼」は三四席前の方で、後ろ向きになつて、物珍しさうに外方おもてながめながら、窓玻璃をかたがたさしてゐたので、女房は卑しい濁み聲で、

「これ、そんなことをしないで、こつちに來な、悪戯わるざをするなよ。」と、いきなり叱りつけた。

「うむ、おつ母あ、何にもしてはゐねえよ。」彼はまた彼れで、狡猾かどさうな、それでゐて元氣のない聲で言ひ返した。

わたくしは急に一日の疲勞をおぼえると同時に、その全身にわたる疲勞が味氣ない溜息をつくのをしみじみと聞いた。

向日葵

キリアム・ブレエク

ああ向日葵や、日のあゆみ
 ひねもす數へ待ちつけて、
 天路の涯にありといふ
 黄金の邦にあこがるる。

恨み亡せつる若人も、
 栲のかけ衣つけし子も、
 墓より出でて尋めゆかむ、
 わが向日葵のねがふ常世を。

述懐

フォルタア・サエニジ・ランドル

争はざりき、争ふも益なき世や、
 愛でしは「自然」、次にまた「藝術」をも。
 雙手命の火にかざし、温めしかど、
 火ぞ沈む、噫、何時とともかしまだたむ。

地の歌

ジョン・キイツ

「地」歌さらに絶ゆべしとも思ほえず
 小禽は熱き日に弛み涼しき蔭の
 樹の間尋め隠れゆく時、聲はたつ、
 塙より塙に、新刈の牧の野原を。
 こは、あはれ、鳴く、蝻斯豊の日の
 夏の宴に先だつは、おのがままなる
 享樂の爲めには、あらし、疲れぬれば
 心やすくも、青草の下にやすらふ。

「地」の歌いつ盡きてしもありなむや、
 寂しき冬の或る宵を沈黙もたらす
 夕凍みの折も折とて、爐のほとり、
 温もりゆけばすすどくも蟋蟀は歌ふ、
 夢ごこち聞き、恍惚ればきりぎりす
 草山かげのそのかみの聲にまぎれて。

明星

ジョン・キイツ

明星よ、汝が變らぬ操にぞわれは肖えなむ、
 寂しくも、獨り離れて夜の空に輝きわたり、
 精進の力ゆゆしく、まどろまぬ「自然」の行者、

その如も堅磐の瞭睜きて、うち目成らふは、
 現し世の人住む礎回めぐりつつ穢れ洗ふと、
 聖めき、襖ぎ被ひて勤しめる海の行ひ、
 或はまた、廣野が面を、山々のその嶺を、
 うち掩ひ装ひなせる初雪の清きながめぞ、――

さながらになほも操になほもまた變ることなく、
 麗はしく、萌たき君がふくよかの胸を枕ぎ、
 柔らげるその起伏の浪だちを常久に觸れ、
 美しかる惱ましきもて常久に瞬ぎもせで、
 なほも、なほも、君が優しき息ざしを聞きてあらなむ、
 さて夢に死ぬともよしや、わが心うつらうつらと。

「ルバイヤット」より

其一

泥沙坡とよ、巴比崙よ、花の都に住みぬとも、
 よしや酌むその杯は甘しとて、はた苦しとて、
 絶間あらせず、命の酒はうちしたみ、
 命の葉もぞ散りゆかむ、一葉一葉に。

朝毎に百千の薔薇は咲きもせめ、
 げに、さもあらめ、昨日の薔薇の影いづこ、
 初夏月は薔薇をこそ咲かせもすらめ、ヤムシイド、
 カイコバアドの尊らのみ命をすら惜しまじを。

逝くものは逝かしめよ、カイコバアドの大尊、
 カイコスル彦、何はあれ、
 丈夫ツアルも、ルスツムも誇らば誇れ、
 ハチム玉宴ひらけよ、——そも何ぞ。

畑につづける牧草の野を、いざたまへ、
 その野こえ行て沙原、そこにしも、
 王は穢多はのけじめなし、
 金の座にあぐらしたまへ、マアムウド。

歌のひと卷樹のもとに、
 美酒のもたひ、饅頭の山、
 さては汝がいつも歌ひてあらばとよ、

その沙原に、そや、沙原もまたの天國。

其二

賢し教に智慧の種子播きそめしより、
 われとわが手もおふしぬ、さていかに、
 收穫どきの足穂はと、間はばかくのみ、——
 「水のごとわれは來ぬ風のごとわれぞ逝く。」

海邊の墓

クリスチナ・ロセチ

花薔薇ここにかけず

荊棘さへ問ひも浮べず
 麥刈の穂積に寄りそひ、
 刈り疲れ、まどろむがごと、
 しかあらむ、われも朝まで。

臘月の凍てにあやかり、
 往にし日の返らぬさまに、
 かくてあるも唯一人のみ、
 他しびと忘れはつれど、
 その一人、われを偲び出づ。

宿 縁

ダンテ・ガブリエル・ロッセチ

そのかみ、ここにはありけむ、
 いつぞ、いかにと語りあへねど、
 さながらなりや、野べの草生、
 鋭き美し薫り、
 嘆く浪の音、磯めぐる燈火のかげ、

そのかみ、君をも知りけむ、
 いつの世ぞとはえもわかねども、
 誘ふ燕に、頸を、君、

廻らしたまふに、
ふと憶ひいづ、——そは昔われこそ見つれ。

そのかみ、かくてもありけむ、
うづまく「時」の過がひゆく間を、
二人が戀は、また身に添ひ、
朽ちまじと、さては、
夜も日もおなじ歡びに還れるや、いさ。

愛のまなざし

ダンテ・ガブリエル・ロッセチ

我は何時いとよく君を見もわかむ、わが愛づる君、

眞晝時、雙の瞳の神壇とたくへもすべき
君が面のまのあたりにぞ跪き、君を頼めて
知りそめし「愛」を齎きて讃め稱へありなむをりか。
或はまた彼誰時に、(ただ二人他も交へず。)
對ひゐて、ひたと口づけ、その無言忠に物言ひ、
薄明り朧々に寄り添へる愛しきみ姿、
わが魂の獨り正しく君が魂見てあらむをりか。

あはれ、わが戀ふる君はや、いつかまた君を見ぬ日の、——
現世に、げにいつしかとゆかしめる影は隠るひ、
眞清水の池にその眼の映るはぬ日の來りせば、
暗まざる「命」の丘のなだれゆくそが上にして、
辻巻でいかに噪がむ滅びぬる「望」の落葉、
えも滅び果ざる「死」のうち羽ぶく風のしまきに。

希望

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

空しかる「願ひ」は遂に空しかる「悔」と携へ、
 死の途だとり往にてぞ押並べて空しかる時、
 いとせめて忘れ難なる痛みをば何か慰め、
 はたやその忘れがたに忘れよと誰か教へむ。
 「やすらぎ」はかの隠れ水めぐり遇ふ折もあらぬか、
 請ひ禱める魂は直ちに緑なす廣野を尋めて、
 湧き出る美し命の眞清水のしぶき厭はず、
 露しと濡れたる花の護符をば手折てもあらむ？

あなあはれ着める魂は、聖經の文字を綴りて
 花瓣の咲き匂ひぬるそが中の黄金の空に、
 判き難き豊の恵みを息づみて頼めうかがふ、
 あはれ今あだし秘密の陀羅尼をばなどか求めむ、
 しかすがに一つ「望」の一つ名のそれだにあらば、
 さもあらばすべて足はむひとりその言の葉のみぞ。

「エニスの牧歌」

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

日永の夏至を水は今その物倦じ、——さりげなく、
 甕を浸せ徐に、——またさりげなく耳かしげ、
 聞てあれかし、その縁にうち啣ちつつ忍び入る、

波の嘆きを。こころせよ、青淵ふかき水の底、
 曉がたを音もなく日の熱さこそ籠りぬれ、
 今し手をおく井オロンの絃は顔へて啜り泣き、
 咽ぶや、あはれ歡樂の極みに物は悲しくて、
 稍色づける面の主ら歌ふを止めぬ、かの君の
 眼はいづらをばさ迷へる唇すべる細き笛
 吹きさし棄つる折からを、素膚の胸にうち撓ひ、
 がげるふ草の葉も涼し、さてしも斯くてあらしめよ、――
 物をな問ひそ、かの君に、かの君こそは泣きもせめ、
 かくとな告げそ何時までも有が隨にしあらしめよ、――
 「不滅」の生と語らひて口觸れあへるその命。

聖 燈

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

深き眞書をフランドルの鄙の道のべ、
 いつきたる小き籠の傍へ過ぎ、
 窺へば、懸けつらねたる晝の中に、
 聖母は御子の寝すがたを擁きたまへり。
 羊を飼へる乙女らは羊さし措き、
 晴れし日の謝恩やここにひざまづく、
 はたや日の夕もここにひざまづく、
 悲しき宿世泣きなむも、はたまたここに。

夜も更けしをり、同じ道、同じ籠の
 傍へすぎ、見ればみ燈明ほそぼそと、
 如法の闇の寂しさを照らしなづみぬ、
 しかぞ命の温み冷え、惑ひぬる時、
 ひたぶるに「信」の光をうち頼め、
 その影の、あな、あるは滅え、あるは足らはで、

宿驛にて

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

眞晝時とはなりにける、あるかなきかの
 軟風に照る日もたゆむこのきざみ、
 ながむれば鐘樓は高く牧の野に、

うねりつづける生垣の圍ひのひまを、
 軒低き鄙の家白くかつ見えつ、
 壁を背に盲の漢子凭りかかり、
 その面をば振りかへし日にぞあてたる。
 降り足掻く旅籠馬、土蹴る音の
 間をおきてたつに、日射しの歌のふし、
 歌あひのしじまのいとゞ長きかな、
 眞晝は脚を休めつつ、ひとつとつところに、
 かにかくに過ひ去ぬべきさまもなく、
 濃き空の色は濃みてうれはしく、
 暑さはたゆき夢載せて重げに蒸しぬ。

静 晝

ダンテ・ガブリエル・ロセチ

緑の草の中にしも腕を君が擽げやれば、
 を指の尖のほの透きて色づく花と擬ふかな——
 和し微笑む君が目見。散りては更に寄せ來なる
 雲の波だつ空の下に照りては陰る牧の原。
 二人巢籠るこのほとり、眼路の限りは押並べて
 黄金の花の毛茸野末の線は白銀に、
 犬芹生ふる山楂子の垣根の端に連なりぬ、
 げに静けさの眼にも見えて、漏刻のごと蕭やかに。

日 没 後

アアサア・シモンズ

日影も忍ぶ草がくれ、蜻蛉はひとりみ空より
 解けにし藍の一條の絲かとはかり懸りたる——
 「時」の廻もその如く二人が上に休らひぬ。
 ああ、打寄せむ胸と胸、これや變らぬ珍寶、
 美し契の濃やかにたとしへもなきこの刻、
 二重に合へる静けさぞ君と我との愛の歌。

堆き蹴の雲になほ残る
 葡萄むらさき赤らめるその褪め際の
 夕映の影を宿して、

静やかに和みたる海の面よ。

薄黄ばみ象牙色なす
空の上雲間にかかる蒼白き
利鎌の月と唯一つなる金の星
海のおもてをさしのぞく。

生か死か

アアサア・シモンズ

あはれ、そは死か、生か、蕭やかに、
争ひの闘きおさむる
さながらの音なひこそは、

緩やかに物うかる海の調。

森の樹々、その根を深く
穿ちぬる空洞に集ひ、つぶやける
初秋の蜜蜂のごと、
夢ごこち幽かなるその音なひよ。

あはれ、そは生か、死か、
あはれ、そは望か、はたや思ひ出か、
なべてのものを鎮め和する
とことはの海の息ざし。

海邊にて

アアサア・シモンズ

夜、ねすみの空とおほなる海、
折からを雨もしとしと降りそめて、
遠の涯、際黒みつつ、たち罩むる
霧になづさふ帆の影よ。

上げ潮に、われは聞く、この磯回をば
繞り、とほ退き絶ゆるかのその音なひを、
よよと泣き入り咽ぶらむ聲はさながら
廢れたる昔の歌のものうきしらべ。

今忍び足いつしかと夜はせまりて、
消えてゆく黒き帆のかけ、
海の線はつるあたりや、
永劫の渚の濱べ。

思ひも得ず、夢もおよばじ、
限りなき海と夜とは、
げにも鈍ぶげに甲斐もなきその極みなさ、
晝の間の望みをさへかき滅すよ。

蛇のアンダンテ

アアサア・シモンズ

節緩きアンダンテをぞ蛇が群夢に織り成す、
 鱗だつ黄と泥沼の黒とはた痘瘡の白斑、
 瞼なき青の眼に見まもるは無言に解へす
 反逆や、いとも鈍げに開きたるそのまなざしに

遠つ代の昔の祖の憤り尙も蟠り、

くちなはの永く血をひき傳へたるその怨嫉は
 悪をしも盲目ぬるに、あはれ今交ぜ織にして
 織り込める東の邦の唐草の模様は目醒め、

解けつつ伸び縮まると見れば、また踏み躪られて
 しだかれし心の臓めき膨れたる頭揺かし、
 い照りたる日より光を吸はむすと高く擡げつ、
 さてあれば、忍びやかに、徐に、色も褪せたる

絨氈の襷にたたまれゆくなべに、斑なる星と
 列ぶ環とえも判き難き曼陀羅の秘密を示し、
 かくて後膏ぎりたる醜くかる息ざしもなき
 生物は、また墜ちてゆく、鐘え、洗む不動の姿に。

猫

シヤアル・ポオドレエル

なべて世の情かはらぬ女夫づれ、また哲人は、
 愛で癡れぬ額の上に年浪のうち寄するとき、
 和やかに肥えたる猫を、——それは家の寶ぞあはれ、
 主にも似て慵げに、忠だちて、また賢しかりな。

學問の、また法悦の友どちと員に備はり、
 しかすがに静けさ求め、くら闇の隈をあさりぬ、
 ただ獨惡魔のみこそ、高慢の誇手馴らし、
 「凶ごと」の乗物としも追ひ使へ、思ひの儘に。

瞑想に耽り躡る三昧のすがたは、げにも、
 砂原に身を横へて涯もなき夢見ごここに
 甘寝する大スフィンクス、その様に面影通ふ——

さればその兩の腰より熱き爐の炎噴きあげ、
 砂かといとも細かに燦めける金の火の子ぞ、
 幽妙に見ゆるその眼の瞳をば照らし出たる。

萬法交徹

シヤアル・ポオドレエル

「自然」てふ御堂には圓き生柱立ちも列並み、

その柱いともゆゆしき幽玄の言の葉演べつ、
かくて人は、そそり誘ふ眼差に打目成へる
象徴の奥所知れざる森にしもさ迷ひぬるや。

滅えがてに打なづさへる山彦の羽しあひて、
微けくも一つの音に深々と交らふがごと、
夜に似て臘げに、日のごとも耀ひわたり、
諸の色は、匂ひは互にぞ呼びかはすなる。

多にある匂ひの中には、幼児のごとも淨らに、
葦笛の音かと華やぎ牧の野と緑なるもあり、
更にまた高ぶり、腐れ豊かなる心あらぶる、

とりどりの匂ひは無限の物事に應へ通ひぬ、――

さながらに麝香、薰陸、沒薬とはた乳香の
己がじじ歌ふにも似たり、肉の、また靈の歡喜を。

海 風

ステファン・マラルメ

肉むらの悲しきかなや、書は皆読みも果たり。
飛べよ、ただ飛べよ、わが身は見も知らぬ渡津海越えて、
青空の彼方に翔る海の鳥の性を羨む。
何かせむ思出の眼に映るへる池の鏡に
歡びのころを浸す物古りし寂びの園生も、
あはれ幾夜はたや灯かげの佗しくも、白きぞよきと
もの書かぬ紙を照して目醒めたるわが燈火も。

はたや胸に幼児ゆするわが妻も今は何せむ。
 いざ行かむ見よ大船は綱の具と帆桁ととのへ、
 濫々と浪重れる異國さし碇捲き上ぐ、
 しかすがに酷き望に苛まれ疲れしおもひも、
 おさらばと打振る巾の手招ぎになほもなづこふ。
 さてもまたこの帆柱の暴風をば誘はぬものか
 険しかる海に撓みて不吉なる風吹き起り、
 やがて船船のみならず美し鳥それも失せなむか、
 さもあらめ噫わが心よ汝は聞く水夫の船歌。

懊惱

ステファン・マラルメ

今宵われ訪ひては來ざり汝にしも勝ちてあらむと、
 なべて世の罪といふ罪を身に負へる畜類よ汝。
 はたやわが萎えし吻づけ味氣なく汝が纏れ毛の
 淫けたる佻しき暴風招ぎなむそれも思はず、
 ただ求む閨の床掩ふ垂布の手練のたくみ、
 死て世を棄つるにまさり人をかく隠れてありと、
 知りて汝が籠れる奥に夢もなき深き甘寝を。
 「悪」はしも「時」の齒よりも鋭かに魂をば嚙みて、
 荒びたる力に誇る汝のごと我をも汚す、
 しかすがに如何なる罪の牙をさへ怖れぬ心を
 汝はその石なす胸に護らひて擁きてあれど、
 われは今ひとりし寝れば死てもやあらむと戦き、
 色も失せ亡者の衣服に浮べ怯おてさまよふ。

母音

アルチュウル・ランボオ

母音 A は黒 E は白 I は赤 U は緑 O は青ぞ、
我はその事の起りの秘密をばここに明さむ、
A 烈しき臭氣の中に飛び廻り、黒毛の胸當
装ひて羽ぶき光れる大蜻蛉陰の入海。

E 天幕はた雲霧の色威も猛き氷河の投槍
素絹纏ふ眩き羅閣揺めきて立てる撒形花
I は示す紫の斑點手弱女の嗔恚に燃ゆる
微笑ひ、咯血の痛み、悲しみに淫くる泥酔

U 絲の海のこよなき息づかひ、一天の命數
家畜等の群れて遊べる牧の野の平和と、あはれ
鍊金の博士が額を刻みたる年波のすぢ。

O 峻嚴の音にあやしく高響く至上の喇叭。
諸の世と天使らを聯ね和す静寂界や、
これぞ「オメガ」、統らぐ神が堇青の眼の光。

眠

アルチュウル・ランボオ

落窪は隠れ埋みて音たかき小川の叫び、

狂亂の草の髪毛に白銀の屑は懸りて、
 そが上に日は輝ける、——高慢のこれが山かや、
 大言に惑ひ溺るる一勺の水沫の溜り。

齡若き兵卒一人、口開きて頭露はに、
 その頸をいと美はしき青芹の上に曝して、
 草の床、大空の下に長々と身を伸しながら、
 日光は降りそそげども、色蒼み眠りてぞある。

兩の脚は燈心草に突き入れて、さてその面の
 ほほ笑みは熱を病むなる稚兒のやう。彼はまどろむ、
 温かく子守せよ、小川冷めたかる汝が岸べに。

その鼻は、さあれ四方をにほはする物の香嗅がす、

片手をば胸に當てたり、ふかふかと醒めぬ眠りよ、
 さて見れば右の小脇に二つある赤き創孔。

たち返る聲々

ジャン・モレアス

たち返る聲々こそは身をゆすれ、守歌ゆすれ、
 過ぎ去りし名残をいとど懐かしみ應ふる、
 峠越し幾めぐりして滅えなづむ驢の馬の鈴、
 ——たち返る聲々こそは身をゆすれ、守歌ゆすれ。

昔をば籠めし、ふらすこ、汝はまた人を酔はすや、
 取入れし足穂の匂ひ剪みためし、羊の柔毛、

龍涎香りゅうぜんかうと麝香じやかうの肉にくむら、あらせいの唇くちびる。

——昔むかしをば籠かごめし、ふらすこ、汝なれはまた人を醉よはすや。

この冬の朝あさを、影かげさへうち寂さびれ凍こみ徹とほりぬる。

この冬の朝あさを、雲雀ひばりの囀さへつりは空そらに聞きえず。

——たち返かへる聲こゑ々々こそは身みをゆすれ、守歌まもりうたゆすれ。

花園はなぢに百合はくはくは切きられて、薔薇ばらも皆みな一つ残のこらず。

はたやまた池いけの菖蒲あやめも、その水みづの澁しぶり顔かほなる。

——昔むかしをば籠かごめし、ふらすこ、汝なれはまた人を醉よはすや。

森の木立に

ポオル・エルレエヌ

森の木立もりのもくたちに

かがよふ月つき白しろく、

枝えだごとに

嘆なげかふ息いきざしは

物ものかけよりぞ

「あはれ、わが愛あいづる君きみよ」と。

ふかぶかと

見えなす池いけの

水かがみに
映るおぼろの柳
こすゑに風は泣く、
いざや二人夢にや入らむ。

翳らにうちけぶり、
静けさのしととに
降りも来るや、
夜霧に流れて
虹の色なす月の光
あはれ、このあたら夜を。

森の木立

涯なく暗き甘寝

ホオル・エルレエヌ

涯なく暗き甘寝は
掩ひぬ、わが命のうへを、
眠れよ、なべての望
いの寝よ、煩惱も。

今われ目も盲ひぬ、
善と悪との
おぼえも全く失せぬ、
あはれ夢の世や。

奥津城ごもりに
われはさながら、
ゆすらるる搖籃ぞ、
ひそにひそかに。

車中吟

ポオル・エルレエヌ

丘牧場後に退りぬ、
緑だち、露だちつつ、
ほのかなる車燈のひかり
物の色を雑へ交して

谷あひにしじみ群だつ
樹々のこすゑ、黄金より、また
朱に移り變りゆく間を、
鳥の歌ほそぼそと聞ゆ。
秋は今、忍び足さへ
うちひそめ和みてあれば、
身は弛み深くまどろむ
ものうげの歌のしらべに。

月光

ボオル・エルレエヌ

君がこころはさながらに歌垣の庭、
 集ひ寄る假よそほひの組々は、
 笛の調に舞の振り、さてもをかしき
 異やうのいでたちながら憂はしげ。
 諧す節さへ濃やかに歌ふは、あはれ、
 かなひぬる戀よ、ままなる世の命、
 樂しき折もさりげなき心にくさや、
 歌声は月の光にまじはりぬ。

月の光は静やかに、悲しうるはし、
 枝に棲む鳥もいつしか夢ごこち、
 ほそぼそと立つ吹上は、よろこびあまり、
 神々の像をぬらして啜り泣く。

おぼろの川に

ボオル・エルレエヌ

おぼろの川にうち霧らふ木立のかげの
 あを白み滅え失せぬれば、
 まことの枝の上にしもの寂びしげに、
 山鳩は泣きかなしみぬ。

あはれ旅人、色褪せし風景を見る
 汝が面も蒼ざめたりな、
 はた溺れたる汝が望み、高きほつ枝に、
 うらぶれて嘆きもぞする。

こころのうちに泣く涙

ボオル・エルレエヌ

こころのうちに泣く涙、
 町に降り来る雨のごと、
 しのぶおもひのたゆげにも、
 など泣きわぶるわがこころ。

ああ、やはらかき雨の音、
 屋根にも、はたや小路にも、
 あはれ、すすろにわづらひて
 悩むこころに雨の歌。

なにゆゑとしもおもほえず、
 あやめもわかず泣く涙、
 誰がためにともあらなくに、
 ただわけもなき憂き嘆き。

これにうはこす悲しみの
 いづこにかある、戀ゆゑに、
 憎しみゆゑに、かくありと

知らでかなしむこのころ。

古き調

ボオル・エルレエメ

眞玉手觸れしピアノはも臚に匂ひ、
 夕影に薔薇色だちかがよへば、
 鳥の羽音とほのかにも古き調は
 節緩く、いともめでたく物憂げに、
 移り香こめてただよへるこの一室をば
 滅えがてになほも忍びてたもとほる。

ああ何故ぞ夢うつつ物をや思ふ

おもむろに揺られやすらふわがころ、
 何を求めてたゆとふやその節まわし、
 繰り返しなづさひ諧す美し音は、
 花壇のかたへいつとなく滅えてゆきけり、
 幽かにもすこし開けたる小窓より。

秋の歌

ボオル・エルレエメ

秋の井オロンの
 揺り嘆く
 咽びねの
 染み入る身にしも

たゆげなる
わづらひや。

日は果てぬあはれ、
息づまり、

色も失せ、

そのかみを偲ぶ

おもひでに

泣かれぬる。

あぢきなき風の

吹くなべに、

散りまどひ、

ここに、かしこに、

ひるがへる

われは落葉。

シヤアルロア

ボオル・エルレエヌ

かぐるき草原に

コポルトゆきかへば、

風さへ音咽び、

吹くかのそのけはひ。

荒畑うちそよぐ、
ここに何かある、

木立のこともなき
影にもこころ怯づ。

人住む家もなく、
すさめる地のはだ、
かなたに熔鑛爐
燃ゆるやあかあかと。

轟く停車場、

見つるは、そも何ぞ、
眼を遣りあやしみぬ、
いつごぞ、シヤアルロア。

拗けしその臭ひ、

こはそも何事ぞ、
などしもはためきて
どよむか、この如く。

見よ、こは生地獄、

息吹く煙にぞ

人はも汗みどろ、

鳴りたつ金屬よ。

かぐるき草原に

コボルトゆきかへば、

風さへ音咽び、

吹くかのそのけはひ。

倦怠

ボオル・エルレエヌ

我はしも衰滅の期至りぬる王の國なり、
脊も高く髪美しき夷らの押寄する見て、
なほも金のすがたに縋むは慵げの物名の歌、
そが續く行のうちに日の光たゆげに躍る。

孤獨なるたましひはしも鬱憂に疲れわづらふ、
誰か言ふ血潮の色に戦ひの松明照らすと、
あはれ心弱くしあれば打いづる晴のいくさに
勇ましく振舞はむする——とても今これを最期の

その機や失ひぬべし。しかはあれ望ましきなし、
飲みも飽きぬうち笑ひつつバチラスは禱せしとや、
飲みも飽き食しも足ひぬ今にして何をか言はむ。

ただあるは炎の中に投げ棄つるおぞの癡れ歌、
ただあるは侮り顔に振けたる奴僕の一、
ただあるは天が下なることごとを厭ふころぞ。

詩法

ボオル・エルレエヌ

何事を措きても音楽

組み揃へたる均整を先は厭へよ、
 その翹きえぎえにして
 天がけるをば何ものも遮りなせそ。

さて選べ汝が言の葉を、

俗になづさはでありもせむ語彙の中より、
 明暗のおもひこもりて
 うちまじらへる灰色の歌こそよけれ。

さればこそ晝の光も

かげり匂へばその目見のいとどめでたく、

さればこそ秋のみ空も

雲にただよふ星影に酔のこちぞ。

しらべより外は何せむ、

ただ陰のみぞ色にあらず光にあらず、

あはれしらべそは笛と角、

夢と夢とを愛で和し結び合さむ。

酷き機智警句淫けし

諸謔よりぞ汝が面をそむけてあれな、
 青の眼の天も涙ぐむ、

この鄙しかる大蒜をかなぐり棄てよ。

あはれまた能辯を捕へ、

首諦めてあれ汝が歌のほがひする日に、

娼女を追ひやるぞよき、

しかせずばかの清興は空しからむす。

押韻の悪を誰が知る、
耳あかぬ稚兒とニグロもやたたきそめたる、
まことなる諸和に比せば、
ただ噪がしき鳴物の弄びもの。

ああ音楽、いつの世までも、
さらば汝が歌は羽ばたきて清き濱べに、
新しき日と戀をもとめて、
あこがれわたる魂に伴なひゆかむ。

汝が歌は暗示を尋めよ、
また花薔薇麝香草の匂ひを吸ひて、
吹きゆする暁がたの

微風としも、——その外は徒なる文字。

秋の嘆き

ステファン・マラルメ

マリヤがわたくしを後に残して他界の星に行つてからこのかた——星といふのはどの星、オリオンか、アルテアか、さては汝、縁のメナスか——わたくしはいつも孤獨の思に耽つてゐた。一日また一日と暮らして来た、この猫と唯ひとりで。わたくしが今ひとりですといつたのは物質上の相手がなかつたからで、この猫のごときは神秘的な友、一の精霊である。それ故にながいあひだ猫と唯ひとりで暮らして来たと言つても好いだらう。そしてまた羅馬衰頹期の最後の一文人と唯ひとりで。と言ふのは、この白奴が神怪にも不可思議にも思はれぬやうになつてからは、「没落」の一語に綜べ得る一切をわたくしが愛したからである。それで一年のうちでわたくしが最も好む季節は秋た

つ直ぐ前の、あの懶い夏の終りの日、一日のうちでわたくしがそぞろ歩きする時刻をいへば、落ちなむとして猶たゆたへる日輪が、微ほろ白い壁に黄銅の光、窓わくに熔銅の光を映すをりである。恰もそれとおなじくわたくしの魂が愉樂をおぼえる文學は羅馬の末期に息絶ゆる詩歌でなくてはならぬ。だがその文學は蠻族の回生的精神の些の浸染もなく、將また初期基督教徒の散文に見る稚げな拉典を吃らぬものであるべきは素より言ふを俟たないことである。

さて、わたくしはかかる愛誦の詩歌の一篇（その臘脂の彩は若人の鮮かな頬にも勝りてわたくしを迷はす。）を讀んで、清淨な猫の柔毛にこげに指を埋めたをりしも、窓の下からバアレル・オルガンの調が懶げに沈鬱に聞えて來た。白楊のながい並木路で奏でてゐるのだ。その白楊の葉は、野邊おくりの夜、マリヤが蠟燭の火影にまもられながらその路をたどつて行つたのかた、わたくしには春の日でも陰氣らしく見える。さうだ、悲しめるものの樂器、それは本統だ。ピアノはぎらぎらする、井オロンは痛める神經に光明を齎らす。だがこのバアレル・オルガンは追憶おもひでのたそがれに切ない夢見ごこちをわたくしの胸に染み込ました。低い調子に合せてゐるのは田舎人のこころをよ

るこぼすやうな俗語の陽氣ひとぎな一節、時代おくれの取りとめもない曲だ。それでありながら、そのルフランが魂の底まで響いて、ロマンチックなバラードのやうにわたくしを泣かすのはどうしたものであらう。わたくしは緩やかにその曲を吸ひこんだ。そして折角のこの印象を亂して、その樂器がただ鳴つてゐるものでないことを感ずるのが、いかにも辛つらかつたので、わたくしは窓の外に錢を擲けてやるのを控へた。

冬のおもひ

ステファン・マラルメ

古びた索サクソニイ遊の時辰儀が神々と花との中でゆつたりと十三時を打つ。これはそもそも誰が家のかたみか、おもふにそのかみの驛遊の馬車を便に、はるばる索遊の國から送られたものであらう。

(あやしの影が色さびた窓わくのあたりにさゆらいでゐる。)

また君が威尼斯の鏡、その影は、シメエラを刻んだ、箔もおかぬ飾り縁に包まれながら、泉の水のやうに深い。この鏡の面には誰がその姿を映したか。ああ、言ふまでもなく數の手弱女がその水に美しの罪を洗つたのである。そして久しく見つむるままに素膚のまぼろしが浮びくるは定である。

「悪性のもよ、汝はよく悪性のことわけを語る。」……

(われは見る、大窓の上なる蜘蛛のゐを。)

われらが衣装箆筒は極めて古いものである。見よ、今、火影が悲しげな木地の細工を赤く染めてゐる。疲れた窓掛も昔のもの、臂懸椅子の覆ひの布も色褪せてゐる。それに壁の上の古びた彫刻と、古びた調度のたぐひ。げにも歳月を経るままに、鸚哥、青鳥までも毛づやを失つたではないか。

(高窓にゆらぐ蜘蛛のゐを見て、物をな思ひたまひそ。)

かかる物をすべて君は愛づる。われがこの年ごろを君がかたへに過して來たのはそれが爲めである。眼ざしは昨日のおもひでに充ちたるわが妹よ、わが歌のひとつに、君に適へる言の葉あらば、そは「廢れゆくものの美」ではなかつたか。新たなるものは君をよろこばさぬ。新たなるものは聲高に君を脅かして、その使用を君に迫る——活力を嗜まぬ君にとりて、かくばかり惨ましきことがあらうか。

いざたまへ、君が讀み耽れる古き日耳曼の歴史をさし措きたまへ。歴史は百年の外のもの、それが記録せる諸帝王はすでに皆崩れさせたまへるもの、さはいへ、それを閉ぢたまへ。われはこの古代絨氈の座に横はり、わが頭を鈍いろの衣の上、君がめぐみの膝に載せて、ああ、物靜かなる子よ、われは幾時を君と語り合さばや。野は冬さびて、巷は空し。いでや君とともに二人が調度のもものがたりせばや。君は氣を失つたのか。

(大窓の上に蜘蛛のぬがゆらめいてゐる。)

洪水のあと

アルチユール・ランボオ

「世界洪水の大観念」が退き去つて間もなく、野兎が一疋釣鐘草の中をさまよつて、そして祈禱を虹にあげた、蜘蛛のぬ越しに。

噫、かくれたる寶石、日の眼を早くも覗く草の花。

都會の大通には針金が縦横に張られた、小舟はまた海へ海へとひきつけられた、その海は恰度銅版畫にあるやうに、遠くほどたん／＼高まつて見えた。

青髻子の棲所では血潮が流れた、屠殺場でも、また演武場でも……血潮が流れた、そして乳の汁も。

海狸が穴を築きあげた。酒肆からは煙が颯つた。

大きな館の中、まだ濕つてゐる窓玻璃のむかふには、晴着をつけた小兒が不思議な繪本を見入つてゐた。

扉がカタリと鳴つた。田舎村の四辻だ、小兒が兩腕を振り動かして風信機のまねをした。見ると寺といふ寺の尖塔の風信機の鶏が方向も定めぬ風の一吹ごとにくる／＼廻つてゐた。

夫人が……アルプ山中にピアノを建立した。法會と、最初の聖餐禮が、法王領の十

萬の法壇で執行された。

隊商カラウジンが發つて行つた。そして「素晴らしいホテル」が極地の氷と混沌の中に建てられた。

で、月が荒野原に叫ぶ黒豹の聲を聞いた——果實園を曳き鳴らす木靴の音の牧歌をも聞いた。次いでまた董色の森に、木の芽が萌える、ユウカリスがわたくしに春だと言つた。

溢れよ、湖。泡だつ水よ、橋越えて捲けよ。森をも浸せ。黒雲の幕と天鼓の響、稲妻とはたた神。水嵩増せ、水泡捲け。海に、鬱憂メラニコリヤよ、洪水と溢れ漲れよ、再び。

大洪水の静まつてこのかた——噫！ かくれたる寶石よ、咲く花よ、——世はただ倦怠アネイのみだ！ そしてまた此土の壺に生の火を盛る魔女よ、女王よ、女王のみが知つ

てゐて、人が愚にも忘れ去つた秘密、それを女王は、盡未來際、またと論し聞かしたまはることがあらうとも思はれない。

赤の單色畫

ヨリス・カアル・ヒュイスマンス

その一室ひとむまには殷紅色の浮出模様のある石竹色の繻珍が懸つてゐた。窓掛は紫の花形を織り出した絨氈の上に、石榴石の色をした天鵝絨の大きな褶ひだを碎いて、窓といふ窓からゆつたりと垂れてゐた。壁の面にはブウシエルのサングキで描いた畫と、復興期の或る工人の手に成つた、珠玉と金銀を象眼した銅あがねの皿の幾つかが飾られてあつた。

長椅子も肘掛椅子も普通なみの椅子も、壁掛とおなじ材料の覆布かぶひがしてあつて、肉色の流蘇ぶさがさがつてゐた。そして煖爐の上には一つの蓋が載せてあつた。その蓋の色は落

日に染められた赤紫の秋の空、葡萄の酒のやうに眞赤に色づいた森を思はせる。更にまた大きな花瓶には紅躑躅と薔とジギタリスと鶏頭との大束の花が明るく輝いてゐた。

長椅子の枕には、それはあらたかな神女の一人が頭を埋めて、鳶色の髪の毛を櫻の實の赤の色をした繻珍にこすりつけて、石竹色の肌襦袢もあらはに、脚の尖で可愛らしいモロツコ皮の上覆きを弄んでゐた。女は見榮に溜息をついて、身を起し、腕を伸して、腹のふつくらとした酒の壘を手に執つて、そして渦巻形に刻んだ、つまみの華奢な小盞の中に、赤褐色の葡萄酒をたらたらと注ぎ入れた。

その途端に日が射した。すると閨房の中には眞赤な光が漲りわたり、蓋の螺旋からは強い火花の閃めきが起つて、蓋の中の靈液は恰も溶けたトバツのやうに輝き出したが、日光はなほも古代の皿の銅に當つて、眼も眩むばかりの火焰を揚げてゐる。それは全く焰と焰との光彩陸離たる紛亂である。そしてその光の中に浮き出して見える酒飲む女の姿はチマベエ、またはアンジェリコの描いた、頭に金の輪光をめぐらす聖母の像そのままであつた。

かかる赤の連奏はわたくしを痲痺させ、かかる狂ほしい高度と不可能な暴力を有する音階はわたくしを迷眩させた。わたくしは眼を閉ぢた。そして再び眼をあげた時には、そのまぶしき光彩は減してゐた。日が沈んだのである。

それと同時に赤い閨房も酒を飲む女も消え失せて、魔法のかかやきは見えなくなつた。

だが夏になつて、赤のノスタルジアが更に重くわたくしの體を壓することがある。そんな時には、日に對つて頭を擡げ、熱烈な光線の直射をも厭はずに、ぢつと眼をつぶつて、そして眼瞼の膜の下に映する眞赤な霧を見つめるのである。わたくしはその時また幻想を呼び起し、そして再び、一瞬、二瞬のひまに、かの不安な蠱惑と忘じ難き妖術を見るのである。

世界の外へ

ボオドレエル

人生は病院だ、その病院内で各の患者は彼のベッドを換へたいといふ希望に驅られてゐる。一人がとても苦しむなら火の傍で苦しみたいと思つてゐる時に、また他の一人は窓の側に行つて見たら必つと工合が宜くなるだらうと信じてゐる。

そんな譯からわたくしは何處か他の處に行つてゐたなら、いつも幸福に暮らせることと思つてゐる。この居を移すといふことはわたくしが絶えずわが靈に詢る問題の一つなのだ。

『話して呉れ、わが靈、貧寒なわが靈よ、あのリスボンに棲んだら如何なものだらう？ あすこは暖いに違ひない、だからお前は蜥蜴のやうに日當ぼつこをしてゐても好いのだ。海にも近いし、人の噂に彼處の家はマアブルで建てられてあると言ふし、』

人民が植物を甚く忌んで、樹といふ樹を引抜いて了つた。何うだらう、光明と鑽石、そしてその二つのものを映寫する流動物によつて造られた國、彼處ならお前の氣にも入らう。』

わが靈は何の答もしない。

『ぢやお前は平和を愛し、動き行く物を観るのが好きだから、あの素敵な國土、和蘭に行つて棲む氣はないか。お前が幾度か繪畫を觀ては讚嘆したあの國に棲んで見たら、多分幸福であらうと思ふ。ロツテルダムは何うだらう。お前は帆柱の林、家の戸口に碇泊した船が好きではないか。』

わが靈は無言のまゝだ。

『ではまたバダビヤ、あすこはお前により深い興味を起させよう。さうだ、我々は彼處で熱帯美にまじはる歐羅巴の心を見出すこともあらう。』

一語なし、わが靈は死を欲するのか。

『お前は自らの苦惱のみ樂しむといふ、あの深い麻痺の状態に陥つたのか。それならば、死の姿に像つて造られた土地に、二人で行つて見よう。憐れなるわが靈よ、わ』

たくしは二人の望に適ふその土地を好く知つてゐる。トルネオに旅する準備をしよう。もつと先まで行くなら行つても好い。バルチック海の一番涯まで。出来ることなら、人生からもつと遠ざからう。我々は極地に家を建てよう。其處では太陽が僅かに地球を覗くだけだ。光明と夜の緩やかな交替が變化といふものを見せず、虚無の半なる單調を齎らすのだ。我々は大暗黒の中に浴することが出来る。その間も絶えず極光が薔薇の花片を眼の前に撒きちらす、地獄の花火の反射そのままに。

わが靈は急に口を開いて賢しくも叫び出した、

「何處かへ、世界の外の何處かへ——」

孰れか眞

ボオドレエル

わたくしは大地に虚空に理想を漲らすべネヂクタを識つてゐた。人間はその眼ざし

から、大なるもの、美なるもの、光榮あるもの、更にまた我々をして不滅なるものを信ぜしめるあらゆるものに對する希望を學び得た。

だが、この神怪な子は長く命を保つには餘りに美はしかつた。わたくしが彼女を識るやうになつてから日も経たぬうちに、彼女は死んでしまつた。春が墓場に香爐を振るその日、わたくしは手づから彼女を葬つた、印度人のするやうに香ばしく朽ちざる材の棺に納めて、わたくしは手づから彼女を葬つた。

それからわたくしがまだ大切なこの寶を埋めた場所をながめてゐた時に、忽ち亡き人によく肖た少女を認めた。その少女は、不思議なヒステリカルな烈しい態度で、盛りあげたばかりの土の上を躍つてゐた。笑ひながら鋭い聲で「御覽なさいよ、わたくしはその眞真正銘のベネヂクタですわ！ わたくしは可成の働きものよ。貴郎は随分目無しで莫迦をしましたね、その罰にわたしをこのままで愛さなければならぬのですよ。」

けれども、わたくしは氣が引立つてゐたので、「否」と答へた。更にまたその拒絶を強めるために足で烈しく地を踏んだ、すると膝頭まで新墓の土の中に埋れてしまつた。

わたくしは現在、恐らくは永久かも知れない、係蹄にかかつた狼のやうに、理想の墓に囚はれたまま生き存へてゐる。

月のたまもの

ポオドレエル

氣まぐれな月が、搖籃に寐てゐるお前を窓から覗いて、ひそかに、「この兒は心からわたくしの氣に入つた」と言つた。

そして彼女は緩やかに雲の階段を踏み降りて、窓玻璃を透いて、そつと忍び入つた。してまた母たるものしとやかな慈愛から、お前をのぞき込んだ。と、お前の顔に彼女の炎が映る。お前の眼が緑に、お前の頬が甚く蒼白く見えたのは、全くその所爲だ。お前は眼をさまして彼女を見成つた、その時にお前の瞳が不思議なほど張りきつてゐた。彼女は兩の腕でお前の頸を柔らかく擁きしめた。それからといふもの、お前は

つもこの抱擁にあくかれて涙を流した。

彼女の歡喜の光の浪は部屋中に漲り渡つた、青燐のアトモスフェアのやうに、燦爛たる鴉毒のやうに。そしてこの生ある光明が物を思ひ、そしてかう言つた、——「わたくしは永遠にお前に接吻を與へる。お前はいつ迄もわたくしのやうに美しいだらう。お前はわたくしの愛するもの、わたくしを愛するものを愛するだらう。水と雲を、夜と寂寥を、廣大無邊な緑の海を、形もなく盛り上つた水を、行くに行かれぬ世界を、遇ふに遇はれぬ戀人を、不自然な草花を、人を酔はしむる香氣を、ビヤノの上にしたらなく疲れて、しやがれた好い聲で、女のやうに吸泣く小猫を。

『そしてお前はわたくしの戀人から慕はれ、わたくしに媚びる者から媚びられるだらう。お前は緑の眼を持つ人々の王妃となるだらう。わたくしが夜なかに寵愛して頸を巻いたことのある人々の王妃——その人々は矢張、海を、廣大無邊な緑の海を、形もなく盛り上つた水を、行かれぬ世界を、遇はれぬ女を、秘密な教儀の香爐のやうな盡の花を、そしてまた彼等の痴愚の表象とも見ゆる放恣で、快樂に耽ける動物を愛してゐる。』

ここだ、呪はれたる、わが愛する氣儘者よ、わたくしがお前の脚下にひさまづいて、お前の中に、あの長ろしい女神、運命の名附親、この世なるすべての亂心者の蠱惑的な保姆の姿を探り求めるのも、かうしたわけからである。

幻 覺

ボオドレエル

宴のやうな一室、淀んだ空氣が薔薇色と青に軽く抹られてゐる眞に精神的な一室。魂は、その一室のうちで、悔恨と希望の薰香に蒸された夢幻に浸つてゐる。室内には一種薄明の感じと、青と薔薇色に染められたさまざまの物の感じがある、——蝕の間の歡びの夢である。器具の姿がゆるく伸びて、ぼんやりと倦じてゐるが、これを見て、草木や金石の嗜眠的な特質が、すべての器物に賦與せられたもののやうに考へるものもあらう。

壁絨が玄妙な言葉で物を言ふ、花のやうに、天のやうに、沈みゆく星のやうに。壁上には人工を盡した贅物は影もとどめない。その純潔な夢と、剖析し難き印象とを、かの有限の藝術、實質ある藝術に較べることは、寧ろ演聖の業である。ここにはすべてのものが音楽の飽和した鮮明と、快美なる朦朧とを保つてゐる。

選りぬいた名香の濃やかなにほひが、心地よく蒸した温もりに浮んで、この一室のうちに漾つてゐる。まるで花温室に入つたやうな感觸をおぼえて、睡たげな精神がうつらうつらとなる。

すると、豊かなモスリンの衣が、牕の前、臥榻の前に流れて、そして眞白な雪の瀑布が眼のあたりにひろげられた。臥榻の上にはわが夢の主宰、幻神女が横になつてゐる。神女は何故にここに來たのか、——誰が伴れて來たのか、——どんな魔力があれば、この快樂と宴の壇上に神女を据ゑたのか。何たる事ぞ——神女既にあり、そしてわたくしはその姿を認める。

薄明のうちに閃めくその眼眸の焰。それは微妙な恐ろしげな鏡とも言へよう、その鏡には人の心を照らす氣味悪さがこもつてゐる。誤つて仰ぎ見たが最期、人々は直に

その眼の力に牽かれ、壓せられ、食ひ入られて了ふのだ。わたくしはこれまで幾度か窮めて見た。好奇の心と讚嘆とを強ゆるこの二つの黒い星。

善魔の慈悲であらう、わたくしが今かうやつて、神秘、静寂、平和、薫香に圍繞せられてゐるのは？ ああ、この祝福！ われ等が生と名づくるものは、その最も幸福な状態にあらうとも、わたくしが今親しみ、一分毎に一秒毎に味ふこの至上の生とは全く懸け離れたものである。

だが、否！ 最早分時もない、秒時もない。「時」は減えてしまつて、わが世を統べるものは「永遠」だ。悦樂の「永遠」。

戸を叩くものがある。重々しく、物凄ひ音なひが響き渡る。そしてそれがわたくしには地獄の如き夢の最中で、鶴嘴の一撃をくはされたやうに思はれた。

かと思ふと幽霊が入つて来る。それは法律を楯にわたくしを苦しめに來た執達吏でもあり、わたくしの悲みに彌が上にも、身勝手な生活の瑣事を訴へ、不仕合を泣きに來た娼女でもあり、さもなければ原稿の殘部を催促に來た編輯者の小使であるかも知れぬ。

淨樂の一室、夢の主宰、幻神女、大ルネの言に隨へばシルフアイディー——すべてそれ等の魔力も、この幽霊の殘酷な音なひで滅びてしまつた。

畏怖——わたくしは知つてゐる、知つてゐる！ 全くだ、この狗小屋、この無窮の倦怠の棲所は眞實わたくしの棲所なのだ。ここに埃まみれになつて壊れかかつた感じのない器物もあれば、火の氣もなく焚付もない燵もある。悲しげな牕には雨の滴の埃を流した痕が着いてゐて、それに塗抹した未完の原稿と、凶會日に鉛筆で線を引いた曆がある！

そしてあれほどに鋭い官能で、この世ならぬ薫香のうちに、われとわが身を酔はしてゐたが、その薫香の代りには、氣がぬけた煙草の煙の匂と、何かよくは判らぬが、氣持の悪い、物の儘えるにほひが混つてゐる。人は今ここに頽敗の氣を吸引する。

この狭い世界に、この狭くて醜惡に充ちてゐる世界に、唯一つの懐かしい物がわたくしに微笑んで呉れる——魔酔劑の罍だ、調子はづれの無氣味な戀愛。だが、戀愛といへば孰れもおなじことだ、噫、籠もあれば詐もある。

然うだ、「時」が再び戻つて來た、「時」が今專制の王國を支配する。そして厭ふべき

「過去」と共に、そのすべての悪魔的追隨者たる「記憶」や、「悔恨」や、「戦慄」や、「恐怖」や、「悲哀」や、「夢魔」や、刺すが如き諸神経がたち戻つて來た。

敢て言ふ、秒を刻む音が強く森嚴に、今、發音する、そして懸錘から滴り落ちる一々の聲が、「われは生なり、堪ゆべからず、和解すべからず」と、かう言つてゐる。

人間世界に、吉報を齎し來る使命を帯びた一秒時だにないことは判つてゐる、それは眼に言ふべからざる涙を催さしむるあの吉報を

然うだ、「時」が支配する、「時」が残酷な支配權をこれ迄とても振つて來た。そして「時」がわたくしを牡牛かなんぞのやうに、しかも二重の刺針で驅り立てる、——「ああ愚なる者よ、汝、奴僕、働き、且つ活きよ」と。

貧者の眼

ボオドレエール

噫！ わたくしは今日お前を憎む、何故だかその譯を聞いてもらいたいのだ。それをお前に説明するのも艱かしいが、お前がそれを理解することは一層艱かしいに違ひない。わたくしの考によると、お前は女の薄情を示すまたとない最も完全な手本ならだ。

二人は永の年月一緒に暮らして來た、わたくしに取つてはその年月が短いやうにも思はれた。二人が同じ思想を懷き、二つの靈が一つの靈に合するやう、相互に約束した、——つまるところ、何の新味もない夢だ、ただ萬人が夢み、一人も實現したことがない夢だ。

宵になるとお前は一寸慵いといふ風で、新道の角にある新店のカツフェのおもてに腰をおろす。その店にはまだ漆灰が散らかつてゐる。それだのに逸早くも未成の光彩を得意らしく見せびらかしてゐる。燈が點いた。そのまた瓦斯の鮮やかな氣勢かたといつたらない。恐ろしい力で白壁に眼も眩むばかりに照りつける。燦爛と輝く鏡の面、室内裝飾の縁かざりや浮出模様の金色、繫いだ獵犬に引戻される頬の圓い扨従、手馴の鷹を腕に据ゑて笑つてゐる貴女、頭に果實とパイと獲物を載せたナンフや女神、腕

一杯にシラップの小瓶、染分の氷のオペリスクを抱へたへエベやガニメエド、——何の事はない、あらゆる歴史、あらゆる神話が此處にごツちやになつて、飽食家の天國を造り出す。

道の丁度向側には四十恰好の、疲れきつた顔つきをした、髻の灰色な男が立つてゐた。一方の手で小供の手を引き、一方の腕には尪弱ひよわで歩かせられない幼児を抱へてゐる。その男は子守の役を勤めてゐたのだ、夕方の運動に小供を連れて出たのだ。みんな穢けがい着物を纏つてゐる。三個の顔は非常に眞面目だ。六つの眼は、年齢相應に違つた心を見せてはゐるが、同じ讚嘆からこの新店のカツフエをまんじりともせず見つめてゐた。

父の眼は『素敵に綺麗なこつた。世界中の金きんが此處に集つて來たのぢやないかしら』と、斯う言つた。男の子の眼はまた、『何て綺麗なことだらう、だが自分たちのやうな人間はこんな處に入れやしない』と言つた。幼兒の眼は飛び立つばかりの喜悅を口に出しては言ひ得ぬぐらゐ、その光景に眩惑されてゐたのだ。

歡樂は魂を雅みやびやかにし心を柔らぐと詩人は歌つた。その晩その歌はわたくしだけに取

つては正當だつた。この一家族の眼を讀んで感じたばかりでなく、實際渴を醫するに餘りに贅澤な盞たんを手把るのも羞かしいと思つた。お前もきつとさう思つてゐるのぢやないかと、わたくしはお前を振向いて見た。お前の眼は實に美しい、お前の眼は妙に艶なところがある、多情の影を宿して、月姫の統しよしたまふ緑の眼、その眼の中をわたくしは深く見透した。その時お前はわたくしに向つてかう言つた。『あの人達たらいけすかない、乞食おもちひの眼でぢろ／＼見えますよ。あなた給仕頭にさう言つて追拂つてくだらない』

ここだ、おたがひに理解りかいするといふことは艱かしい。愛しあつた仲でさへ、二人の思想は離れ離れであるのだ。

描かむと欲する希望

ポオドレエル

この希望を抱きながら心を苦しめるのは、人間としては不幸でもあらうが、藝術家としては幸福である。

わたくしは一人の女を描かむと欲して熱意を傾けた、その女はわたくしの眼には無類で、そして端睨すべからざるところがあつた。それは恰度旅人の夜の間に名残惜しくも見ずにしまふ美景のやうなものである。その女に遇つてからもう大分の月日が経つ。

美女である、そして美以上である。人を制する力が籠つてゐる。その女には黒の色が優つてゐるので、神秘で幽玄な點が人を牽きつける。双の眼には不可思議な色が夢見心地に動いて、その輝く、一瞥は燦爛たる一道の光、闇を劈く閃電である。

若しも人が光と幸とを放つ暗黒の星を想像し得るものならば、わたくしはその女を黒き日に比べても見よう。だがまたその女は人を直ちに夢幻境に誘ふ月である。そしてその眞實の月の力が女の身に干繫を及ぼしてゐるに違いない。月といつてもあの冷かな花妻に似てゐる牧歌の白々しい月ではなくて、暴風の夜に千断れて飛ぶ雲の絶間を、底深く懸つてゐる、嘲けるが如く、酔ふが如き凄婉な月である。純潔な人々の夢に通ふ慎ましやかな平和の月ではなくて、テツサリイの魔女の群が物妻き荒野に上を躍り狂はむが爲の咒咀によつて、天の宮居を失つた月である。

女の額には強い意志と犠牲を求むる愛の影が宿つてゐる。その鋭感な鼻が不可知と不可能の香をかいで、一體が不安な面ざしの中を、大きな口の微笑が言ふべからざる美しさを添へて輝く。白くて、紅で、熱えた口、その口を見れば、人は火山地方の山野に開く莊麗なる草花の魔力を想像する。

世間には慕へば得らるる望を男に起させる女がある。然しながらわたくしが描かむと欲するその女は力ある眼ざしの下に男をして徐々に死なんことを思はしむる性質の女である。

窓

ボオドレエル

明け放つた窓を窺く者は鎖した窓を窺く者にくらべて決して多くの事象を觀て取ることは出來ぬ。世の中に蠟燭の灯に照らされた窓くらゐ、深みがあつて、神秘めいて、豊かで、陰鬱で、或はまた燦爛たるものがまたとあらうとは思はれない。

我々が白日の下で見能ふかぎりのものは、窓玻璃のかけに行はるゝ事柄よりも常に興味の薄いものだ。あの暗い、または輝く穴の中に、人の世は活き、人の世は夢み、人の世は苦しむ。

屋根の大浪小浪のむかふに、わたくしは中年の婦を見る。皺が寄つて。貧しい、その婦はいつも何かに凭れてゐる、ついぞ外出をした例がない。その婦の額から、衣装から、容子から、殆ど空なものから、わたくしはその婦の物語を編みだてる。そして

折々はその物語をわれとわが身に語つて聞せて、ひとりて涙を垂れる。

それが憐れな老爺であつたなら、わたくしは直ぐと彼にふさはしい物語を作り出すことが出來よう。

そしてわたくしは寢床に行く、萬人の中に生きもし、苦しみもしたことを誇として。君は多分言ふだらう、「それは眞實の物語か」と。それが何だ、自己以外の現實が何であれ、唯我身に活きる方便を與へて呉れるもの、我身の存在と存在の價值を感じさせるものならば、何でも好いではないか。

的中

ボオドレエル

馬車が森の中を通過する時、彼は馭者に射的場の方へ遣れと命じた、暇つぶしに二三發試めしたいと思つたので。「時」といふ怪物を殺すことは人間の最も普通で正當な

る責務ではあるまいか。——さればこそ彼は崇むべくも、また憎むべき愛妻の手を華々しく握つたのである。この不思議な女は彼が爲にもろもろの樂の種子でもあれば、また苦の種子でもある。想ふにまたこの男の天才の大部分もこの女の資であらう。數彈は標的を逸れた、その一發は空際遙かに飛び去つたので、夫の技倆の拙さを罵つて、無性に笑ひこける妻を顧みながら、「それではあの右寄りの、鼻づらを天に向けて高慢な様子をした人形をだ、よしか、可愛いエンゼル、それをお前だと假りに想つて見よう」と、男は言つた。

彼は兩眼を閉ぢて、引金を引いた。標的の人形は見事に首が落ちた。

そこで、彼は彼が爲めには缺くべからざる、そして無情なる美神、崇むべくも、また憎むべき愛妻の方へ向き直つて、前屈みになつて、その手を恭々しく接吻して、そして言ひ添へた、「可愛いエンゼル、己れの技倆は全くお前のお蔭だ。」

夢 想

ポオドレエル

廣い灰色の空の下、草も生えぬ茫漠たる埃の野原の上、そして其處には蕁麻や荆棘の類さへ見ることの出来ぬ、そんな野原を地面に屈んで歩いてゆく大勢の人々にわたくしは行遇つた。

その人たちは銘々恰度麥粉か石炭の袋、でなければ羅馬歩兵の武装のやうに重たい、素晴らしいシメエラを背負つてゐた。

だが其怪物は單に目方のかゝる重荷ではなくて、彌が上にも力強く逞しい筋肉で人々を掩ひかぶせ、壓しつけてゐたのだ。そして二の大きな鉤爪でその人々の胸のあたりを攫んでゐる。そのまた不思議な形をした怪物の頭が、その人の額の上に乗るか、つてゐる工合といつたら、宛ら昔の戦士が敵を一倍恐怖させる目的で着冠つたおそろ

しげな兜のやうに見えた。

わたくしはその一人になぜ皆がさうやつて行くのかと訊いて見た。するとその人は、自分は何事も知らぬ、それは自分だけではなくて他の人たちも知らないのだ。けれども斯うやつて止めても止められぬ希望に驅られて歩いてゆく以上、何處かに向つて行くことは明らかだと、かう答へた。

奇妙なことには、その旅人の誰彼を問はず、頸にもたれ背を劈く残酷な畜生シメエラに就いては別段氣にとめてゐる様子もなかつた。これも我身の血を分けたものだと思つてゐると、誰かその中の一人が言つてゐた。その人たちの生眞面目な、そして疲れた顔には失望の影といつたら少しも現はれてゐなかつた。陰鬱な空の穹窿の下、その空とおなじく荒れ果てた野原の埃の中をたどつて、永劫希望に咀はれた者の諦めた面色をして、彼等は前へ前へと進んで行つた。

そしてその行列はわたくしを通り越して、地平のあなた、この地球の圓い表面が好奇の人の眼からすべり落ちるあたりの雰圍氣の中へ消えて了つた。

その當座わたくしはこの深秘を窮めようと懸命に試みて見たが、直に不可抗の『無

關心』がわたくしを捕へて、そしてわたくしはその爲めに恰度あの人々が身を苛むシメエラに苦しめられるとおなじやうに重たい壓迫を感じた。

ぎやまん賣

ボオドレエル

世間には考へてばかりゐて實行といふことに反感をもつてゐる人々がある。えてさういふ人々が、不圖した場合に、不思議な説明すべからざる感動から、自分でも不能と思はれるくらい迅速に活動することがある。よく自分の家に何か新奇な不安が待つてゐるせぬかと危ぶみながら、戸を開けて入るのがたまらなく恐しくて、戸口をうるつてゐるとか、半月も手紙を開封せずにほつとくとか、或はまた一年も前から必要に迫られてゐた旅行を、半歳も考へぬいた擧句やつと決意するとかいふ人たちが、いざとなると弓弦から矢が飛び出すやうな勢で實行に取かかることがある。

さういつたやうな氣不精で放縱な性^かのものに、そも／＼何處からそんな急劇な狂氣のやうな力が襲つて來るのか、また極めて簡單で必要な事件をすら處理することの出來ぬものが、時としては非常に大膽になつて、飛んでもないことや危険極まることを何うして實行するのかといふことは、萬事を知りぬいたと廣言する小説家も知らなければ、醫者も知らないのである。

最も無邪氣な夢想家であつたわたくしの友人の一人が、或時森に火をつけたことがある。彼が自由に據れば、普通世間で言ふ通りにそんなに容易^{たやす}く森が燃えたつかといふ實驗を爲たのださうで、十度遣り損つて、十一度目にやつと成功したのである。

別な友人は、冗談に、期待の快樂を得んが爲めに、全く譯もなく、しやうことなしの氣儘から、運命といふものを見もし、知りもし、誘ひ出しもせんとする目的で、火の樽の側で葉巻に火を點けた。この種の努力は畢竟倦怠と狂想とから生ずるのである。そして一般に、前にも言つた通り、極めて氣不精な夢想家によつて明らかに立證せられるのである。

もう一つかういふのがある。人前では眼を伏せて顔も擧げえぬはにかみ屋で、カ

フェに入るにも、芝居の切符賣場の前を通るにも、死ぬやうな思をしてゐた人がある。實際彼の眼には切符賣がミノス、イイカス、ラダマンサス諸神の威儀を具へてゐるやうに映するのである。それ程臆病な彼も、何うかすると街^{まち}で出會つた老人の頸にすりついて、びつくりした群衆の面前でその老人を熱心にかき抱くことがある。どうしてだらう？ その老人の容貌が不可抗力で彼を引きつけたが爲め——その爲めであらうか。さうかも知れない。併し彼自身でも一切夢中であつたと想像した方が正當である。

わたくしにも一度ならずさういふことがあつた。何だか心の中で絶叫の聲がする。かういふ時人は魔がさして來たなと感づくのであるが、それと共にやくもその犠牲になつて了つてゐる。そして悪魔は我々をして極めて異常な願望の無智な共犯者たらしめようとするのである。ある朝のこと、わたくしは起きには起きたが、氣分が變に重くて非常に悲しくて、倦み疲れてゐる中で、不圖、ある大事業、光彩ある活動が見たくなつた。そしてそれから、わたくしはとうとう窓を明けた。

(斷つて置きたいのは、或る種の人々に起るこの神秘の精神は努力聯想の結果ではな

くて、寧ろ偶然の天啓とでも言ふべきもの、或は感情の緊張とも言へようか、さもな
くば醫師がヒステリイと呼ぶ心的状態、または醫師よりも稍深く考察する人々の悪魔
的と呼び做す性質のものであらう。すべて我々をして不可抗的に危険な放肆な行爲に
陥らしむる心的状態である。

わたくしが街の中で最初に認めたのは一人のぎやまん賣である。その調子はづれの
鏡い叫び聲が、巴里の重く鈍い空気を透してわたくしの耳元まで上つて來た。これを
外にしては、彼に對して急劇に壓制的な憎惡の念を催す譯とは、別段これといつて
なかつたのである。

『おい、其處だ。』とわたくしは大聲で言つて、わたくしの部屋まで來るやうに彼に命
じた。わたくしは彼がやつて來る間、心中私かに興がつてゐたといふのは、わたくし
の部屋は六階目であり、階段は狭いと來てゐるから、登るに困難であらうし、あつち
の隅こつちの隅に荷をぶつつけて、やにつこい商品に疵をつけるだらうと想像したか
らである。

彼はとうとう遣つて來た。わたくしはいろ／＼と蓋をいぢくり散らした學句、「何、

色の附いた蓋は持ち合せがありません？ 薔薇色や赤や青の蓋、魔法の蓋、極樂の
蓋？ お前は慮外な奴だ。人生の美を思はせるやうな蓋の一つも持たないで、この貧
乏町を振れ歩いて行くなんて厚かましいぢやないか。」わたくしはかう言つてやつて、
手荒く彼を衝きのけた。すると彼はよろ／＼しながら階段を下りて行つた。

わたくしはそれからバルコンに出て行つて、小さな花瓶を手にとつて、ぎやまん賣
が下の出口に現はれるところを見計つて、上から垂直に件の武器を彼の荷の端に落し
てやつた。すると荷は激動を受けてひっくり返り、彼の振れ賣りの身上はすつかり粉
微塵になつて了つた。その音といつたら恰も電火に打たれた水晶殿が碎け散るやうな
響である。この馬鹿げたことに狂氣になつて、わたくしは彼の背に「人生の美、人生
の美」といふ言葉を激しく浴せかけてやつた。

かかる神経質的な愉樂は危険を伴ふものである。それが爲めに人はしば／＼高價を
拂はなければならぬ。けれども一瞬の間に悅樂の永遠を求め人にとつて、責罰の
永遠が抑も何であらう？

有明詩集自註

この詩集には長短併せて二百四十九篇を収めた。その中に五十篇の譯詩が含まつてゐる。これがわたくしの詩作に於ける二十餘年間の生涯の收穫である。即ちわたくしに取つては、善からうと惡からうと、如何ともなすべからざるものである。それであるから、これはまたわたくしの心血そのものである。

本集の順序は新しきものを前にした。

「自畫像」は本集を編むに當つて始めて蒐集した。一度雑誌に出したなりで、これまで書物として刊行する機會を得なかつたものである。「有明集」刊行後、即ち明治四十一年より大正四年五月に至る凡八年間の作を収めておいた。

「豹の血しほ」は舊の「有明集」の改題である。題名が本集と混同する虞があつたから止むなく改めたのである。

「有明集」及びその以前の集の刊行年月を左に記しておく。

「有明集」——明治四十一年一月。

「春鳥集」——同三十八年十月。

「獨絃哀歌」——同三十六年五月。

「草わかば」——同三十五年一月。

舊集はそのまま本集に採用してはない。新たに多少類別するところがあつて、それぞれに標目を掲げた。随つて目次の順序も變つてゐる。内容に至つては殆ど全篇に亘つて改削を施した。その當時あまりに表現に急であつたが爲め、晦澁、混雜、矛盾等の缺陷を生じ、詩として自然の調律を失はむとし、また既に失へるところがあつた。わたくしは主としてその缺陷を補つておいた。それが爲にわたくしは全力を竭して昨年夏以來半歳の時日を費した。一句一行ことごとく仔細に點檢せぬものはない。宛も慈母が病兒に對する愛念を以てこれに従事した。併しながらこれには限度がある。表面の疾患を除いても、病兒は矢張根本的に病兒であつたかも知れない。それ故にわたくしは病兒は病兒だけの泣聲を自然の調律に上すことを欲したので、今日の思想を以て一分をも加ふことは決してあるべからざることとなしたのである。わたくしは自然の約束に就て深く經驗するところがあつた。愛念が強ければ強いほど、自然の約束は厳しいのである。

翻譯は「獨絃哀歌」以後の集には三四篇づつ載せておいたが、それ等は今度大半改譯した。それに「有明集」以後の分を加へ、更に本集目次中ポオドレエルの「猫」よりランボオの「眠」に至る

までの六篇と、エルレエヌの「おぼろの川」より「詩法」までの七篇とを、新たに譯して添へておいた。

初め翻譯を載せるに就て、わたくしの如き無學のものには全く埒もない業くれであるとも思はぬでもなかつたが、粗漏は粗漏のままに、わたくしの創作の一部を成すものとして矢張集めておくこととした。愛誦した各篇も原文のままに差措く時は單に外國語としての價值より外には何物もない。併しそれを愛誦したところに、その詩は國語的に創作せられねばならぬ衝動をわたくしに與ふるものである。それ故に翻譯は善惡ともに創作であらうと思ふ。

自畫像

前にも述べた如く、ここに集めた諸作は「有明集」刊行直後より大正四年三月「マンガラ」發行を経て、その五月に至るまで、凡八年間に亘つてゐる。その期間には新詩壇に於て少からぬ動搖を生じ、一面詩論の盛んであつた時代である。新主張の旗幟は詩歌の解放といふことであつた。恰もこの時「有明集」が出た。自然「有明集」は新主張に對する牲に上げられた觀を呈した。今思ふと「有明集」は不思議にも時代の思想の轉機の上に立たされたものである。わたくしはそれを悔むものは決してない。わたくしは今日その打撃の恩を寧ろ感謝せねばならぬと思つてゐるのであるが、そ

の當時わたくしは生死の大患に罹り、その後五六年に亘つて、肉體の衰弱と共に精神上には自暴自棄の苦惱を経験したのである。兎にも角にも詩歌解放運動は次第に勢を増した。それは最初相馬御風氏の議論や川路柳虹氏の創作に依つて端を發したので、殊に川路氏の口語詩は河井醉茗氏が出てゐられた「詩人」誌上で發表されたのであるが、強烈な外光の下で種々雑多な色と音とを交錯反映する港の印象的の描寫などを見て、わたくしは確かに新藝術が生れたと思つた。調律の拘束のある（日本語に於て果して拘束といはるべきほどのものがあらうか）詩歌に對して、その缺點を（缺點は寧ろ詩人の方にあるのであらう）補足するものだと思つた。併しその當時も今日も、自由詩の第一の強味は口語を用ゐるといふ點にあるのであらう。さうした影響はわたくしにも漸く現はれて來た。今ここに「自畫像」の標題の下に集めた八年間の所作はわたくしの肉體の衰弱と心の動搖と懊惱とを示すもののみである。

「出現」——この中「出現の歌」を除いて、他は大正三年の作である。

「光明涌出」——本詩集中最も新しき創作であつて、「あれ野」一篇を除き「出現の歌」を加へた七篇は大正四年三月に刊行した「マンガラ」第一輯に載せたものである。「マンガラ」は河井醉茗、澤村胡夷兩氏の主唱で、わたくしが表面責任者の地位に立たせられてゐたものであつたが、第一輯だけ發行して後は續かなかつた。これは明治三十九年に野口米次郎氏が主幹で「アヤメ會」を組織し、

英米の新詩人をも聯ねて「アヤメ草」「トヨハタグモ」を刊行した計畫と大略同様の動機から成り立つたものである。わたくしはその「マンガラ」第一輯に序文を書いた。「光明涌出觀」とでも概括していふべきものであらう。それはここに掲げた詩の注脚の如きものであつた。わたくしは更に精神的孤獨の中に苦しまざるを得なかつた。

「あれ野」は同年五月の作である。

「感覺の整調」——「見えぬ花の匂ひ」、「鸚鵡」、「途上」、「破滅」、「食卓」は明治四十一、二年の作、「夜曲」は同四十四年、其他は大正一、二年に亘つた作である。

「狂想」には今度「都會的印象」の副題を附して、多少内容の表現の意義を限定し和らげておいた。併しそれを單に外面的に解釋するやうの方便として見られては困るのである。

「雪景」、「或る蒸熱き日の感覺的效果」、「冬の出園情調」、「麻痺と誘惑」、「冷血と倦怠」は東京市の西郊に居住してゐたをりの紀念ともなすべき作である。

わたくしの信ずるところに述べれば、詩は直接の事惑（内外共に云ふ）の刺戟を介して惠まらるる暗示、即ち感覺の綜合整調そのものの開展である。換言すれば自然の生命の感覺的表現である。感覺的といつてもそれが直接の刺戟そのものに限らるる以上矢張外面的のものとならう。兎に角人間の心理状態は複雑である。聯想は錯綜する、記憶も雜多である、享樂、苦惱、悔恨、昂奮、衰頹、誘

惑、耽溺等の無始の煩惱の積集薰染がある。併しながらこれ等の経験もそれが個人的である限りに於て外面的であるが、一度或る衝動を受くることに依つて測らすも暗示世界の空氣に浸染する時、前に個人的、主觀的に過ぎなかつた諸經驗もここに始めて律動的に喚起開展せられて客觀化されるのである。わたくしはかかる状態を感覺の綜合整調といふのである。これが藝術上暗示の内容である。或はこれを心理的に自然の生命の内容の表現といつても好いが、わたくしはそれが爲めに、信の純一性の中に藝術を没入させることに於て、藝術を極端に單純化することは何うであらうと思ふ。自然の一念に喚起開展される一團の經驗内容はそれみづからに於て或る纏つた律動を選択するものであらうから、これは矢張相應の量をもつた一篇の中に纏めらるべきものであらうと思ふ。ここに藝術の内部單純化に於ける複雑性が肯定されるべきものであらうと思ふ。

「或る蒸熱き日の感覺的効果」に於ける一煙突はわたくしに取つて忘れることの出来ぬさまざまの印象を残した。わたくしはその煙突が麥畑の傾斜面の上に直立して赤く落日に照らされた光景の美に就てつくづくと考へたことがある。または老母や親しきものの死をそこに弔つて、幾度となく痛切なる感情を抱いたこともある。併しながら單に視覚から起る美感はこれをそのまま詩に翻譯するは困難であるといふよりも、寧ろ不可能であり、それに依つて繪畫と詩歌とが補足的關係にあることも善く判つたが、それかといつて痛切なる感情のみでもわたくしの如き煩惱の深きものには、そ

れが必しも表現を詩に與ふる動機とはならず、却てただわけもなく何事もなきやうなる蒸熱き日に於て、不思議にも暗示がめぐまれたのである。そして直ちに感覺の綜合世界の開展に隨つて一念のエフェクトを得た。それがこの詩である。

「羈旅小景」——「待宵草」と「吳須のほひ」は共に明治四十一年四月より五月にかけて九州に旅したをりの作で、その歸途宮島に立寄つた。「赤き破滅」は明治四十二年二月藤村、花袋、夢想庵諸氏と共に天城越えをした時の印象の一つ。「印象」は明治四十一年八月再び甲州を通過して甲府盆地の展望の美觀に魅せられ、その紀念にもと書きとどめておいたもの。「旅」は明治四十年七月未曾旅中の情景。詩中「終りの宿」とあるに奈良井の古驛のことなどが思ひ浮べられる。

「病熱と錯覺」——四篇とも明治四十一年の作。前年の秋にわたくしはひどく扁桃腺を腫らしたことがあつた。ここに歌つてあるのは皆その時のことである。扁桃腺は一週日の後には癒えた。わたくしはその後「有明集」を出す準備に取りかかつたが、十二月中旬に至り、「有明集」の校正半ばにしてまた病に臥した。今度は大患であつて、翌年の三月まで床に就いてゐた。こんなに長くわづらつたのは、少年時に脚氣にかかり生死の境にさまよつたことがあつたが、今度で二度である。はじめは矢張脚氣とばかり思つて半月ぐらゐそのままに放擲しておいたのが、ひどく祟つて來たのである。病氣は急性腎臓炎であつた。三月下旬に漸く床上げをして、それから四月下旬に前に述べたと

ほり九州に旅行し、五月のすゑに宮島京都に立寄つて歸宅した。この旅行は大患後としては少しく無理であつた。さういふところに近因があつたものか、わたくしは間もなく頑固な神經衰弱症に冒されるやうになつた。「感覺の整調」中の「破滅」「食卓」等は勿論象徵主義の綜合情調に依つたものではあるが、實際上の衰頹的壓迫觀念が、その刺戟となつたものである。

「哀愁のしらべ」——すべて明治四十一、二年の作である。「雨もよひ」は赤羽橋附近の情景から暗示された。「古きかなしみ」の露盤の鏽には丸山の塔が想ひ起される。

「初心鈔」——明治四十四年の作。多少小歌などの調を加味して試みたものであるが、その材料としては、その前年の春もまだ浅いころ、花袋、空穂、孤雁、木城の諸氏と共に、奈良、京都を歴遊したことがあり、その時の印象が最も適してゐたので、それを用ひてみた。其他は追々に作り足したのである。「北國」は信州澁温泉に行く途中、夜間瀬川を渡つて一茶で知られた湯田中に入るのであるが、その川の堤に柳の老樹が多かつた、それが旅の哀愁をそそつた、ただそれだけのことが忘れかねての作である。

「よもぎのほひ」は昨年十二月弘田龍太郎氏の手依つて作曲された。

豹の血しほ(有明集)

「茉莉花」——もと「豹の血」と題しておいたのであるが、それを今度集の名に譲つたがため改めたのである。

「朱のまだら」——「朱のまだら」の中に書いてあるアカシヤといふ植物を全く誰も注意しないが中々好い風情のあるものである。明治何年ごろのことか、ゴムの木と間違つて、はじめて東京に輸入されてから、よく見附内などにごたごたと植ゑてあつた。それが何時の間にか引抜かれてしまつた。帝劇の前の堀端などにはまだ少し残つてゐるかも知れぬ。

「淨妙華」は少しく調子がちがつて能辯に過ぎるやうではあるが、この詩は直ちに昨年歿した中澤臨川氏を追想せしめる。その當時、この若い工學士はわたくしを何かの序に丸の内の變壓所(?)に案内した。その頃はあの邊一面に荒野の如き有様であつた。そのたゞ中に赤煉瓦の建物があつた。多分帝劇の後方、東京日々新聞社の近傍であつたらうと思ふ。ブンブンと音して廻轉する電動機やら壁上にうねる導線に就て説明を聞いたことがあつた。このをりの感銘に基づいて歌つたものである。

「夏の歌」——わたくしはかういふやうに蜥蜴が雑草の根を走りつつ乾いた土をこぼす土手の下で生れたのである。中庭の小さな池の縁には形ばかりの石組があつてクチナシの花が毎年咲いた。そこにあつた麴町の家に、わたくしは生れ落ちてから三十年間住んでゐたのである。悲しかつた幼年

時も、愛慾に燃えた青年時も。

「信樂」——これは明治三十八年十二月に老父を失つた後に書いたものである。わたくしは少年時代に一度宗教に對する熱意をおぼえたことがある。人に見られるのを厭つて、懷の中で合掌しながら途を歩いた。今思へば不思議の心狀であつた。そしてこの詩を雑誌に出した當時、僧籍にある一青年がわざわざわたくしを尋ねて來られた。その青年からわたくしは梵網菩薩戒經を贈られた。讀誦に便した小形の折本である。その後その青年には一度も遇ふ機會がなかつたが、心づくしの經本は常に手近の書架に挟んである。

「おもひで」——野口米次郎氏の依囀で作つたものである。この一篇は十時潔氏の手につけて作曲され、音樂學校の演奏會で歌はれた。二三年前のことであつたが、わたくしに取つては全く思ひもかけぬことであつた。

「鐘は鳴り出づ」——明治六年十二月に三縁山増上寺が炎上した。その頃は教界に波瀾が捲き起つてゐた時代である。わたくしは老父から増上寺が焼け落ちる光景を度々聞かされて、耳に熟してゐた。それがこの詩の素材となつたのである。

「不安」

「孤獨」——これは前にも述べたことのあるわたくしの生れた廻明の家の隣地に棕櫚が五六本高々

と生ひたつてゐた。夕榮の雲の色と金星の光とは、わたくしの記憶の圖の中では、いつもその棕櫚を前景として見たされる。幼年のをりの印象は何といつても強いものである。そしてまた佗びしくも寂びしいものである。

「大鋸」——深川の木場で感得した幻覺である。あすこには水と材木と肉むらのにほひの交響樂がある。

春鳥集

「花のをぶえ」

「公孫樹」——公孫樹はわたくしの愛好する樹木の一つである。

「朝なり」——江戸橋から荒布橋、あの邊を綜合した情調に依つた。

「誰かは心伏せざる」——明治三十七、八年戦役に於ける紀念となつた作である。壹岐殿坂から下つて來ると、正面に機械の響と蒸氣と黒煙と火光とでいきり立つた砲兵工廠が見える。そのをりの名狀すべからざる感情はこの詩の題名の如くであつた。當時戦争を題材としたものが他に兩三篇あつたが、今は手許に「コサツク」一篇だけが残つてゐる。

ひんがしに

そそぐアムウルは

新妻の

よきや君、コサク。

あら牧の

ステフ野のうまれ、

槍の穂の

實りいかに、コサク。

百年の

うまき酒、けふし

君が飲む

うたげなり、コサク。

たたかひは、

これぞ紅玉の

さかづきと

見じや君、コサク。

たたかひは

末路か、死か、さあれ

いなまじな、

ツアルの臣、コサク。

「渴望」

「技藝のうたげ」——もとの集では「琴天會に寄す」といふ題になつてゐる。明治三十六年十月の作である。琴天會といふのは洋畫家の會合であり、琴平と天神の縁日を會日と定めるといふところから名づけたので、かういふやうに一風變つたところなども、この會合の牛耳をとつてをられた岩村透氏の風流のすさびであつた。岩村氏は既に故人となつた。あの快瀾で親しみのある皮肉な談話

の調子は最早聞くことが出来なくなつた。わたくしは岩村氏とはその會合の催された前に三宅克巳氏から紹介されてゐたのである。それはロセチ研究の書物の借覽を三宅氏を通じて申入れたのがそもその縁で、岩村氏の芋洗坂下の邸を數週間うちつづけて、辨當持參で通ひつめたことがあつた。明治三十五年の師走のことであつたかとも思ふが、わたくしは毎日氏の書齋でロセチに浮身を鑿してゐたのである。わたくしは第一に氏の藏書の豊富なことに一驚を喫した。ロセチ關係の書物だけでも手近に二十冊ぐらゐはあつたらう。そして岩村氏は藏書家の物堅さから書物は一切門外不出であつた。わたくしが岩村氏の書齋に通ひつめたのはそれが爲めであつた。

「海の幸」——故友青木繁氏の未完成の畫である。この畫は明治三十七年白馬會展覽會に出品された。鉛を手にし大鯨を肩にして瀕邊を進みゆく十人の裸體から組立てられた裝飾風の畫面である。青い海の水平線が裸體の人物の間から低く見える。背地はすべて金で塗りつぶす計畫であつた。

「天平の面影」——藤島武二氏の畫幀である。もと「獨絃哀歌」中に收めた一篇であるが、畫に寄する作としてここに纏めてたのである。この畫も裝飾風で、天平時代の風俗をした若い女が篋を擁いて立てゐる。背後には紫の花をつけた一本の桐の木がある。これは多分明治三十六年の白馬會展覽會に出品されたことと思ふ。

「日のおちぼ」

「夏まつり」——山王祭である。東京市の文化的設備が漸く進んで来て、山の手の町にも、電車の軌條が敷けるといふことに決つたので、山王祭としてはこれを名残りといふ氏子の意氣組であつた。明治三十六年六月のことである。實際それは夏祭の氣分をそそる最後の賑ひであつた。

「傳奇的構想」——これはむしろ「傳説の心理的構想」といふべきであつたらう。併し標題としては長きに過ぎるので止めた。「人魚の海」「さび斧」の二篇はもと「有明集」にかかげたものであるが、今ここに一纏めにしておくことを便とした。これ等の諸篇でわたくしの狙つたところは、傳説の美辭的再現ではなく、その心理的開展である。ロセチのバラッドの優れた點は全くそこにあつた。さういふわけから、ロセチに私淑してゐたわたくしが、その影響を蒙つたのは免かるべからざることであつた。それにも拘らず、わたくしは國語の試練の上で多少の誇を持つてゐる。それは國語の使用上代名詞の不自由なること、隨つて會話の呼吸をややもすれば障ふること——それ等の缺點を律動に活かしてゆくといふことは思つたより困難なものである。これが叙事詩風のものならばさまでのこともなからうが、端的の心理的分析を短い詩句の重疊の上に試みるのは決して容易ではない。併しかういふ風の詩を作る人は最早あるまいし、また傳説の心理的構想は歌劇風のものとして専ら表現さるべきものであらう。

「姫が曲」——この曲は英國の宣教師で、ギルといふ人の書いた「南太平洋諸島の神話及歌謠」中

の「泉の精」と題した一章の傳説を素材としたものである。巖谷小波氏が「世界お伽話」の材料を集められた中にこの書があつた。それをわたくしがまた借覽したのである。然るにかの小泉八雲氏は早くも例の美文でこの一章を書直して、世界の奇譚を丹念に物語る書物の中に收めてある。そのことをわたくしは後になつて知つて、不思議な暗合に驚いた。その傳説といふのはかうである。はじめ月夜に遊ぶ水精の女を、そのところの酋長が人をして捕へしめ、これを寵愛した。女が懷孕した時に、女は「この腹を剖きて胎兒を出し、わが亡骸は土に埋めて呉れ」といつて嘆き悲しんだが、女は既にして一兒を産み落した。女はまた云く、「人界に来て子を産めば、水底の國の母は悉く死ぬであらう」と。その後酋長は女の手を執りて共に泉の底に下りゆかんとしたが、人間の悲しき約束として水底にたどりつくことは出来なかつた。酋長は遂に女に別れたといふのがその荒筋である。

「さび斧」——一曲の大筋は何等の傳説に據つたといふのではないが、鏡の説話とか樹木を咀ふ習俗とかはすべて劇的象徴として取扱つたものである。その他眞珠や橘の實などもおなじである。

「人魚の海」——西鶴の「武道傳來記」の中の一章に據つたものである。人魚の海と熟した言葉も西鶴の造句そのままを用ゐたが、人魚の出現するをりの形容などもまた一々西鶴の言葉に據つた。

獨絃哀歌

「煩惱」——新詩壇で小曲(十四行詩)をはじめて試みたのは薄田泣菫氏であつたらう。その作は「暮笛集」に載せてある。わたくしはまた別の詩格を用ゐてみた。四七六を一行とする調律は讚美歌の中から拾ひあげて來たものである。勿論讚美歌では他の調律と雜へてあつたものを、今ここに獨立させてみたのである。

「紫藍の葉」

「そのねがひ」、「わがこころ」、「わかきいのち」の諸篇はもと「草わかば」に收めてあつた作から斷章して改題を施したものである。「自然」はそれと同時に思ひ浮べたもので、これは新作であるが、しばらくここに纏めておく。

「佐太大神」——「出雲風土記」に據つたものであるが、これを太陽神話としてみても、異色のある傳であらう。

「新鶯曲」——これもまた「出雲風土記」の法吉郷の條下に於ける簡單なる記事に據つたものである。その文には「神魂命の御子、宇武賀比比賣命、法吉の鳥と化りて飛び度り、此處に靜まり坐ます、故に法吉と云ふ」とあるだけである。スキンパアの「イナラス」などを耽讀してゐたをりの

草わかば

「黎明」

「日神頌歌」——この詩などが最も早い作であらう。明治三十二、三年のころの讀賣新聞の新年附録に、紅葉山人の手を経て出したやうにおぼえてゐる。わたくしがそもそも文壇に乗り出すことの出来るやうになつたのは、すべて尾崎氏の庇護があつたからである。そのころわたくしは古典をしきりに讀んでゐた。羽槌雄神が文布織りますといふのも「古語拾遺」から採つて用ひたのである。「可憐小汀」——明治二十八年の春、バイロンの「チャイルド・ハロルドの歴遊詩」を懐にしながら、はじめて旅に出て、九州に行つたをり、瀬戸内海を尾道から船で渡つた。詩想の暗示はその時得たものである。わたくしに取つては最も記念すべき作であるが、これが現在のやうな形を取つたのは明治三十三年ごろのことであつたらう。その日の鷗のみちびきはわたくしをして遂に詩人たらしめた。そして現世に於て甚だ苦しみ悩むものたらしめた。わたくしはこの流浪の鳥に對して追想する懐しさを持つてゐると共に、多少の怨恨を抱かすには居られぬのもまたその爲めである。「かすかに胸に」——ここに後年の「さび斧」の萌芽がある。わたくしは今度詩集を整理するに當

つて始めて氣が附いた。

「新譜」

「菱の實探るは誰が子ぞや」——九州の情景を歌つたもの。探菱は佐賀の郊外などでは年中行事の一つともなるべきものである。

散文詩と翻譯

「暗示の森」——この作で「魂の法會」と「世相」が最も早きころの作で、それは多分明治三十八年であつたらう。「狐の剃刀」は同四十三年、「驟雨」と「脚痕」とは同四十四年、その他の三篇は大正二年の作にかかる。

「常世鈔」

「述懐」——ランドルが七十五歳生誕日の翌日一人の女友に贈つたものだといふことである。

「明星」——キイツの詩中でわたくしの最も愛誦するもの。

「宿縁」——ロセチの傑作の一つであらう。原題は「閃光」とでも直譯すべきであらうが、感覺の綜合的暗示が倏忽として起り、その瞬間に宿縁を認めるといふのである。これは神秘的としてよく評さるのであるが、ロセチの作詩の態度から推しても、これは寧ろ心理的といふべきであらう。

後の象徴詩に通すべき作である。

「愛のまなざし」、「希望」、「静畫」はロセチが有名な小曲集「生命の家」から抜いたもの、その中「静畫」は島崎藤村氏の囑に依つて譯出した。同氏の小説「春」に載せられてあるものがそれである。

「ゼニス」の「牧歌」といふのはジョルジオネの畫で、ルウヴル館の藏といふことである。

「聖燈」と「宿驛にて」とはロセチが青年のをり、ホルマン・ハントと共に、巴里から白耳義に旅行した時の逸詩である。わたくしはこの「宿驛にて」の詩が好きである。ゼルレエヌの矢張白耳義にゆく途中の作である。「車中吟」と何處か似通つた空氣と夢とがある。

「蛇のアンダンテ」——シモンズの詩中でも珍らしい情調と律動を持つた作である。はじめ散文詩風に譯出したが、甚だ飽き足らぬ節があつたので、現在の詩形に改めた。

「猫」——象徴派に附物の生物がここに現はれて來た。ポオドレエルがこの懶き驕慢の動物を詩律に手馴した技倆は實に素晴らしいものである。これは物凄く三昧の中に感覺的聯想を夢みるポオドレエルの自畫像でなくして果して何であらう。この動物はマラルメの「秋の嘆き」では一の精靈と呼ばれ、ゼルレエヌでは「女と猫」と題する傑作となり、かのヒュイスマンスが制作のをりにはその肩の上にいつもこの動物が蹲まつてゐた。そしてまたポオドレエルの散文詩「月のたまもの」中で

はピアノの上で不思議な啼聲をたててゐる。

「萬法交徹」——これを故上田柳村博士は「萬物照應」と譯された。英譯の中には單に「筈」となつてゐるものもある。原題は「コオレスボンダンス」である。非常に有名な詩である。ここに始めて象徴主義の「自然の殿堂」が闡明されたのである。併しこれを論理的に、哲學的に解釋して、唯心自性に沈むやうでは却てポオドレエルの意に副はぬものとなるであらう。これは何處までも藝術的に見るべきものである。即ち感覺の交徹綜合に依つて示さるる内的經驗としてである。

「海風」、「懊惱」は共にシモンズの英譯に據つた。マラルメの突き詰めた態度がこの二篇によく現はれてゐると思ふ。飛躍や實行は畢竟一の觀念であり理想であつて、現在の智的生活の平凡からは到底實現すべからざるものである。かかる矛盾の生活に於て唯我等に残さるるものは倦怠と懊惱であらねばならぬ。即ちそれは身肉の悲み、精神の麻痺である。智的現代人にしてかかる疾患に冒されぬものが果して幾人あらうか。マラルメはこれに對し理想家風に考へつめたが、彼には理想家として、その所謂實行に導くべき地上樂園の盲信がなかつた。マラルメは矢張現實に執着する藝術家であつた。併し藝術家としては餘りに醒めてゐた。夜毎に寂しき燈火が物書かぬ白紙を照らしたといふ言葉の中に、我等は彼の告白の痛切さを味ひ得るのである。いつも醒めてゐた彼の觀照は人生の通夜を守つてゐたのであらう。彼はゼルレエヌの如く一瞬間の信者、一瞬間後の無信者であり得

なかつた。そして現實生活に於ては平凡な、むしろ健全な、何等の波瀾もなき途をたどつて行つたのである。

「母音」——この名高いランボオの詩はボオドレエルの「萬法交徹」と對照すべきものであらう。即ちこの詩は内的經驗として自然法爾に交徹照應する象徴主義的殿堂に於て、その實際的内容を示す人生讃歌とも稱すべきものであらう。母音の一々に色を配列するところのみ興味を繋いで、それは一場の戯謔に過ぎぬこととならう。それ故にランボオの作詩の動機はどうあらうとも、一念の藝術にまどめられた以上、その人生内容から自然に滲み出るものとして、その色彩配列を肯定すべきであらう。兎にも角にもこの詩はランボオに取つて一篇の近代的「神曲」であり、人生の精要である。わたくしはかういふ風にこの詩を見てゐる、——無明の情意の盲動、暗黒なる煩惱海は人生の始である。それが冒險の夜明、自然の冷刻、原始的野性と眩耀に現はれ來り、次で爛熟、矯飾、頹廢的戀愛、惡徳の耽溺懊惱等と複雑なる中年の心的状態を開展し、進んで宇宙の秘奥、天運の命數に對する觀念と平和とは靜寂なる老境に萌し、一轉して、すべての上に最後の審判の喇叭は響き渡り、天地を聯ぬる大寂靜莊嚴世界の建立によりて、人生は贖罪祝福の終りに到達し、三世十方にかがやく神の眼の青き光を仰ぶべきものである。併しながらランボオの鬼才の鬼才たるところは、この小曲の全體に物凄い皮肉の調子の漲つてゐることである。白熱した水の烙印が捺されてあ

ることである。そこに表面的には解釋のつかぬ近代的情意集中が行はれてゐると見るべきであらう。そして自然の生命の光の屈折が言語に反映して直ちに表現を取つたもの、それが即ちこの詩である。それ故にこの詩はさながらに人生のアルファであり、同時にオメガである。

「眠」——諸誰めいた誇張と無關心なるが如き冷刻さを看取せよ。——小脇に二つある赤い創孔から、ランボオの嘲笑が聞えるやうではないか。

「軍中吟」——エルレエヌがブラッセルに旅行したをりの作である。ロセチの白耳義旅行の作との内容的類似は前に指摘しておいた。

「月光」——華麗であつた王政時代の享樂の夢がほの白い月光のもとに消えなつむ執着のかけを浮べてゐる。幻想の換起——ただそれだけではあるが、そこに濃やかな情調が搖曳してゐる。エルレエヌにはボオドレエルほどの特異な點がない。併しながらエルレエヌの詩には流動性がある、即ち音楽的色調がある。換言すれば言語そのものの微妙なる「かげ」と「しらべ」に徹したところがある。それは全情意的表現の極致であらう。そして言語をして、自然に自由に歌はしめたのが彼の詩である。

「こころのうちに泣く涙」、「古き調」、「秋の歌」——これ等諸篇はここに解説すべく餘りに名高い。單に心理的といふ點を捉へてみればロセチの作にはもつと深いところがある。「秋の歌」は流石のノ

ルドオもこれは健全な立派な抒情詩といったほど、何等の獨自性を具へぬが如く見える一小篇である。それにも拘らず、その表現に於て他の詩人の追隨を許さぬ境地を占めてゐるではないか。わたくしは「秋の歌」に就て第二譯を得た。

むせび泣く

秋の

ギオロン

身にぞ染む

たゆげの

わづらひ。

時は逝く、

息づみ、

あをざめ、

過ぎし日の

おもひて

しのばゆ。

吹きまどふ

あらしに、

わが身は

かしこ、ここ、

散りゆく

おち葉や。

わたくしはこの第二譯の方が寧ろひきしまつてゐて好いかと思つてゐる。

「シヤアルロア」——ヱルレエメが自分で殊に愛誦した詩であるといふことである。詩中「コボル
ド」といふのは鐵山の精。

「倦怠」——詩中「バチラス」とあるのは多分暴君ポリクテスに愛されたサモスの美少年のことであらう。この美少年はまたアナクレオンにも愛されたといふことである。

「詩法」——これはヱルレエヌの詩歌の表現の原理とも精要ともいふべきものである。第一に音楽だといふ自信がここに示され高調されてある。この音楽といふ意を一層適確に現はしたのが「ニュアンス」といふ言葉である。それはやがて「しらべ」であり、「おもむき」であり、「にほひ」であり、「かげ」であり、また我邦の定家の歌學からいへば「幽玄」ともいふべきものであらう。これは即ち言語の流動、交錯、反映、照應から生ずる微かな色合ひである。詩法の妙はその「ニュアンス」に徹することである。即ち言語の解放であり、言語みづからの性能を自由に盡さしむることである。それ故に言語の虐使をひどく嫌つた、——能辨を捕へてその首を締めよと叫ぶのはそれが爲めである。眞實の表現の前には言語の外面的技巧は俗悪で空虚なるものであつた。ヱルレエヌは一八九六年（明治二九年）の一月八日に歿したが、その歳の三月に、この詩は故上田博士に依つてわが文壇に紹介された。「サンボリスト」といふ名稱も同時に始めて傳へられた。この詩の第四節には博士の譯が添へてあつた。「何となれば吾等の望むところは影にして色に非ざればなり、あはれ影のみぞ夢を夢に結び、笛と角とを調ふべき」とあるのがそれである。この詩はわが新詩壇にヱルレエヌを紹介した最初の縁を繋いだものであつたといふことを、我々は記憶しておきたいのである。

「序歌」——巻頭にかかげておいた本集の序歌は、はじめからそのつもりで書いたものではない。ただ本集の整理に従事してゐる中に思ひ浮んだ五篇の短章をここにまとめておいたといふまでである。随つて一々の短章の間に表面上何等の連絡があるのではない。併し殆どおなじころに出来た作であるから、おのづからその情調に於て親しく相通するものがある。



有明詩集

大正十一年六月十日
大正十一年六月十日

發行所
東京橋本區
尾張町
會社
アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八番

著者 蒲原隼雄

發行 北原鐵雄
東京市橋本區新町二丁目

印刷 山本源太郎
東京市小石川區久野町五丁目

製本金

定價參圓五拾錢

北原白秋氏著 民謡集 **日本の笛** 定價貳圓八拾錢
書留送料十八錢

北原白秋氏著 詩集 **白秋詩集** 全二卷 定價各二圓八十錢
書留送料各十七錢

北原白秋氏著 小唄集 **白秋小唄集** 定價壹圓八拾錢
書留送料拾參錢

北原白秋氏著 抒情小曲 **わすれな草** 定價壹圓八拾錢
書留送料拾參錢

北原白秋氏著 **祭の笛** 定價貳圓八拾錢
書留送料拾七錢

三木露風氏著 詩集 **象徴詩集** 定價貳圓八拾錢
書留送料拾八錢

萩原朔太郎氏著 詩集 **月に吠える** 定價貳圓五拾錢
書留送料拾七錢

萩原朔太郎氏著 情學緒 **新しき欲情** 定價貳圓八拾錢
書留送料拾八錢

室生犀星氏著 詩集 **室生犀星詩選** 定價貳圓貳拾錢
書留送料拾七錢

日夏耿之介氏著 詩集 **黑衣聖母** 定價貳圓五拾錢
書留送料拾七錢

新詩會編 現代詩集 第一輯 定價貳圓五拾錢 書留送料拾八錢

牧神會編 牧神詩集 第一輯 定價貳圓貳拾錢 書留送料拾七錢

古泉千樞氏編 歌論集 竹里歌話 定價貳圓八拾錢 書留送料拾九錢

北原白秋氏著 歌話 洗心雜話 定價壹圓八拾錢 書留送料拾五錢

上田敏氏選註 小唄 定價壹圓八拾錢 書留送料拾參錢

竹友藻風氏譯 エルレエヌ選集 定價壹圓參拾錢 書留送料拾壹錢

堀口大學氏譯 サマン選集 定價壹圓五拾錢 書留送料拾壹錢

矢野峰人氏譯 シモンズ選集 定價壹圓六拾錢 書留送料拾壹錢

山宮充氏譯 ブレイク選集 定價壹圓六拾錢 書留送料拾壹錢

日夏耿之介氏譯 英國神秘詩鈔 定價壹圓六拾錢 書留送料拾壹錢

北原白秋氏著 童謡集 **とんぼの眼玉** 定價壹圓九拾錢 書留送料拾五錢

北原白秋氏著 童謡集 **兎の電報** 定價壹圓九拾錢 書留送料拾五錢

北原白秋氏譯 英國童謡 **まざあぐうす** 定價貳圓八拾錢 書留送料拾七錢

三木露風氏著 童繪入 **眞珠島** 定價貳圓八拾錢 書留送料拾七錢

竹友藻風氏譯 古詩 **ルバイヤット** 定價壹圓參拾錢 書留送料拾壹錢

5000